

早稲田大学

博士学位請求論文

マムルーク朝時代のエジプト統治に関する研究

—ナイル治水と地方行政を中心に—

早稲田大学大学院文学研究科

東洋史学コース博士後期課程

吉村 武典

Takenori YOSHIMURA

目 次

目次.....	i
凡例.....	iv
序章 マムルーク体制とエジプト.....	1
第1節 本論文の目的.....	1
第2節 先行研究.....	2
第3節 本研究の構成.....	4
第1章 バブリー・マムルーク朝時代のナイル川灌漑のシステムとその変遷.....	6
はじめに.....	6
第1節 エジプトの環境とナイル川の灌漑様式.....	6
§1 ナイル川とエジプトの地理的概要.....	6
§2 マムルーク朝時代のナイル川、エジプトの地理認識.....	8
§3 エジプトにおけるナイル灌漑の様式.....	13
第2節 コプト農事暦.....	16
§1 コプト農事暦と徴税.....	16
§2 コプト農事暦と徴税：会計年度の繰越.....	21
第3節 ナイル川の増水と測量.....	23
第4節 灌漑土手ジスルとその管理における行政慣行の変化と背景.....	30
小結.....	35
第2章 14世紀の大規模治水事業と行政慣行	
-ナーシル運河の掘削事業を中心に-	36
はじめに.....	36
第1節 運河とナイル川の増水.....	38
第2節 カイロ周辺の運河.....	40
第3節 ナーシル運河掘削の背景.....	43
第4節 ナーシル運河掘削の経緯.....	46
小結.....	51
第3章 ジスル・マンジャクの建設と水利慣行の変化.....	54
はじめに.....	54
第1節 ジスル・マンジャク建設までの経緯.....	56

§1	747/1346年の対応	56
§2	748/1347年の対応	58
第2節	ジスル・マンジャクの建設	60
第3節	ジスル・マンジャク建設の特徴	62
第4節	14世紀末から15世紀初頭の大規模水利事業	65
§1	ジスル・ハリリーへの建設	65
§2	カンタラ・シービーンの改修	66
小結		66
第4章	14世紀エジプトにおける地方行政官制度の変遷	68
はじめに		68
第1節	エジプトの地方行政区画	69
§1	マムルーク朝時代以前の行政区画の変遷	69
§2	マムルーク朝時代の行政区画	71
第2節	ワーリー職	78
§1	マムルーク朝時代のワーリー職	78
§2	マムルーク朝時代の地方行政官職とその任地、職務	79
(i)	『エジプト地誌』	79
(ii)	『黎明の書』	83
(iii)	『要覧』	84
第3節	カーシフ職	85
§1	カーシフ職についての概要	85
§2	カーシフ職の変遷	87
(i)	『黎明の書』	87
(ii)	『諸王朝行政便覧』	89
第4節	地方行政官の職務、資質	91
§1	盲目のカーシフ、アズダムルの履歴	91
§2	ウルバーンとナーイブの設置	92
小結		94
結論		96
参考文献		99

図版一覧

第1章

図版1	ナイル川流域の区分図.....	7
図版2	アル=フワーリズミーによるナイル流域全図.....	10
図版3	ハウド灌漑（ベイスン灌漑）の例.....	14
図版4	ローダ島のミクヤースの計測柱の図解.....	29

第2章

図版5	カイロ=スィルヤークース.....	37
図版6	カイロ周辺の運河.....	41
図版7	バフリー・マムルーク朝時代の大規模水利における行政手続きのモデル.....	49

第3章

図版8	14世紀後半のカイロとジスル・マンジャクの位置予想図.....	55
-----	---------------------------------	----

第4章

図版9	ファーティマ朝時代の下エジプト地域の行政区画.....	72
図版10	下エジプトの主要都市.....	76
図版11	上エジプトの主要都市.....	77

凡 例

- 1、本論文は、2013 年度に早稲田大学大学院文学研究科に提出された博士学位請求論文である。
- 2、アラビア文字のラテン文字、カタカナ転写
 - ・アラビア文字のラテン文字およびカナ表記への転写については、基本的に平凡社『新イスラム事典』（2002 年刊行）の転写・表記方法（pp. vii–viii）に依拠する。
 - ・ラテン文字転写における子音の表記はアラビア文字のアルファベット配列順に **b, t, th, j, h, kh, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḏ, ḥ, gh, f, q, k, l, m, n, h, w, y,** とする。
 - ・短母音は **a, i, u**、長母音は **ā, ī, ū**、二重母音は **ay, aw** とする。アリフ・マクスーラは **ā** とする。
 - ・ター・マルブータは省略する。ただし属格限定された名詞の末尾と、長母音に続くター・マルブータはラテン文字転写において **t** で表記する。
 - ・**h, kh, h** はいずれもハ行で表記し、**Allāh** の語末 **h** については、慣例に従いカタカナで表記せず「アッラー」とする。
 - ・定冠詞 **al-** は、ラテン文字転写については、太陽文字との同化の有無にかかわらず、統一的に **al-** と表記する。カタカナ転写においてもラテン文字による転写の方法と同様に、太陽文字に関わらずすべて「アル」で統一するものとする。そして、定冠詞「アル」と名詞の結合は、ダブルハイフン「=」を用いることとする。本稿においてはアラビア語からの転写は基本的にカタカナ転写により表示するが、各章の初出に対してカタカナ転写の後ろにラテン文字によって転写した表記をつけ、以降はカタカナのみで表記する。また固有名詞冒頭の定冠詞はカタカナ転写においては表記しない。
 - ・定冠詞 **al-** の前に接続詞 **wa**、前置詞 **li, bi** が来た場合は冠詞とつなげ、**wal-, lil-, bil-** と表記する。
- 3、地名・人名の表記
 - ・本文中の地名、人名のカタカナ表記は原則として慣例にしたがい、初出時に基綴りのラテン文字転写を表記する。

(例) アレクサンドリア (**al-Iskandarīya**)

サラディン (**Ṣalāḥ al-Dīn**)
 - ・アラビア語人名のカタカナ表記においては、通称などの個人を識別するために必要な個所のみ記す。それ以外の部分については初出のラテン文字転写で表記する。
 - ・アラビア語人名のラテン文字転写については、クンヤ (父称)、イスマ (名)、ナサブ (系譜)、ニスバ (由来名) の順に記す。ラカブ (尊称) が知られている人物についてはクンヤの前に

表記する。

- ・ナサブ中の *ibn*、*bun* については統一して *b*。「ブン」と表記する。「イブン・～ (～の息子)」として知られる人物については、*Ibn*～「イブン・～」と表記する。

4、年代の表記

- ・世紀、年月日の表記については、ヒジュラ暦/西暦 (グレゴリウス暦) で表記する。
- ・ヒジュラ暦の月名の表記は平凡社『新イスラム事典』に基づき、以下のカタカナ文字転写で表記する。ただし、ラビー月とジュマーダー月の第1、第2月はローマ数字の I、II で表記する。

1月：ムハッラム月、2月：サファル月、3月：ラビーI月、4月：ラビーII月、

5月：ジュマーダーI月、6月：ジュマーダーII月、7月：ラジャブ月、

8月：シャーバーン月、9月：ラマダーン月、10月：シャッワール月、

11月：ズー・アルカーダ月、12月：ズー・アルヒッジヤ月

- ・数字の表記に関しては、基本的にアラビア数字で表記する。序数、名詞に含まれる数値、慣用表現などについてはこの限りではない。

5、引用記事の体裁と括弧

- ・本文中で、全角2字分下げて表記されている部分は、史料からの翻訳・引用を示す。
- ・引用中の括弧については以下の通り。

()：筆者による解説、割注。

[]：筆者による補足。

6、脚注

- ・一次史料の引用については、参考文献に記載した略称を用い、該当する巻数、頁数は数値のみの簡略化した表記とする。
- ・写本史料については頁数で整理されているものは、頁数のみを表記する。フォリオ (葉数) で整理されているものは葉数に対してフォリオ記号 (fol.) を付し、表面を a、裏面を b とする。
- ・二次文献については、著者名、書名または論文名のみを表記し簡略化した。

序 章

マムルーク体制とエジプト

第1節 本論文の目的

本論文は、バフリー・マムルーク朝（1250–1382年、前期マムルーク朝）における、ナイル川を利用した灌漑水利、治水とその管理・維持に関わりをもつ地方行政官の制度的な変遷を対象とし、14世紀前半のナーシル・ムハンマド（al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn、在位1394–95年、1299–1309年、1310–41年）の第3期治世から、ブルジー・マムルーク朝（1382–1517年、後期マムルーク朝）にいたる15世紀初頭までを中心として、政治・社会的変動が行政上の慣行に及ぼした影響について考察する。

本論文の対象とする14世紀のマムルーク朝統治下のエジプト社会はスルターン・ナーシル・ムハンマドによるイクター制の整備を通じて、外来の奴隷出身の軍事集団であるマムルーク軍人層が徴税対象である農村を支配する、いわゆる「マムルーク体制」が確立された時代とされる（佐藤次高 *State and Rural Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta's and Fallahun* などの研究による）。このイクター制度は、10世紀中ごろにアッバース朝（750–1258年）カリフからイラク地域の統治を委ねられたブワイフ朝（932–1062年）において始まり、12世紀にザンギー朝（1127–1250年）によりシリア地域に、そしてアイユーブ朝（1169–1250年）の創設者サラディン Ṣalāḥ al-Dīn Ayyūb によりエジプトに導入された。ナーシル・ムハンマド時代は、このイクター制の整備（検地）を通して軍司令官であるアミールらマムルーク軍人を統制することで独裁的な権力を握り、マムルーク朝の最盛期を現出させた。しかし、彼の没後の14世紀後半以降のエジプト社会はアミールたちが権力闘争を繰り返し、同時に黒死病などの疫病の度重なる流行は同王朝の衰退を招いたとされる。その盛衰の諸相を明らかとすることは、マムルーク朝史研究の中心的関心のひとつである。

本論文の対象もエジプトの政治、社会が変容した14世紀であるが、その変容の過程をエジプトの灌漑農業をはじめとするエジプト独自の慣習との関わりから考察を行いたい。イクター制下のエジプト社会において、古来エジプトが有していた様々な慣習や文化が、イスラーム王朝下でどのように変容、維持されてきたか、つまり、外来の制度（本論ではマムルーク軍人とイクター制度）と特定地域であるエジプトが有する文化（本論ではナイル治水）とがいかにかに共生・融合したかを考察することである。以上の関心をもとに、14世紀のマムルーク朝統治下のエジプトにおけるナイル川をめぐる政治的慣行を見ていくこととする。

第2節 先行研究

本論文が対象とする問題背景に関わる主要な研究について述べる。

レヴァノーニーA. Levanoni の『マムルーク朝史における転換点—ナーシル・ムハンマド・イブン・カラーウン第3期治世 *A Turning Point in Mamluk History: The Third Reign of al-Nāṣir Muḥammad Ibn Qalāwūn (1310-1341)*』はナーシル・ムハンマドの第3期治世を中心に、マムルーク朝の政治構造の変化を分析した研究である。この書においてレヴァノーニーはナーシル・ムハンマドをバイバレス I 世（在位 1260-77 年）やカラーウン（在位 1279-90 年）のスルタンの権力基盤の強化を図る諸政策の継承者であることを認めつつ、同時に彼らが築いてきたマムルーク朝の政治体制を質的に変容させたことを指摘している。それは、イクター制を通じてアミールら軍人の統制をはかりつつ、自らの権力基盤として育成したマムルーク軍団の政治影響力の増大を招き、没後の政治的混乱を招いたとする。

また経済的側面において、ナーシル・ムハンマド没後のマムルーク朝の経済的衰退は、黒死病による人口減少や自然災害による穀物価格の高騰の他に、すでにナーシル・ムハンマド時代から農工業の発展がエジプトでは頭打ちとなり、キプロスやイタリアなどのヨーロッパ側にエジプトに匹敵するかそれ以上の産業の発展が始まったことを一つの要因として挙げている。それに加え、ナーシル期の度重なる建設事業や農地開発も都市生活を繁栄に導いたかに見えたが、その維持に経費がかかりすぎたため、逆にナーシル・ムハンマド没後にはそれが維持できなくなり荒廃に帰したことを挙げ、ナーシル・ムハンマド治世の欠陥を指摘する。

また、財政政策の変化から 14 世紀後半から 15 世前半を後期マムルーク朝体制への移行過程として分析した五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進—後期マムルーク朝の研究—』は、マムルーク体制の転換についての近年における極めて重要な研究である。五十嵐は、先に挙げた佐藤が軍事体制である「マムルーク制度」と土地行政制度である「イクター制度」を一体として捉え、マムルーク朝の政治・社会の構造変化を論じる点に疑問を示し、それらを別個に考察すべきとした。独裁的な権力を握ったナーシル・ムハンマドの没後は、有力アミールが権力を獲得するため増員した兵卒身分のマムルーク軍人達が政権を左右する政治集団となった。最終的には彼らの利益を代表するものがスルタン位に就く、15 世紀の後期マムルーク朝時代の支配体制が成立する。この背景のもとスルタンはマムルーク軍人らに富の分配を行うことで権力の維持を図ったが、五十嵐はこの支配構造の質的転換をマムルーク朝後期の財政制度の変遷の過程を基に明らかにした。この中で本論が対象とする 14 世紀後半が、15 世紀に続く後期マムルーク朝時代の「マムルーク体制」の基本的な構造が確立された時期とする。しかし、いずれの研究においてもイスラーム史上の政治体

制の変化を中心におき、統治対象である支配領域内の慣習の変化については、政治体制の変化に伴う二次的な変化としてとらえている点で共通性をもつ。

一方、ユドウィッチをはじめとするマムルーク朝時代の西アジア、地中海域を対象とした経済史分野からは、14世紀後半に始まる黒死病の流行を契機に発生した人口減少が及ぼした影響を重視する。ユドウィッチによる論文「イングランドからエジプトへ1350-1500年 *England to Egypt, 1350-1500: Long Term Trades and Long Distance Trade*」において、14世紀後半に見られるマムルーク朝社会の衰退は経済減退がもたらしたと指摘する。人口減少によって農村や都市の経済活動が停滞し、イクターから税として納められる農産物は工業製品より安価なためイクター収入を基盤としたマムルーク軍人層が経済的な打撃を受けた。その結果、イクター収入の減収を補うため過酷な徴税手段を採り、人口が減少した農村社会の荒廃に拍車をかけ、マムルーク朝の支配体制に影響を与えたとする。

最後に本論文の関心にかかわる研究として、ユドウィッチの論を発展的に継承し14世紀後半から15世紀のマムルーク朝エジプト経済の動向について農業を中心に分析を行ったのが、ボーシュ *Stuart J. Borsch* 『エジプトとイギリスにおける黒死病：比較研究 *The Black Death in Egypt and England: A Comparative Study*』である。ボーシュは、イクター制下のエジプトの農村支配の特徴として、(1)イクター保有者の不在地性と血統による継承の不可、(2)直接農民との折衝に当たる徴税請負人の役割と農民支配の形態を挙げている。そして、ナイル川を利用した灌漑農業の特徴について、毎年のメンテナンスの重要性とその労力の多さ、13世紀末から14世紀前半にかけての大規模運河の浚渫工事が果たした農地の拡大政策などについて触れ、ナイル川を利用した灌漑農業に完全に依存するエジプト経済の発展の脆さを指摘する。

黒死病の影響で発生した農村人口減少が、ナイル灌漑システムを維持していくことを困難にし、農村社会を荒廃させる要因となったとする。この結果、イクター受給者たちは収入を確保するために農地からの徴税を強化し、水利施設の維持のために農民を強制的に徴用したため、より農村社会の荒廃が進む結果となったとしている。また、農村人口の減少と農村社会の荒廃は、牧畜を営む周辺のウルバーン（アラブ遊牧民、ベドウィン）勢力を伸展させ、農地を牧草地へと転換させていった。上・下エジプト地域で、大きな勢力となったウルバーンは、たびたび反乱をおこし治安が悪化したため、ますます農地の回復は困難となる結果となったとする。黒死病の影響として、イクター受給者が農民への徴税を強化したとする結論については概ね他の研究と同様であるが、小麦価格と都市労働者の収入について取り上げ、エジプトの労働者の賃金に関して穀物価格は上昇するのに対し、賃金は2分の1から多くて20分の1へと下落することを指摘したことは、当時の経済状況を考える上で重要な示唆を含んでいる。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では特に14世紀から15世紀にかけての変動期におけるマムルーク朝政府のエジプト統治の様相を考察するため、アラビア語の同時代史料(年代記、地誌、伝記集、行政書など)をもとに、ナイル川の灌漑農業、大規模水利、地方行政制度の変遷を取り上げて検討を行う。

第3節 本研究の構成

本研究ではこれまでの中央政府の動向に偏ったマムルーク朝の政治社会史に対し、エジプトという特殊な地理環境から発生した固有の慣習を通して、いかに支配王朝がそれに適応して地域(都市を含む)の管理を行ったかについて着目し考察を行う。第一にエジプトの固有の慣習としてナイル川の利用と王朝政府との関係を対象として考察を行う。ナイル川を利用した水利には灌漑農業、水運、都市部の飲料水の供給等が挙げられ、それぞれに王朝政府が関与した様々な水利事業が確認される。

本論文は、序章、第1章から第4章、結論によって構成される。

第1章では、マムルーク朝時代の政治慣習として、どのようにエジプトの地理的、歴史的特質を踏まえ管理・統制を行っていたかについて考察をおこなう。ナイル川およびエジプトの地理情報、定期的な増減水を繰り返すナイル川の水位測定の慣習が、先行する諸王朝から継承された部分とマムルーク朝時代の独自性について触れた後、マムルーク朝時代のナイル川を利用したエジプトの灌漑農業において最も重要な要素とされる灌漑用の土手(ジスル)の管理に関する14世紀後半に起きた政治的慣習の変遷を分析する。

第2章では、14世紀前半のマムルーク朝の大規模水利事業を手掛かりに、ナイル治水に関する政治的慣行を検討する。水利事業の中に見られる技術的側面にも留意し、1350年にカイロ西部に建設されたナーシル運河を例に取り上げ、14世紀前半の治水慣行の変化について分析を行う。第1章で取り上げた灌漑に関わる水利慣行の変化との共通性、平行性について考察を行う。

第3章では、引き続き14世紀後半の大規模水利事業の慣習と特徴について検討する。特に黒死病がエジプトで猖獗を極めた1348年の翌年に行われた、通称ジスル・マンジャクと呼ばれるカイロ郊外のナイル川で行われた政府主宰の水利事業を取り上げる。黒死病の前年1347年から始まったカイロのナイル河岸における渇水は飲料水の高騰や水運に支障を与え、首都の都市機能にも影響を与えた。ジスル・マンジャクはこの渇水を解消することを主たる目的としたが、この水利事業が示すナーシル・ムハンマド没後の水利事業の変化をその建設過程の詳細を通して、14世紀後半の行政慣行の変化について考察する。

第4章では、ナイル灌漑、および治水事業において重要な役割を果たしたと考えられる、地方行政官について取り上げる。バフリー・マムルーク朝時代のエジプトの諸地方にはアミールの中から選任されたワーリーと呼ばれる地方行政官が派遣され、スルターン直轄のイクター、政府管理の灌漑土手の整備、アミールたちのイクター地における徴税の監察などを行ったと考えられている。また、14世紀にはワーリーに加えて上・下エジプト両地域に派遣されたカーシフと呼ばれる地方行政官が派遣されたことが知られる。これらの地方行政官の制度的な変遷を通して、エジプトの地方統治の様相を概観するとともに14世紀から15世紀にかけてのエジプトにおける政治・社会的変動との関連を考察する。

結論においては、各章の分析結果から得られたマムルーク朝統治下の14世紀を中心とするナイル治水行政とそれに関わる地方行政制度に現れた政治・社会の変動についての各知見をまとめ、今後の研究課題と展望を提示する。

第1章

バブリー・マムルーク朝時代のナイル川灌漑のシステムとその変遷

はじめに

本章では、ナイル川を利用したエジプトの灌漑農業について概観する。灌漑システム、農事慣行といったエジプト地域独特の農業システムについて理解するために、近現代のナイル川及びエジプトの地理と環境の情報とマムルーク朝時代の地理書の情報を検討し、当時のナイル観を概観する。そのうえで、特にバブリー・マムルーク朝時代に行われていた農業慣行について、暦、ナイル川の計測、灌漑設備の維持を中心にイスラーム史以降のエジプトの統治の歴史を踏まえながらその特徴を考察する。また、その中でもマムルーク朝時代の徴税、灌漑維持の政策において重要な役割を持っていたと考えられる、中央の王朝政府が直接関わりをもつ政府管理の灌漑士手 (jisir) の行政慣行の変化とその要因を検討する。

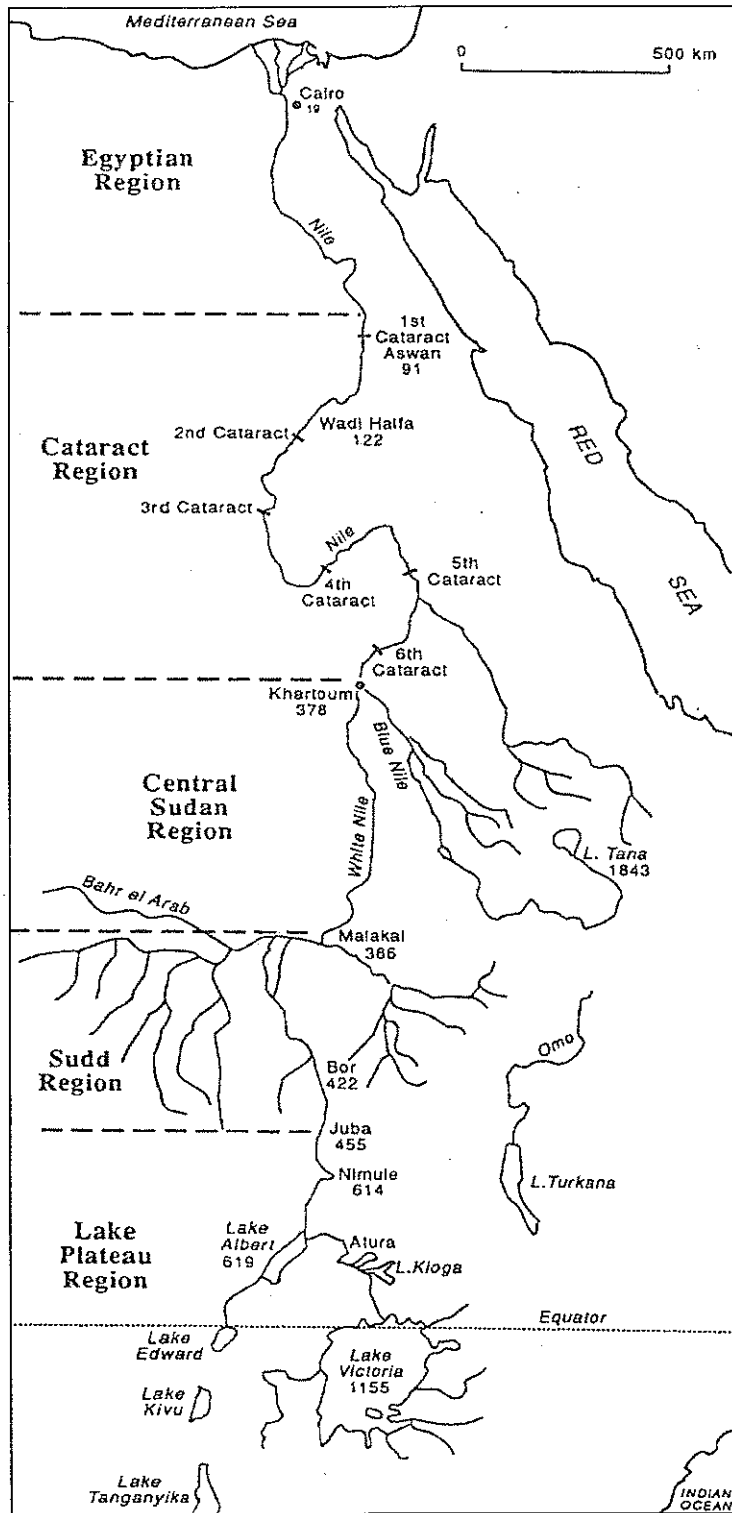
第1節 エジプトの環境とナイル川の灌漑様式

§1 ナイル川とエジプトの地理的概要

エジプトは全長 6,825km、流域面積 3,110,000 平方 km に及ぶナイル川の最下流に位置し、現在のエジプトにおいてその流域は全長 1,350km の長さに及ぶ¹。年間の降雨量が国全体で 50mm、カイロ周辺で 29mm、地中海沿岸のアレクサンドリアで 190mm と降雨量の少ないエジプト地域では²、一部のオアシス地域を除いて、ナイル川流域とその灌漑により導水された地域のみが農耕可能な土地である (現在のエジプトの農地の割合は国土の 2.9%)。また、現在では上エジプト地域の季節は 12 月から 2 月頃が冬期、4 月から 10 月頃が夏期にあたる。降雨は冬期に見られるが、夏期は乾燥期であり、かつ砂嵐の発生も見られる。一方、下エジプト地域は 10 月から 4 月ごろが冬期にあたり、5 月から 9 月ごろが夏期に当たる。

¹ ナイル川の長さ、流域面積については諸説ある、本論では以下を参照した。鮎川登「エジプトにおけるナイル川の水資源開発」24 頁；加藤博『ナイル』7 頁。

² 例えばその他の地域降雨量は、イラク約 220mm/年、イラン約 228mm/年、日本約 1,700mm/年、フランス約 870mm/年、アメリカ合衆国約 720mm/年、インドネシア約 2,700mm/年とエジプトの降水量は世界的にも、西アジア地域においての比較においても降水量が極めて少ない地域の 1 つと言える (国土交通省 HP: <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/hakusho/h20/data/html/js004090.html> (2014 年 1 月 3 日最終アクセス))。



図版1 ナイル川流域の区分図

(Said, "Origin and Evolution of the River Nile," p.18 .より転載。 *図中の数値は海拔)

西アジア地域において、農業形態は天水による農業と河川を利用した灌漑農業に2分され、天水農法により農耕が営まれる地域としては、シリア、イラク北部が挙げられる。灌漑農法による農耕はナイル川の下流域であるエジプトとチグリス川、ユーフラテス川両河川の最下流に位置するイラク南部で行われていた。集約的な労働力を必要とする灌漑農法が採用された地域において、古代より文明が発生したことはよく知られている。

ナイル川の流域全体の概要について述べると、赤道の湖群高原のヴィクトリア湖、エドワード湖、アルバート湖を水源とするジャバル川とエチオピア高原を水源とするソバト川が合流し白ナイルとなる。この白ナイルはスーダンのハルツームでタナ湖を水源とする青ナイルと合流しナイル川となる。この後、ナイル川は第6カタラクト (cataract: 急流区間) を経て、エチオピア高原を水源とするアトバラ川と合流する。そして、第5カタラクトから第2カタラクトを経てワジハルファを越えてエジプトに入り、第1カタラクトを経てエジプト最南部のアスワン *Aswān* に至る。アスワン以北はナイル渓谷 *Wādī al-Nīl* を流れ、カイロの北部でロゼッタ支流とダミエッタ支流に分かれ、最終的に地中海へと注ぐ。なお、アトバラ川の合流以降は乾燥地域を流れ、合流する支流はない³。

白ナイルはスーダン南部のスッドと呼ばれる大湿地帯における河川水の大量蒸発により水量調整が行われ、年間を通して下流への流量に変化がない。一方、青ナイルは春から夏にかけて雨期を迎え、大量の増水を引き起こす。これにより、ハルツームで合流したナイル川は夏季に増水し、エジプト地域へと流入する。従って、ナイル川流域で増水を利用した灌漑農業を営めるのは最下流のエジプトのみであった。

§2 マムルーク朝時代のナイル川、エジプトの地理認識

前近代のエジプト、特にマムルーク朝時代の知識人たちはどのようにナイル川とエジプトの地理を理解していたのであろうか。ここでは、マムルーク朝時代に編まれたナイル川に関する地理書、ファダーイルの書 (以下「ナイル地理書」) を基に考えてみたい。

ファダーイル (*faḍā'il*) の原義は、美德や美質を表すファディーラ (*faḍīla*) の複数形である。文学上では人やもの、都市や地域などを対象にそれぞれの特徴や性質についての賛美が記された書物をさす。ファダーイルの書が取り扱う代表的なモチーフとしては、クルアーン、預言者、教友 (サハーバ) などのイスラームの教えの根本にかかわるものや⁴、メッカ、メディナ、イエルサレム (ク

³ 鮎川登「エジプトにおけるナイル川の水資源開発」19頁。

⁴ 代表的なものとして、Abū 'Ubayd (d. 224/837), *Kitāb al-Amthār*, *Kitāb Faḍā'il al-Qur'ān*; Wahb b. Wahb (d. 200/815), *Faḍā'il al-Anṣār*; al-Shāfi'ī (d. 204/820), *Kitāb Faḍā'il Quraysh wal-Anṣār*; Aḥmad Ibn Ḥanbal (d. 241/855), *Kitāb Faḍā'il al-Anṣāb* などが挙げられる。

ドゥス)などの聖地などが挙げられる。そのほか、ダマスクス、バグダード、カイロなどの諸都市や諸地域、預言者の子孫(サイイド)、諸民族、部族などがある。また、ファダーイルが扱う事象は広範におよび、ラジャブ月やラマダーン月などのヒジュラ暦において宗教的に重要な月、バスマラ、ジハード、剃髪、曜日、弓、コーヒーなどにもファダーイルの書が編まれた⁵。

以上の多岐にわたるファダーイルの書のうちエジプト地域もしくはナイル流域を対象にしたファダーイルの書は、マムルーク朝以前から著述されており、代表的なものとしてキンディー‘Umar b. Muḥammad al-Kindī (4/10世紀没)の『エジプトの美德 *Faḍā’il Miṣr*』、イブン・ズラーク Ibn Zūlāq (387/997年没)の『エジプトの美德と歴史の書 *Kitāb Faddā’il Miṣr wa Akhbār-hā wa Khawwās-hā*』などが挙げられる⁶。これらが書かれた10世紀から11世紀はエジプトにおいてイフシード朝、ファータィマ朝がアッバース朝支配から独立した地方政権を形成した時期であり、エジプト地域に特化したファダーイルが記される背景のひとつと考えられている⁷。

ここではマムルーク朝時代に記された、以下の4つの「ナイル地理書」を基に考察を進める⁸。

- 1、ムヌーフイー-Shihāb al-Dīn Abū al-Khayr Aḥmad b. Muḥammad b. Muḥammad Ibn ‘Abd al-Salām b. Mūsā al-Munūfi al-Shāfi‘ī (931/1524-5年没)『幸福なるナイルの記録における長大なる氾濫 *Fayd al-Madīd fi Akhbār al-Nīl al-Sa’id*』
- 2、バドウル・アル=ディーン・ブルキーニー-Badr al-Dīn Muḥammad b. ‘Umar b. Raslān b. Naṣīr b. Ṣāliḥ b. Silāj al-Dīn al-Bulqīnī al-Shāfi‘ī (791/1389年没)⁹『増水するナイルの調査の達成 *Nayl al-Rā’ida fi al-Nīl al-Zā’ida*¹⁰』
- 3、アクファフシー-Shihāb al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad b. al-‘Imād b. Yūsuf b. ‘Abd al-Nabī al-Aqfahsī al-Qāhirī al-Shāfi‘ī (808/1406年没)¹¹『ナイル録 *Akhbār Nīl Miṣr*』
- 4、マハツリー-Jalāl al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad b. Ibrāhīm al-Maḥallī (864/1459年没)、スユーティー-Jalāl al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān al-Suyūfi (911/1505年没)¹²『記録におけるナイルの始まり *Mabda’ al-Nīl ‘alā al-Tahrīr*』

⁵ *EF*^{2nd} s. v. [faḍīla] (written by R. Sellheim); *Kashf al-Zumūr*, 2:1126–1128, 1274–1280.

⁶ *EF*^{2nd} s. v. [al-Nīl] (written by J. H. Kramers).

⁷ 清水宏祐「十字軍とモンゴル」24–29頁; 大稔哲也「参詣書と死者の街からみたコプトとムスリム」22頁。

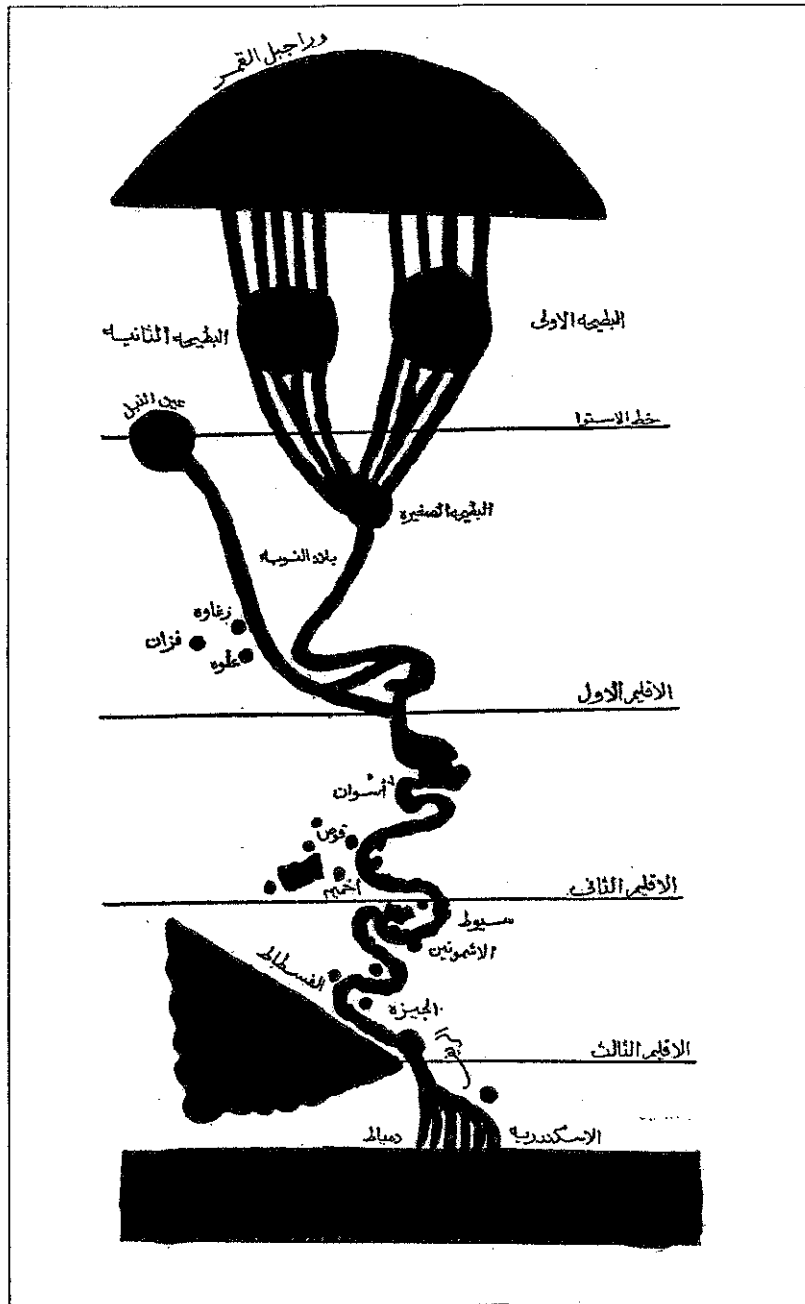
⁸ 史料の概要と諸写本の関係については、拙著「マムルーク朝時代のナイル地理書」032–037頁を参照。

⁹ *al-Durur al-Kāmina*, 4:223–224; *Manḥal*, 10:236–238.

¹⁰ Hamdīによればこの作品は Shihāb al-Dīn al-Hijājī (d. 875/1470) の作品とされている (Muḥammad Ḥamdī al-Manāwī, *Nahr al-Nīl fi al-Maktaba al-‘Arabīya*, p. 228).

¹¹ *Inbā’ al-Ghumr*, 2:332; *Sulūk*, 4:25; *Daw’*, 2:47–49; *Shadharāt al-Dhahab*, 2:73; *A’lām*, 1:178.

¹² *Daw’*, 7:39; *Ḥusn*, 1:382–383; *Shadharāt al-Dhahab*, 7:303; *Akhbār Nīl Miṣr*, 14.



図版2 アル=フワーリズミーによるナイル流域全図

(Muḥammad Ḥamdī al-Manāwī, *Nahr al-Nīl fī al-Maktaba al-'Arabīya*, p. 206 より転載)

それぞれの「ナイル地理書」の構成には異同が見られるが、共通にみられる項目として、ナイル源流とその流域に関する情報である。しかし、それぞれの「ナイル地理書」の引用元には異同が見られる。ここでは、まず共通のナイルの源流と流域についての描写を紹介する。

ナイル川の源流はクムル山 *Jabal al-Qumr* に端を発し、そこから10ないしは12の川が流れ出る。

それらはそれぞれ5つないし6つの川は2つの湖 (buḥayra/baṭīḥa) に流れ込む。その後それぞれの湖から3つ、計6つの川が流れ出でる。これらの川はその後下流のもう1つの湖に集まる。この湖から1本の川が流れ出で、これをナイルと呼んだ。その後、スーダン、ヌビアの土地を過ぎ、エジプトに達する。ここまでが第1地域 (al-iqlīm al-awwal) である。エジプト最南端の街であるアスワンからアスユートまでが第2地域 (al-iqlīm al-thānī) である。ここから地中海の河口までが第3地域 (al-iqlīm al-thālīth) とされる¹³。

以上のように、前近代に理解されていたナイル川の地理的理解は、現在の地理情報と比べ、特に下流域では遜色はない。ただし、ナイルの水源とされるクムル山に関しては、別にカマル (Qamar) 山と読む場合があり、これは月に由来するという¹⁴。また、カムル (Qamr) 山と読む場合もあり、この場合は白く輝くことに由来する。クムルと呼ぶ場合も白いという色から来る説と鳥の種類 (qumrī : キジバト) に由来するという説が紹介されている¹⁵。

表1 ナイルの源流と流域に関する引用の典拠

著者名	書名	史料
Ibn Kathīr	<i>Ta'rikh-hu Kabīr</i>	F
Ibn al-Qayyim	<i>al-Hudā al-Nīl</i>	F
al-Idrīsī	<i>Nuzhat al-Mushtāq fi Ikhtirāq al-Āfāq</i>	F
Shihāb al-Dīn Ibn Imād	<i>Akhbār Nīl Miṣr</i>	F
al-Mas'ūdī	<i>Murūj al-Dhahab</i>	F, A, M
al-Tha'labī	<i>Qīṣaṣ al-Anbiyā'</i>	F
al-Qāsim b. Ghānim al-Maqdisī	書名なし	F
Abū Muḥammad 'Abd Allāh b. Aḥmad al-Aswānī	<i>Akhbār al-Nūba min Akhbār al-Nīl</i>	F
al-Waṭwāt al-Kutbī	<i>Manāhij al-Fīkr</i>	F, M
著者名なし	<i>Durar al-Tijān</i>	F
Ibn Zūlāq	<i>Faḍāil Miṣr wa Akhbār-hā wa Khawāṣṣ-hā</i>	F, A

¹³ *Fayḍ al-Madīd*, 4-6; *Akhbār Nīl Miṣr* (MS1), 57-60; *Nayl al-Rā'ida* (1), 14-15; *Mabda' al-Nīl*, 2-3, 12-14. (図版2を参照。)

¹⁴ *Murūj al-Dhahab*, 1:205; *Subḥ*, 3:226.

¹⁵ *Mu'jam al-Buldān*, 5:334; *Mushtarak*, 430.

Muḥī al-Dīn al-Nawawī	<i>Tahdhīb al-Asmā' wal-Lughāt</i>	F
Ibn Sīrābyūn	<i>al-Aqālīm al-Ṣab'a</i>	A
al-Jāhiz	<i>Kūtāb al-Amṣār</i>	A
Ibn Jinī	<i>al-Khaṣā'is</i>	A
Ibn 'Abd al-Ḥakam	<i>Futūḥ Miṣr wal-Maghrib</i>	A
Ibn al-Athīr	<i>al-Nihāya fī Gharīb al-Ḥadūth wal-Athar</i>	A
al-Azhārī	書名なし	A
Ibn al-Manzūr	<i>Lisān al-'Arab</i>	A
al-Nurwayrī	<i>Nihāyat al-'Arab</i>	N
al-Qazwīnī	<i>'Ajā'ib al-Makhlūqāt</i>	N, M
著者名なし	<i>Manāḥij al-Fikr</i>	M
al-Maqrīzī	<i>al-Mawā'iz wal-I'tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār</i>	M

F: *Fayḍ al-Ma'ād fī Akhbār al-Nīl al-Sa'īd*;

N: *Nayl al-Rā'ida fī al-Nīl al-Zā'ida*;

A: *Akhbār Nīl Miṣr*;

M: *Mabda' al-Nīl 'alā al-Tahrīr* (Part of al-Suyūfī).

以上、それぞれの作品が直接引用しているアラビア語の古典的なファダーイル、地理書を示した。今回取り上げた4点の「ナイル地理書」において共通に見られる引用の典拠としては、マスウーデーAbū al-Ḥasan 'Alī al-Mas'ūdī (346/956年没)、イブン・ズラークなどの古典的ファダーイル、またカズウィーニーZakariyā' b. Muḥammad b. Maḥmūd al-Qazwīnī (682/1283年没)、ヌワイリーShihāb al-Dīn Aḥmad Nuwayrī (733/1333年没)など、同時代の著作からの引用も見られる。特にマスウーデーからの引用は最も多く見られ、ひとつの定型をなしていたとみられる。一方、ブルキーニー、スユーティーにはマムルーク朝時代に入ってから史料を引用している点は特殊である。また、スユーティーの場合、『講義の美德 *Husn al-Muhādara fī Ta'rikh Miṣr wal-Qāhira*』においても多くのマクリーズィーからの引用が見られ、同様の傾向がみられる。

一方で、ナイルの長さ、流域の区分けについては、史料ごとに若干の異同が見られる。

「3,000 ファルサフ (farsakh)、荒蕪地域 (khuṛāb) を4ヶ月、スーダンを2ヶ月、イスラームの地 bilād al-Islām (エジプト) を1ヶ月流れる。イブン・ズラーク曰く、エジプトを1ヶ月、ドゥンクラ Dunqula¹⁶を1ヶ月、荒蕪地域を4ヶ月流れる。」¹⁷

「荒蕪地域を3ヶ月、ヌビア地域を2ヶ月、イスラームの地を1ヶ月流れる。」¹⁸

「荒蕪地域を4ヶ月、ヌビア地域を2ヶ月、イスラームの地を1ヶ月流れる。」¹⁹

以上のように流域の長さには差があるものの、ナイルの源流からヌビアまでは荒蕪地、ヌビア地域(ドゥンクラ)、アスワンから地中海までのエジプト地域をイスラームの地 (bilād al-Islām) として3つに分けている点は前述した通りである。このように、アスワンから地中海までの地域をイスラーム地域として、エジプトの領域と考え、アスワン以南をイスラームの圏外とする見方が一般的であったようである。これはイスラーム地域をエジプトに置き換えればほぼ現在のエジプトとアスワン以南の領域と一致する。先ほど述べたように、アスワンの南部にあるカタラクトが自然の国境として機能していたことが明らかである。

§3 エジプトにおけるナイル灌漑の様式

アスワン・ハイダム建設前のエジプトでは、この夏季に定期的に増水するナイル川の水を運河、水路を使い導水し、灌漑用の土手(後述)で囲まれた圃場 (ḥawḍ) を灌水させるベイスン灌漑 (basin irrigation)、アラビア語でライイ・アル=ハウド (rayy al-ḥawḍ) が行われていたと考えられている。地理的状況の異なる上下エジプトの両地域では若干ではあるが灌漑様式が異なり、カイロからアスワンまでの上エジプト地域(ナイル上流域 al-Ṣa'īd または南部地方 al-wajh al-Qibḷī など:以下統一して上エジプト地域と表記)では、ナイル川の両岸がナイル溪谷に挟まれ農地面積が狭いため、ナイル川の本流沿いに平行して農地が展開し、ナイル川本流から取水した灌漑水路と灌漑用の土手を利用し灌水し、再びナイル川本流に排水する方法がとられた。また、この上エジプト地域におけるベイスン灌漑はナイル川の西側流域に導入され、東岸には異常増水の際の安全弁として農地化されなかった²⁰。

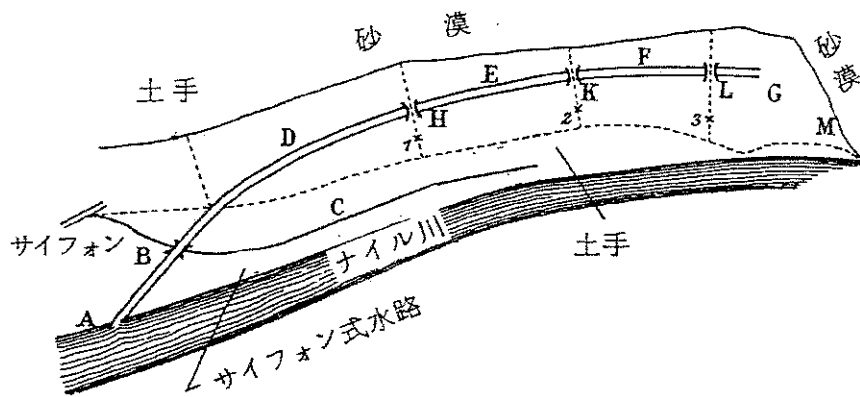
¹⁶ または Dumqula とも。ヌビア地域の中心都市で同地を統べる王の居城があった (*Mu'jam al-Buldān*, 2:480-481)。

¹⁷ *Fayd al-Ma'ād*, 8-9.

¹⁸ *Mabda' al-Nīl*, 2.

¹⁹ *Nayl al-Rā'ida* (1), 15; *Mabda' al-Nīl*, 13.

²⁰ 石田進「エジプト農業を支えた「水」の知恵」34-35頁。



図版3 ハウド灌漑（ベイスン灌漑）の例

(鈴木弘明『エジプト近代灌漑史研究』19頁より転載)

図版3は上エジプト地域で行われた、ベイスン灌漑の例を概念化した図版である。19世紀末から20世紀前半にエジプトで活躍したイギリスの農業技術官僚ウィルコックス W. Willcocks による、現在でもナイル灌漑研究の基本書とされる『エジプトの灌漑 *Egyptian Irrigation*』からの引用である。左側が上流（南）となる。Aは灌漑水路の取水口、D、E、F、Gは耕作地で、点線で示されるナイル川に平行する灌漑土手とナイル川に垂直に作られ耕作地を区切る灌漑土手によって区切られる。耕作地の面積は5,000～15,000 エーカー（約2,000～6,000ha）で、平均して長さ（南北）10km、幅（東西）4kmとされる。この耕作地を区切る土手の規模についてウィルコックスは高さ3.5m、土手上部の幅は6m、傾斜角度1×1（45度）であるとしている（つまり基底部は $6+3.5\times 2=13\text{m}$ となる）²¹。また、H、K、Lは水位と耕作地を分ける土手に作られた水量調整の水門（regulator）である。Aは通常土壌で塞がれ、毎年8月12日頃にナイル川の増水が十分であれば、A、H、K、Lを開放し耕作地Gに至るまで水を通して30cm灌水するまで開放したままにする。Gの灌水が終了するとLを閉じFを灌水させる。このように順次に低地から高地の耕作地へと灌水させ全ての耕地が灌水すると再びH、K、Lを開放しMからナイル川へと排水する²²。

一方、カイロ以北の下流域である下エジプト地域（デルタ地帯、ナイル下流域 Ard al-Asfal または北部地域 al-wajh al-Bahri：以下、統一して下エジプト地域と表記）はナイル川がカイロの北、約25km

²¹ Willcocks, *Egyptian Irrigation*, vol. 1, p. 305.

²² Willcocks, *Egyptian Irrigation*, vol. 1, p. 306. Cf. 鈴木弘明『エジプト近代灌漑史研究』18-21頁；長沢栄治『エジプトの自画像』257-261頁。

のあたりで西のロゼッタ支流と東のダミエッタ支流に分かれる。この2つの支流に挟まれた内側の扇状地（デルタ）と各支流の外側で灌漑可能な土地においてベイスン灌漑が行われた。この地域の灌漑は上流域と同じくナイル川の支流または運河、水路を利用して、灌漑用の土手を利用し耕作地を溜池化して灌水させる。しかし、排水については上流域と異なり、耕作地の場所により支流、運河、または地中海岸の沼沢地の湖²³へと異なる。

上記の2地域以外の方法で農業がおこなわれた地域として、ファイユーム地方、オアシス地域があげられる。上エジプト地域に属するファイユーム地方では、ナイル川から掘削されたユースフ運河を利用し、増水期の河水を湖（カールーン湖）にため、減水期には取水口を閉じ、水門で水量を調整することで通年灌漑が可能な地域である。そのため、ファイユーム地方は穀倉地帯として有名で歴代王朝の重要な食糧供給源として特別な地位を得た²⁴。一方、ナイル川の西側に広がるリビア砂漠（wāḥāt：砂漠）に点在するハルガ al-Khārija、ダフラ al-Dākhila、ファラーフラ al-Farāfra などのオアシスでは地下水をくみ上げて農地に灌水する農法で乾燥地に強いナツメヤシの生産が行われた。また、これらオアシス都市は砂漠を経由するサハラ交易の中継地点として南部のスーダン、西部のガーナなどの領域とナイル流域をつなぐ機能も果たしていた²⁵。

以上の「古代から連続と続く」とされるベイスン灌漑が前近代のイスラーム王朝統治下のエジプト社会においても同様であったかということについては、史料の上では判然としない。先に述べたようにエジプトの灌漑方式は「ベイスン灌漑」としてその様式が説明されてきたが、14、15世紀の 맘ルーク朝時代の史料では、灌漑については「ジスルのこと *amr al-jisr/al-jusūr*」または導水を意味するライイ (*rayy*) と表記されることが一般であり、ハウドの語はほとんど見られない。例外として、ファーティマ朝からアイユーブ朝にかけてエジプトの徴税についての記録を残すマフズミー Abū al-Ḥasan ‘Alī b. ‘Uṭmān al-Makhzūmī al-Qurashī (585/1189年没) の『エジプトの地租に関する知識の道標 *al-Minhāj fi ‘Ilm Kharāj Miṣr*』(以下『知識の道標』)には、ナイル川が増水し農地が冠水した後に作製される灌漑文書 (*qānūn al-rayy*) に記載される耕作地面積が「ハウド」を単位に記載されていることを伝えているが²⁶、これも灌漑様式を直接指しているわけではない。また、19世紀にエ

²³ ナイル川の河口には地中海とつながる湖として西から、アレクサンドリア周辺にマリユート湖 *Buḥayrat Maryūt*、イドウケー湖 *Buḥayrat Idkū*、2つの支流の間のロゼッタ寄りにブルルス湖 *Buḥayrat al-Burlus*、ダミエッタの東側にマンザラ湖 *Buḥayrat al-Manzala* がある。

²⁴ ファイユームはアラブ・ムスリム軍がエジプトに侵攻した際に最初に攻略された場所としても知られる。少なくともウマイヤ朝時代の始めまでムスリム全体（ウンマ）に所属するハラージュ地として捉えられていた (*Futūḥ Miṣr*, 101; 森本公誠『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』4, 321頁)。

²⁵ *Masālik al-Absār* (2), 100; *Ṣubḥ*, 3:389–390; Muḥammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfī lil-Bilād al-Miṣriyya*, vol. 2–4, pp. 242–245, 249–251.

²⁶ Sato, *State and Rural Society*, p. 193; 佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』306–307頁。

ジプト人技術官僚としてイスマーイール治世下において活躍したアリー・ムバーラク‘Alī Mubārak (1893 年没) がエジプトの農業の近代化について記した『ナイルの統治に関する考察の精華 *Nakḥbat al-Fikr fī Tadbīr Nīl Miṣr*』においても「ハウド」という語によるナイル川の灌漑様式の説明は見当たらない²⁷。「ベイスン灌漑」という表現は先に挙げたウィルコックスをはじめとする近代の西欧の知識人、技術者によって確立された可能性がある²⁸。以上のように、ナイル川を利用したエジプトの農業は、古代に確立された農業システムが 19 世紀初頭にムハンマド・アリーによる長繊維綿花の生産拡大のために「夏運河」の掘削と水量調整のための堰の建設により通年灌漑への移行にいたるまで²⁹、基本的に維持されたとされる。

このナイル川を利用した灌漑の様式はイスラーム王朝下においてどのように維持・管理がなされてきたのであろうか。ナイル川の増水はエジプトに富をもたらす一方で、灌漑システムの毎年の管理維持が不可欠であった。農地から徴収される地税を王朝経営の基盤としていた前近代エジプトの為政者にとって、ナイル川灌漑の管理は重要事であった。その中で、農事に関する暦、ナイルの増水の計測、灌漑設備の管理維持に関してどのような慣行が存在したのか、次節以降マムルーク朝時代を中心に整理する。

第2節 コプト農事暦

§1 コプト農事暦と徴税

イスラーム時代のエジプトでは、太陰暦であるヒジュラ暦とともに太陽暦に基づくコプト暦 *shuhūr al-Qibṭiyya* が併用されていた。コプト暦は、古代エジプトの暦（シリウス暦³⁰）をもとにディオクレティアヌス帝の即位年（西暦 284 年）を紀元とした宗教暦である。このコプト暦とアラブがもたらした星暦であるアンワー暦³¹とを組み合わせ、ナイル川の増減水のサイクルや農業慣行の情

²⁷ ‘Alī Mubārak, *Nakḥbat al-Fikr fī Tadbīr Nīl Miṣr*. Cf. 佐藤次高「アリー・ムバーラクのエジプト農業社会論」275–294 頁。

²⁸ 加藤博「ナイル川をめぐる神話と歴史」121 頁；長沢栄治『エジプトの自画像』251–253 頁。

²⁹ 長沢栄治『エジプトの自画像』29–31、194–198 頁。

³⁰ 古代エジプトでは、そもそも 1 年を 12 朔望月に分ける太陰暦を用いていたが、ナイル川の増水の開始期に日の出直前の東の空に大犬座のシリウスがあらわれることに気付き、次第にシリウスが現れる夏至を元日とするシリウス暦を策定した。シリウス暦は当初 1 年を 12 朔望月としたため、シリウスの運行にあわせ 3 年ごとに 1 ヶ月の閏月を設けて調整した。その後、紀元前 2900 年前後に 1 月を 30 日、1 年を 12 ヶ月とし、毎年年初に 5 日の祭日を加えて 365 日とした。厳密にはシリウスの運行に基づく星暦であるため太陽暦ではない（暦の会編『暦の百科事典』62 頁）。

³¹ イスラーム以前のアラブ遊牧民は月の運行を基にした太陰暦と星の運行を基にした暦を使用していた。

報を併記した暦が、書記手引きや地誌などのアラビア語史料に散見される。これらのアラビア語史料に記載された暦が、知識人や能吏のほか実際に農民が日常的に使用していたかは不明であるが、本論ではこの年間を通した農業慣行の情報を加味したコプト暦を特にコプト農事暦と呼ぶこととする。

古代エジプトにおいて、大犬座のシリウスの動きにより1年を365日のサイクルとして創出されたシリウス暦では、1年の始まりは夏至とされ、ちょうどナイル川の増水が始まるころと一致していた。一方、コプト暦ではキリスト教徒を弾圧、大量虐殺したことで知られるディオクレティアヌス帝が即位した日付（ユリウス暦284年8月29日）を紀元とする宗教暦（殉教暦）として編纂されたが、これにより偶然にもナイル川の増水が満水を迎える8月末を新年の始まりとした。

コプト暦では1カ月を30日、1年を12カ月とし、年の終わりに5日（4年に1度の閏年では6日）の調整日（忘れ残しの日（*ayyām al-nasī*））を設けている。これにより1年は365日となる。また、閏年（*sana kabisa*）には、忘れ残しの日を6日間にすることで（1年=366日）暦の調整を行う。閏年はユリウス暦と同じく4年に1度の割合で入れられる。

コプト農事暦におけるエジプトの農業慣行については、実務を担当した官吏であったイブン・マンマーティー-Ibn Mammāṭī の『官庁の諸規則 *Kiṭāb Qawānīn al-Dawāwīn*』やカルカシャンディー-Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad al-Qalqashandī (821/1418年没) の『黎明の書 *Subḥ al-A'shā fi Šimā't al-Inshā'*』をはじめ多くの記述が残されているように、エジプトの行財政において徴税にかかわる重要な指標の1つであった。コプト農事暦における水利と農業慣行についてカルカシャンディーの『黎明の書』を基に概観する³²。史料の原文にはシリア暦との日付の対応も記されているが、それらは割愛し、水利、農業の慣行に関わる項目を中心に訳出した。

トゥート Tūt 月（9月11/12日-10月9/10日）³³：この月はナツメヤシの実を収穫する。マルメロや冬ブドウが成長し、柑橘類が出まわり始める。1日はコプト暦の年初（ナイルーズ *Nayrūz*³⁴）

日没時に西に沈む星と東から昇る星を指してナウ（*naw*/pl. *anwā'*）と呼び、インドから伝来した黄道二十八宿説と組み合わせて太陽暦に近い1年=365日のアンワー暦を作成し、星の動きにより季節の変動を知り、農業や牧畜を行った（佐藤次高・福井憲彦編『ときの地域史』273-274頁）。

³² *Subḥ*, 2:383-391. なお、史料訳出には以下を参考とした：佐藤次高・福井憲彦編『ときの地域史』274-281頁。Cf. Sato, *State and Rural Society*, pp.189-192; 佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』302-305頁。

³³ グレゴリウス暦に対応する日付については、Atiya (ed.), *The Coptic Encyclopedia*, vol. 2, pp. 440-443 に従った。

³⁴ イラン暦の新年（春分）を意味するナウルーズ（*Nawrūz*）に由来する。ここでは史料の元綴りに従った。ナイルーズ、ノウルーズなど発音・表記はヴァリエーションがある。19世紀前半にエジプトを訪れ、現地の生活習慣を詳細に記録したレイン Edward W. Lane は、現地で発音されていたナウルーズの音を”

の日である。7日にはオリーブの実をもぎ始める。17日は十字架の祭りの日であり、灌漑水路 (tirā' /sg. tur') を開く。18日は秋季の始まりである。20日にはバルサム油を搾る。21日は駝鳥が卵を産みはじめる。28日、暑さが和らぐ。

バーバ Bāba (月 10月 11/12日-11月 9/10日) : うまごやしのほかは、犁耕せずに播種する。月末には上エジプト地域で犁耕が行われる。稲の刈り取りが行われる。ザクロが実る。羊、山羊、乳牛が子供を産む。5日はナイルの花嫁 ('urs al-Nīl) の日。7日にはナイル川の水位が最高位に達する。8日、刺絡 (瀉血) は忌避される。11日になるとナイル川が減水し始める。15日にはうまごやしを播種する。24日、エジプトの農民 (ahl Miṣr) が播種を開始する。

ハートゥール Hātūr 月 (11月 10/11日-12月 9/10日) : この月は小麦の播種。スマレやケシが成長する。残りのナスを収穫する。[上エジプト地域] のケースからブドウが運ばれてくる。2日、稲の刈り取りを始める。5日、水が冷たくなり始める。7日、シリアの農民が播種を開始する。9日、ハシーシュ (大麻) の播種を行う。14日、草が枯れ始める。16日にはサフランを収穫する。28日になると波と風が強くなるため地中海が閉じられ、船の航行が禁止される。23日、地中が [大気より] 暖かくなる。

キーハク Kihak 月 (12月 10/11日-1月 8/9日) : この月はインゲン豆の収穫。穀物の種子をまき終る。1日からエジプトの [第1農旬期である] 40日節 (arba'īniyat) が始まる。3日になると蜂が死に始める。11日、落葉が始まる。17日は冬季の始まり。シリアにおける40日節が始まる。21日、エジプトに渡り鳥が増えはじめる。26日、ラクダが子をはらむ。27日、夜に水を飲むことが増える。30日、ブドウの枝おろしを始める。

トゥーバ Tūba 月 (1月 9/10日-2月 7/8日) : この月に小麦を播種するのは危険である。サトウキビとタロイモのために犁耕が行われる。1日、強風がふく。2日、うまごやしの刈り取り。11日、ブドウの木の移植を開始する。12日、寒さが厳しくなる。13日、つる野菜を播種する。19日、シリアでは初雪が降る。24日、ナイル川の水が澄み始める。

アムシール Amshūr 月 (2月 8/9日-3月 9/10日) : 樹木の移植。ブドウの枝の剪定。アーモンドが熟し、スマレが成長する。4日、ナツメヤシの若葉が芽を出す。11日、夏作物の播種。12日、海の生物が動き始める。22日、子供の病気が出始める。23日、家畜が牧草地へ出ていく。

Nōroose⁹と表記している。なお、レインはトゥート月1日を9月11日または12日としている (Lane, *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*, p. 498)。なお、邦訳のウィリアム・レイン著、大場正志訳『エジプトの生活：古代と近代の奇妙な混交』では、ナウルーズを含む年間の公の祝祭に関する諸章は割愛され訳出されていない (訳者のあとがきを参照)。Cf. Atiya (ed.), *The Coptic Encyclopedia*, vol. 6, p. 1784; 『岩波イスラーム辞典』[ノウルーズ] (上岡弘二)。

25日、風が吹く。

バルマハート *Barmahāt* 月 (3月10/11日-4月8日) : この月は樹木の移植を行う。ほとんどの果樹が結実する。早生のごまの播種。亜麻を刈り取る。ソラマメ、レンズ豆が成熟する。2日、刺絡がよしとされる。13日、魚が目を開く。15日、ミルクが良質となる。16日、蚕がではじめる。19日、虫が冬眠から覚める。20日、ごまの播種を行う。27日、青バエが出始める。

バルムーダ *Barmūda* 月 (4月9日-5月8日) : この月は、最初の蜂蜜を集める。亜麻の実を落とす。赤バラ、イチジクが増える。大麦の一部を間引きする。1日、ファリーク (バター入り大麦) を食べる。4日はバルサム油を搾る。5日には花が増えてくる。18日は亜麻の間引きを最後とする。20日には野菜を食べることを禁止する。23日には播種を打ち止めとする。

バシヤンス *Bashans* 月 (5月9日-6月7日) : カースイム・リンゴが増える。ミスキー・リンゴ、メロン、アプリコット、プラムが出始める。月半ばに稲を播種し、小麦を刈り取る。14日、大麻を集める。黄ダイを集める。21日、地中が [大気より] 冷たくなる。

パウーナ *Ba'ūnah* 月 (6月8日-7月7日) : この月は青果物が増える。ブドウ、イチジク、モモ、クワの実が良質となる。ナツメヤシの実が大きくなる。蜂蜜を集める。6日、テリアカの成熟。9日、北風が吹き始める。ナイル川の増水が始まる。12日、天使ミカエルの祭り。19日、蚕が出始める。22日、ナイルの流れが強くなる。29日、メロンの成熟。

アビーブ *Abib* 月 (7月8日-8月6日) : この月は、ブドウとイチジクが増え、メロンが減少する。ナツメヤシの実が良質となり、残りの蜂蜜を集める。ナイル川の増水が力強さを増す。4日、イナゴが死ぬ。10日、ペストの流行が始まる。12日、熱風が強まる。13日、果物の成熟。22日、ピスタチオが成熟する。29日、ヒジャーズでナツメヤシの成熟。

ミスラー *Misrā* 月 (8月7日-9月5日) : この月は、鳥が巣を造り、果物、バナナを収穫する。灌水の仕方によって果物の味が変わる。レモンの収穫。ザクロの採り入れが始まる。5日、最初の柑橘類の収穫。12日、家畜の子を母親から離す。14日、ヨーグルトが少なくなる。15日、水のほうが (大気より) 暖かくなる。28日、最後の熱風が吹く。

忘れ残しの日 (9月6日-9月10/11日) : その日数は閏年 (*al-sana al-kabīsa*) [6日間] か、それ以外 [5日間] かによって異なる。

以上のカルカシャンディーによるコプト農事暦の説明は、マフズーミーの『エジプトの地租に関

する知識の道標』、イブン・マンマーティーの『官庁の諸規則』³⁵などから範をとっていると思われるが、記述内容に異同がある。農産物の種類や播種、収穫の時期等は一致しているが、『知識の道標』、『黎明の書』にはアンワー暦の情報が含まれていない。また、同じく『知識の道標』にはシリア暦の情報も含まれていないが、これはエジプトの地租徴収に関して特化した著作であるためであると考えられる。一方で『知識の道標』には「私が見たところでは～」³⁶という一人称を用いた表現がみられ、マフズミーが実務官僚として徴税業務に関わっていたことを窺わせる。

コプト農事暦の季節については、春はバルムーダ月 16 日（4 月 24 日）、夏はパウーナ月 20 日（6 月 28 日）、秋はトゥート月 18 日（9 月 28/29 日）、冬はキーハク月 17 日（12 月 26/27 日）³⁷からそれぞれ始まるとしている³⁸。上記のカルカシャンディーの説明では、秋季、冬季の開始日は一致するが、春季、夏季の始まりについては確認できない。また、『官庁の諸規則』では夏、秋、冬の開始月については一致するが、日付までの詳細は記載されていない³⁹。また、春季については確認できない。

その他に、農業はさらに 4 つの農旬期に分けられて行われた。キーハク月 1 日から 40 日間は第 1 農旬期で、寒さが強まり、雨が降る。この時期までに冬作物が播種される。また同時に夏作物の準備が行われ、灌漑水路や運河が改修・清掃される。トゥーバ月 11 日からアムシール月 20 日までの 40 日間は第 2 農旬期で夏作物のための農地の耕作が終わる。アムシール月 21 日からバルマハート月末までが第 3 の農旬期で冬作物が収穫され、夏作物が播種される。バルムーダ月の初旬から 50 日間の暑さが強まる期間に夏作物を収穫する⁴⁰。

また農地の状態から 4 つの季節に分ける場合もあり、ナイルの増水期であるアビーブ月、ミスラ一月、トゥート月を白い真珠 (lu'lu') で水を例え、農地の土がナイルの増水によって運ばれる養分豊かな土(シルト)によって豊かとなるパーバ月、ハートゥール月、キーハク月を黒いムスク (musk)、播種が終わり農地で作物が育つトゥーバ月、アムシール月、バルマハート月を緑のエメラルド (zumrad)、作物が色づくバルムーダ月、バシヤンス月、パウーナ月を赤いルビー (もしくは金) と呼び、色で季節をとらえる見方もあった⁴¹。このような具体的なコプト農事暦のほか、ヌワイリー

³⁵ *Minhāj*, 6–8; *Qawānīn*, 234–257.

³⁶ *Minhāj*, 7.

³⁷ 『官庁の諸規則』では、冬季はキーハク月から始まるとしているが、日付は指定されていない (*Qawānīn*, 232)。

³⁸ Atiya (ed.), *The Coptic Encyclopedia*, vol. 2, pp. 440–443.

³⁹ *Qawānīn*, 236, 242, 252.

⁴⁰ Atiya (ed.), *The Coptic Encyclopedia*, vol. 2, p. 441.

⁴¹ *Nayl al-Rā'ida* (1), 10; *Ibn Zuhāra*, 110. Cf. Sayyid 'Abd al-Fattāh 'Āshūr, "al-Fallāḥ wal-Iqtā' fi 'Aṣr al-Ayyūbīyīn wal-Mamālīk," p. 211.

の『学芸における究極の目的 *Nihāyat al-Arab fi Funūn al-Adab*』には、コプト農事暦の各月を代表する飲食物、植物について次のように伝えている。

トゥート月のナツメヤシ (*ruṭab Tūt*)、バーバ月のザクロ (*rummān Bābah*)、ハートゥール月のバナナ (*mūza Hātūr*)、キーハク月の魚 (*samak Kīhak*)、トゥーバ月の水 (*mā' Ṭūba*)、アムシール月の羊肉 (*kharūkh Amshūr*)、バルマハート月の牛乳 (*laban Barmahāt*)、バルムーダ月のバラ (*ward Barmūda*)、バシヤンス月のハス (*nabq Bashans*)、アビーブ月の蜂蜜 (*asal Abīb*)、ミスラー月のブドウ (*'inab Misrā*)⁴²

エジプトでは以上のコプト農事暦に合わせ地租のハラージュが徴税されたが、ウマイヤ朝時代のエジプトでは、支払時期は年2回の割賦期に分かれ、さらに最高4回の小割賦期に分かれていた。この割賦期はアラビア語で *najm* (pl. *anjum/nujūm*)、または *ṭabl* (pl. *ṭabūl*) と呼ばれていた。この割賦納は続くアッバース朝時代にも継承された。イブン・ハウカル *Abū al-Qāsim Ibn Ḥawqal al-Naṣībī* (4/10世紀) の『大地の形 *Ṣūrat al-Ard*』によると徴税の開始期 (*ifṭitāh*) はナイル川の水が汚れた後、胡麻、胡瓜、綿以外の主要作物の播種が終わる第5月のトゥーバ月に置かれるとした⁴³。イブン・ハウカル の伝承を整理した森本によれば、第1月のトゥート月に土地の登録および登録証書 (*sijillāt*) の交付が行われ、登録税額の2分の1をトゥーバ月からバルムーダ月の上半期に納税する。実際の徴税では納税総額の4分の1を単位として、これを2ヶ月ごとに締め括り、実際には毎月総額の8分の1を納税し、バルムーダ月に登録税額の2分の1を納税したとする。残りの2分の1の残額 (*bāqī'*/pl. *bawāqī'*) は下半期のバシヤンス月以降に徴収されたとする。しかし、実際には納税の遅延はしばしばみられたようである⁴⁴。

§2 コプト農事暦と徴税：会計年度の繰越

前近代のイスラーム諸王朝では、農業生産物に対して課税された地租 (ハラージュ) は一般に農業のサイクルにあわせ、太陽暦に基づいて徴税が行われた。これを地租年度 (*al-sana al-kharājīya*) と呼ぶ⁴⁵。エジプトの場合、ナイル川を利用した灌漑農業と地租の徴収は、太陽暦であるコプト農

⁴² *Nihāya al-Arab*, 1:356. Cf. Sayyid 'Abd al-Fattāh 'Āshūr, "al-Fallāh wal-Iqtā' fi 'Aṣr al-Ayyūbiyyin wal-Mamālīk," p. 211; Atiya (ed.), *The Coptic Encyclopedia*, vol.2, p.440-443.

⁴³ *Ṣūrat al-Ard*, 129-130; *Khīṭat*, 1:270-273.

⁴⁴ 森本公誠『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』252-255頁。

⁴⁵ *Qawānīn*, 358-359; *Khīṭat*, 1:273. Cf. Rabie, *Financial System*, p. 133.

事曆に基づいて行われた。一方、ズインミーに課せられた人頭税 (jawālī/ sg. jāliya) は純粋太陰曆のヒジュラ曆に基づいて徴収が行われた⁴⁶。

しかし、国庫の歳入と歳出は太陰曆であるヒジュラ曆によって計算、記録が行われていた。このため、1年の長さが365と4分の1日の太陽曆であるコプト曆と354日の太陰曆であるヒジュラ曆においては1年ごとに約11日のずれが生じ、33年でごとに1年のずれが生じた。このため、国庫の計算ではヒジュラ曆の33年に1度、1年分を見送りの年として会計年度の繰越 (taḥwīl) を行い、調整を行った (taḥwīl al-sana al-kharājīya al-shamsīya ilā al-sana al-hilālīya)⁴⁷。ただしこの「タフウィール」という語がマムルーク朝時代以前に公的な布告に使用されたことはなく、naql (移す)、nasab (参照する) という語が使用されたとされる⁴⁸。

バフリー・マムルーク朝時代のエジプトでは、667/1268-69年、698/1298-99年、731/1330-31年、764/1362-63年、およびバルクーク統治期の797/1394-95年にタフウィールが実施された⁴⁹。これらの年は回避 (ilghāʾ) する年として、ヒジュラ曆を基とした会計台帳はその年の記載を行わず、次年度分から再び記載が行われたとする。

また、この33年ごとの会計年度の繰越のほかにも、バフリー・マムルーク朝時代にはナースィル検地に伴いシリア地域で検地が実施された。713/1314年に会計年度の繰り越しが行われたほか⁵⁰、749/1348年にも会計年度の繰越が行われた。749/1348年における会計年度繰り越しは、前年から発生した黒死病 (al-Ṭāʾūn al-Jārif) によって人口が激減したことによる社会情勢の悪化をうけ、徴税が困難となり特別措置として会計が繰り越されたと伝えられている⁵¹。

ところで、この会計年度の繰越は、ヒジュラ曆で33年ごとのものであれ、上記の特別措置のものであれ、期間が来たときに特に前触れも無く自動的に繰り越し作業を行うことや、中央や地方の諸官庁や各イクター受給者が独自に行うことはなされなかったようである。会計年度繰り越しが行われるときは、必ずスルターンの署名入りの布告に基づき、全国規模で同時期に一斉に実施されるものとされた⁵²。

この会計年度繰越において、実際にどのような行政手続、会計台帳の繰越が行われたかについては、マムルーク朝時代の会計台帳などが現在まで伝世していないため不明であるが、スルターンの

⁴⁶ マムルーク朝時代のズインミーに課税された人頭税については、Rabie, *Financial System*, pp. 134-136.

⁴⁷ Rabie, *Financial System*, p. 134; idem, *al-Nuzm al-Mālīya*, p. 41.

⁴⁸ Popper, *Cairo Nilometer*, p. 125.

⁴⁹ *Subh*, 13:61-62; *Suhūk*, 4:875. Cf. Popper, *Cairo Nilometer*, pp. 127-129.

⁵⁰ Rabie, H., *Financial System*, p. 134.

⁵¹ *Subh*, 13:79.

⁵² *Nihāyat al-Arab*, 1:165; *Subh*, 13:74-79.

命による勅書 (marsūm sharīf) が発行されたことが知られている。アイユーブ朝、マムルーク朝時代の勅書の文例については、『黎明の書』に伝えられているほか、後期マムルーク朝時代に軍務庁長官職 (nāzir al-jaysh) を多く輩出したジーアーン家⁵³の一員で、軍務庁の財務官 (muṣṭawfī) を勤めたアブー・アル=バカー・イブン・アル=ジーアーン Abū al-Baqā' Ibn al-Jī'ān al-Badrī, Muḥammad b. Yahyā b. Shākir b. 'Abd al-Ghanī (902/1496 年没)⁵⁴も会計年度繰越の際のスルターン勅令について、『黎明の書』に掲載されていない 835/1431 年の事例を伝えている。アブー・アル=バカーが伝える会計年度繰越の勅令の内容について行政手続きに関して重要な項目は次のようにまとめられる。

- ① 会計年度繰り越しにおいては、スルターンの署名入りの勅令 (marsūm/pl. marāsīm) が 2 通起草され、それぞれエジプト、シリア両地域に布告が出される⁵⁵。
- ② 布告には繰越が行われる農作物 (maghall) が品目ごとに記入される⁵⁶。
- ③ 文書庁からシャーフィイー派の大カーディー (qāḍī al-quḍāt) に対して問い合わせ状 (waraqat su'al) を提出する⁵⁷。

また、これらの会計年度繰り越はコプト暦の新年 (ナイルーズ) にあわせて行われるため、王朝内の各地にその知らせを伝えるため、布告はナイルーズの前後に出されることが通例となっていたようである⁵⁸。例えばアイユーブ朝時代の 567/1171 年の会計繰越は、ムハッラム月の初め (mustahall) に行われたが、これはコプト暦でトゥート月の初旬にあたる。また、750 年ジュマードー1 月 21 日に布告された会計繰越は、コプト暦でミスラー月の中旬にあたる。

第3節 ナイル川の増水と測量

ナイル川が増水を始め、満水を迎えた時の水位はそのまま農業生産高の多寡を決定する重要事項であった。増水量が足りない渇水、また逆に増水量が多すぎて大水となった場合は、小麦などの穀物価格の高騰に結び付いたため、マムルーク朝時代には、ローダ島で増水時に毎日測量されるナイルの水位は、「ナイルの満水 (wafā' al-Nīl)」に達するまでは、スルターン以下、政府の高官にのみ

⁵³ ジーアーン家と軍務庁長官職の関係については、Martel-Thoumian, *Les Civils et l'administration dans l'état militaire Mamlūk (IX^e/XV^e siècle)*, pp. 295–319; 熊倉和歌子「後期マムルーク朝におけるエジプトの土地文書の諸相」46–51 頁を参照。

⁵⁴ *Daw'*, 11:8–10; *Badā'i' al-Zuhūr*, 3:223, 363.

⁵⁵ *Tawāli'*, fols. 9b–10a.

⁵⁶ *Tawāli'*, fols. 10a–10b.

⁵⁷ *Tawāli'*, fol. 11b.

⁵⁸ *Tawāli'*, fol. 24a; *Subh*, 13:78.

知らされる機密事項であった⁵⁹。満水時の水位が 16 ジラー (約 7.5m) に達すると適正な増水とされ、「ナイルの満水」または「スルターンの水 (mā' al-sultān)」と呼ばれ、その年の農業生産は安定し、翌年の地租の徴収額は予想の満額に達するとされた。また、ナイルの満水時の水位は、16 ジラー以下の低位 (al-mutaqāšira)、17 から 18 ジラーの中位 (al-mutawassita)、18 ジラー (約 9.3m) 以上の高位 (al-'āliya) の 3 段階に分けられていた⁶⁰。そして、この水位を知るためにミクヤース (al-Miqyās al-Nīl) と呼ばれるナイル川の水位計測所が設置され、計測される氾濫期の水位をもとに徴税額を決定する習慣があった。ただし、エジプトの徴税額が満額となる水位 16 ジラーに達しなかったときにも、同じく満額を徴収し住民が重税に喘いだと言われている。森本によれば、それが改められたのはアッバース朝第 5 代カリフ・ラシードの時代 (在位 170-193/786-869 年) としている⁶¹。

マムルーク朝時代にはカイロ近郊のナイル川の中州の島であるローダ島にミクヤースが設置されていたが、マムルーク朝時代に至るまでにミクヤースが設置された場所には変遷がみられる。『エジプト地誌』に拠れば、イスラーム時代以降の水位計測所の設置は、7 世紀のアラブ・ムスリム勢力のエジプト征服後、征服軍の司令官で、その後総督に就任したアムル・ブン・アル=アース 'Amr b. al-Āṣ (42/663 年頃没) により、エジプト最南端のアスワン、同じく上エジプト地域のデンデラ Dandara に設置されたことを嚆矢とする。その後、ウマイヤ朝期には初代カリフ・ムアーウィヤ I 世 Mu'āwīya b. Abi Sufyān (在位 41-60/661-680 年) により、アンシナー Anṣīnā に設置され、ウマイヤ朝第 4 代カリフ・マルワーン I 世の子でエジプト総督を勤めた、アブド・アル=アジーズ・ブン・マルワーン 'Abd al-'Azīz b. Marwān (85/754 年没) がカイロの南にあるヘルワン Ḥulwān において自らの邸宅をミクヤースとするまで使用された。また、エジプトの地租の徴収人 ('āmil) で、エジプトに国庫 (Bayt al-Māl) を設置したことで知られるウサーマ・ブン・ザイド・アル=タヌーヒー Usāma b. Zayd al-Tanūkhī は、当時のウマイヤ朝カリフ・スライマーン Sulaymān b. 'Abd al-Malik (在位 96-99/715-717 年)⁶²に献策し、ローダ島に 97/716 年に後に古ミクヤース (al-Miqyās al-Qadīm) と称されるミクヤースを設置した。彼はその建設のために 2,000 ウーキーヤ⁶³を費やしたと伝えられる。その後、イフシード朝

⁵⁹ *Subh*, 3:271-276.

⁶⁰ *Subh*, 3:300.

⁶¹ ウマイヤ朝後期からアッバース朝の初期にかけて、この習慣が無視された時期もあったが、少なくともそれ以降はミクヤースによる計測の記録が残されている (森本公誠『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』271-272 頁)。

⁶² イブン・アブド・アル=ハカムの『エジプト征服誌』では、スライマーンの兄、カリフ・ワリード I 世の時代とする伝承も伝えている (*Futūḥ Miṣr*, 16; *Husn*, 2:334)。

⁶³ ウーキーヤ (ūqīya/pl. awāqī) : 重量の単位。法定換算比では、1 ラトル=12 ウーキーヤ=91 ミスカール=130 ディルハム=780 ダーニク。1 ラトルはエジプト地域では 300 グラム。ポパーによれば、1 ウーキーヤは 12 ディルハムで 38.23 グラムに相当する (Popper, *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382-1468 A.D.*, vol. 2, p. 40; 『イスラーム事典』付録)。

期にムハンマド・ブン・アブド・アッラー Muhammad b. ‘Abd Allāh により建設が行われた。以上がイスラーム時代の初期に建設されたミクヤースであるが、これらはマムルーク朝時代にはすでに使用されていない⁶⁴。

マムルーク朝において使用された続けるミクヤースの建設はアッバース朝第10代カリフ・ムタワツキル al-Mutawakkil ‘alā Allāh Ja‘far b. al-Mu‘tasim (在位 205–247/847–861年)の時代に、ヤズィード・ブン・アブド・アッラー・アル=トゥルキー Yazīd b. ‘Abd Allāh al-Turkī をエジプトの総督に任命した247/861年の初頭に行われた。このミクヤースはそれ以前のものに対して、大ミクヤース (al-Miqyās al-Kabir) または新ミクヤース (al-Miqyās al-Jadīd) と呼ばれた⁶⁵。

このミクヤースの新設に加えて、ムタワツキルはミクヤースの計測官サーヒブ・アル=ミクヤースについても重要な変更を加えた。イスラーム支配以降このナイル川の測量所ミクヤースで増水値の計測については、コプト派キリスト教徒が任にあたっていたが、このときよりこの任務はムスリムが担当するように改められた。

カリフ・ムタワツキルは248 [862]年の始めに、この島 [ローダ島] にミクヤースを建設した。このときのエジプト総督はヤズィード・ブン・アブド・アッラー・アル=トゥルキーで、このミクヤースは大ミクヤース、新ミクヤースとして知られた。そして、キリスト教徒がこの計測の任から解かれ、ヤズィードはアブー・アル=ラッダード・アル=ムアッリムにこの任に当たさせた。彼の名は、アブド・アッラー・ブン・アブド・アルサラーム・ブン・アブド・アッラー・ブン・アビー・アル=ラッダード・アル=ムアッジン ‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Salām b. ‘Abd Allāh Abī al-Raddād al-Mu‘adhdhin である。キンミー al-Qimmi⁶⁶は彼の出自はバスラで、エジプトに移住したと述べている。地租庁の長官 (Ṣāhib al-Kharāj) のスレイマーン・ブン・ワフブ Sulaymān b. Wahb は、当時、彼に月7ディーナール (以後 DN) を支払った⁶⁷。このときから今日まで、ミクヤースの計測は彼と彼の子孫が行っている。アブドゥッラー・アブー・アル=ラッダードは266 [879–880]年⁶⁸に亡くなった⁶⁹。

⁶⁴ *Khīṭat*, 1:58.

⁶⁵ *Khīṭat*, 1:58.

⁶⁶ 人物不詳。

⁶⁷ *Khīṭat*, 1:58; *Ibn Zahrā*, 178–179. なお、同時代に近いキンディーは、アブー・アル=ラッダードの手当の月額を6DNとする記事も伝えている (*Kindī*, 508)。一方、イブン・ズラークは具体的な金額は書かず手当 (riṣāq) としている (*Faḍā’il Miṣr*, 79)。

⁶⁸ キンディーはアブー・アル=ラッダードの没年を280/893–4年としている (*Kindī*, 508)。

⁶⁹ *Khīṭat*, 1:58. Cf. *Kindī*, 203, 507–508. キンディーの記事では247/861年となっているが、ヤズィードに対してムタワツキルからミクヤースの建設と計測官のキリスト教徒からの変更についての書簡が届いたと

この時、ムタワッキルはエジプトのカーディー、バックール・ブン・クタイバ *Bakkār b. Qutayba* (270/884 年没)⁷⁰にムスリム以外からミクヤースの計測官を選出しないよう命じ、それに従いバックールと総督のヤズィードはアブー・アル=ラッダードを選び測量官に任命した⁷¹。

上記の引用にあるようにマムルーク朝時代の史料では、アブー・アル=ラッダード家の子孫が代々このナイル測量所の計測官を継承していることが窺えるが⁷²、彼らの詳細については人名録や年代記からは確認できない。マクリーズィー以来の詳細なエジプトの地誌である、アリー・ムバーラクの『新編エジプト地誌 *al-Khiṭaṭ al-Tawfiqīya*』によれば、アブー・アル=ラッダード家が同職をオスマン朝時代も継続して行っており、ナポレオン率いるフランス軍がエジプトを占領するまで続いたと述べている⁷³。

また、このローダ島のミクヤースの建設には、イラクから天文学者として著名なアフマド・ブン・ムハンマド・ブン・カスィール・アル=ファルガーニー *Aḥmad b. Muḥammad b. Kathīr al-Farḡhānī* (247861 年頃没) が技師として呼ばれた⁷⁴。ミクヤースの計測官と建設技師がともにイラク出身者から選ばれたかについては史料からは不明である。

イスラーム時代に稼働したローダ島以外のミクヤースについてまとめると以下のようなになる。

- ① メンフィス：97/715 年頃までに使用されなくなる。
- ② ヘルワン：97/715 年までには使用されなくなる。
- ③ アンシナー：ムアーウィヤ I 世の時代に建設。アブド・アル=アジーズ・マルワーンの時代まで使用。
- ④ デンデラ：アムル・ブン・アル=アースの時代に建設。
- ⑤ ルクソール、エスナ、クアトヤー：古代遺跡として残っているもの。
- ⑥ アスワン (エレファンティネ島)：アムル・ブン・アル=アースの時代に建設。

さて、ミクヤースで計測されるナイルの水位の測定はどのように行われていたのでしょうか。カルカシャンディーの『黎明の書』にはマムルーク朝時代に行われていた計測の様子が次のように記されている。

伝えているので、書簡が届いてから建設が始まるまでの時差が生じたと解する。

⁷⁰ *Kindī*, 479.

⁷¹ *Ibn Zahāra*, 178–179; *Faḍā'il Miṣr*, 78–79; *Kawkab al-Rawḍa*, 148.

⁷² *Subḥ*, 3:513.

⁷³ *al-Khiṭaṭ al-Tawfiqīya*, 18:28.

⁷⁴ *Kawkab al-Rawḍa*, 147; *El'*^{5rd} s. v. [al-Farḡhānī] (written by by Richard Lorch and Paul Kunitzsch).

どのような状況においても、ナイルの増水はバウーナ月の5日には始まる。同月12日の夜に[ナイル川の河床の]泥が量られる。そして、—至高なる神がナイル川に繰り返して起こることを慣例(‘āda)として増水を起こした—ナイル川の増水についてはその泥の検量から推量される。それは、ナイルの水から採られた乾いた泥で、12ディルハムと等量(約36g)⁷⁵に検量されたものによってである。それから、紙かそれに類するものに包み、箱などに入れる。そして、翌朝に検量した時、16ディルハムと等量(約48g)になるまで(約12gの増量)、[乾いた泥の]増量分がイナゴマメ幾つ分増量したかによって何ジラー増水するかを推定する。

26日：河床[の泥]が採取され、増水の測量方法で検量される。

27日：増水について報告が行われる。12ジラーまでは、各ジラーは28イスバア(īṣba‘)⁷⁶である。また、[12ジラー以上の]各ジラーは24イスバアである。もし、16ジラーの満水を迎えたなら、それは「スルターンの水」となり、カーヒラ運河(Khalīj al-Qāhira)[の堰を]切る。この日は多くの人々が祝う日であり、この世とは思えぬすばらしき光景である。そしてこの日には、ナイルの満水による良い知らせが王国の隅々にまで、書簡が送られる。そして、この満水はコプトの暦のミスラー月に多く見られ、最も多い⁷⁷。[中略]

これまでにミクヤースの長官(Ṣāhib al-Miqyās)の慣習が[次のように]行われている。彼は、増水期(zaman al-ziyāda)には毎日、アスル(‘aṣr)の時間に[水位の]記録をとる。翌日には、ジラー分(taṣriḥ bi-zar‘)の説明を除いて、何イスバア増水したかについて報告を行う。ただし、紙片(riqā‘/sg. ruq‘a)に、剣の人と筆の人の中で王朝の有力者(a‘yān al-dawla)、例えばアミールの中で職を持つもの、四法学派の大カーディー、秘書官長(Kātib al-Sirr)、宮内長官(Nāzir al-Khāṣṣ)、軍務庁長官(Nāzir al-Jaysh)、市場監督官(Muḥtasib)、とそれらと同様の人々に対して[記録を]書き記す。そして、ナイルの増水についてアラブの月の日付[ヒジュラ暦]で、それをコプト暦に一致させて、何イスバア[増加した]かを説明する。そして、それが何ジラーに達したかを換算する。それに続き、昨年と同じ日の増加分のイスバアの数値をジラーに換算して記し、それらの間の増減関係を示す。この記録は一般の人々や大衆には明かされない。しかし、16ジラーの満水を迎えた時には、口頭の知らせ[触れ子]によって一日中、規定のイスバアを越えたこと、つまり規定のジラーに成ったことを公表する。各々一人ずつに至るまで、この知らせは広げられる。⁷⁸

⁷⁵ ディルハム：銀貨の単位。1ディルハムは約3グラム。

⁷⁶ 1イスバアは約1.9cm。

⁷⁷ *Subh*, 3: 289.

⁷⁸ *Subh*, 3: 293.

このようにミクヤースにおけるナイル川の水位測定は、増水が始まる6月中旬から始まり、満水を迎える9月初旬まで繰り返し行われるが、通常、ミクヤースの計測柱による測量は増水が12ジラーに達したときから始めるため、それ以前は河床の泥土を用いて増水の予測を行う方法があったことがわかる。

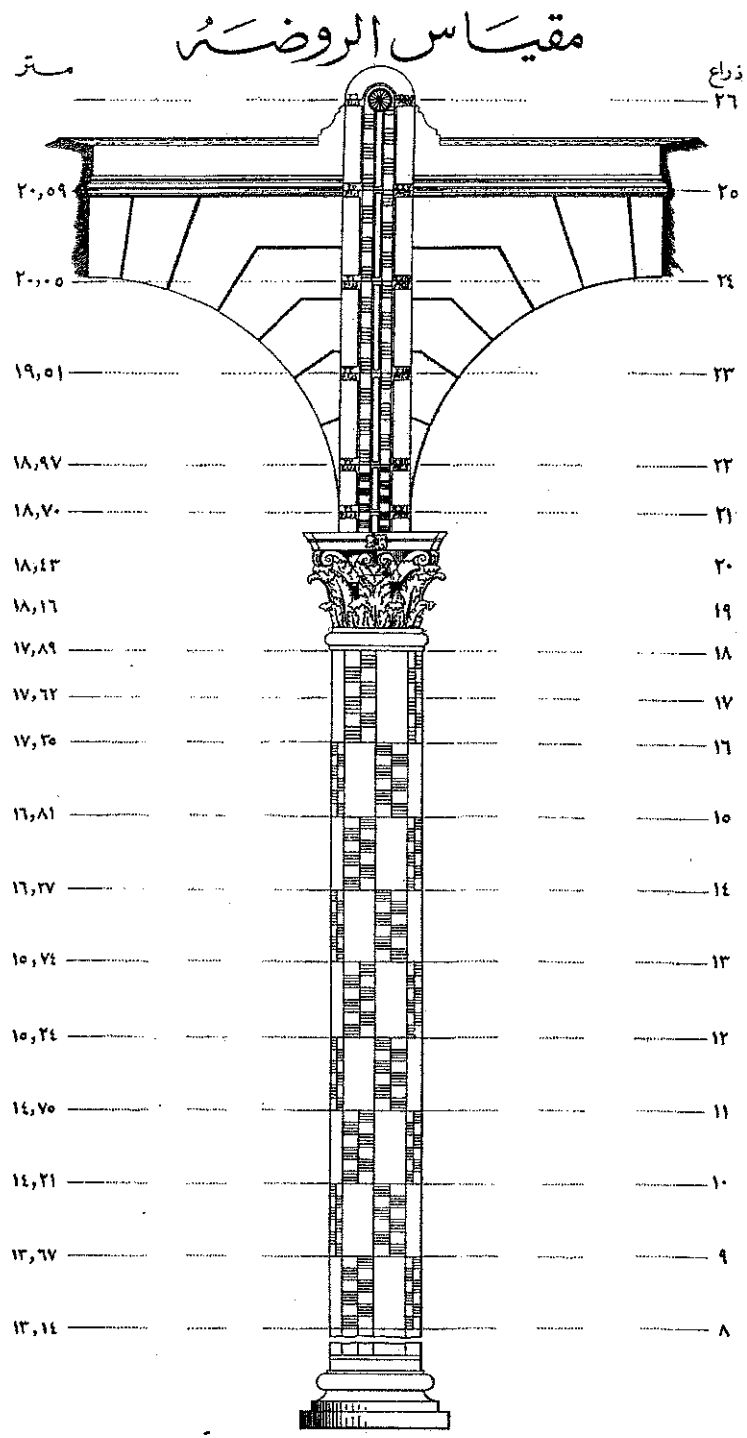
史料後半部分のジラーとイスバアの換算はどのような意味を持っているのであろうかポパーW. Popper は、ミクヤース内で使用される2種のジラーについて、24イスバアのジラー(約45cm)は一般のまたは法的のジラー(dhira' amma, dhira' shar'i)などと呼ばれ、一方28イスバアのジラー(約54cm)は王のジラー(dhira' malik)と呼ばれマムルーク朝後期の15世紀のエジプトでは鉄のジラー(dhira' al-hadid)とも呼ばれた。この2つの長さの単位がミクヤースで使用されたかについての明確な理由については明らかとしていない⁷⁹。エヴァンズ T. Evans は、ポパーのデータを踏まえ、史料上には実際に影響を認められないとしつつも、ナイル川の河床の上昇が100年で平均10cm上昇することから影響があったという可能性を指摘している⁸⁰。

以上、ミクヤースにおけるナイル川の増水観測に関して、設備、観測方法の慣習を見てきたが、イスラーム以前の伝統を継承しつつ、徐々にイスラーム化が進展していったことが窺えた。ムタワツキルによる新ミクヤースの建設以降、ミクヤースおよびその観測方法はマムルーク朝を含め、18世紀にいたるまで続く慣習が確立されたが、特にマムルーク朝では増水の記録は満水に達するまで一般には明かされなかった。これは増水の過程が順調でない場合、穀物価格の急騰を避けるための施策であったと考えられる。ただし、特に14世後半から頻発する穀物価格の高騰は、物価の安定を図るべき王朝の要職にいた人々が引き起こしたことは留意せねばならない⁸¹。

⁷⁹ Popper, *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382-1468 A.D.*, vol. 2, pp. 102-112.

⁸⁰ Evans, "History of Nile Flows," pp. 37-40.

⁸¹ 長谷部文彦「イスラーム都市の食糧暴動」22-30頁；長谷部文彦「カイロの穀物価格変動とマムルーク朝政府の対応」144-171頁。



図版4 ローダ島のミクヤースの計測柱の図解

(Amīn Sāmī, *Taqwīm al-Nīl*, vol.1, p. 90 より転載)

第4節 灌漑土手ジスルとその管理における行政慣行の変化と背景

マムルーク朝時代の水利行政は、前代のアイユーブ朝時代からそのシステムの多くを引き継いでいると考えられている。また、バフリー・マムルーク朝時代に行われた水利事業は、多くの共通点を持っていることから、一定の行政慣行を保持していたと考えられる。その中でスルターンを筆頭に中央政府が主催した水利事業は、都市部では飲料水、物資運搬、地方では灌漑に関係する。農業灌漑に関わる水利行政は税収に直結することから租税庁 *Diwān al-Kharāj* の管轄するところとなっていた。そして、水利事業に要する経費は政府支出 *māl al-sultān* と密接な関わりをもっていたと見られる。前期マムルーク朝時代に行われた政府支出にかかわる水利事業としては次のようなものがあった。1、政府管理の灌漑土手のジスル (*al-jusūr al-sultāniya*)。2、大規模運河。3、政府支出によって建設された橋、水道橋 (*qantara*)、ため池 (*birka*)、水害防止用の土手 (*jisr*)。

以上の中央政府が関わった大規模な水利事業のなかで、灌漑土手のジスルに関しては比較的詳しくその行政慣行がわかっている。また、この灌漑土手の重要性についてラビーはアイユーブ朝とマムルーク朝のスルターンおよび中央政庁が灌漑土手の管理に意を尽くしたことを強調しているように⁸²、徴税確保のためにジスルの監督を怠らないことが為政者の務めであった。このようにマムルーク朝時代の水利行政の中心は、定期的に増水するナイル川の水を効率よく農地に引き入れるために作られた、灌漑用の土手を毎年、建設・改修することであったと言えよう。毎年、建設・改修が行われるエジプトのジスルについて、15世紀の歴史家マクリーズィー *Aḥmad b. 'Alī al-Maqrīzī* (845/1442年没) は『エジプト地誌 *al-Mawā'iz wal-I'tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār*』において、「エジプトの土地の豊かさには、ジスル (*al-jusūr*) が欠かせない。それは、2種類あり、政府管理 (*sultāniya*) のものと地方管理 (*baladiya*) のものがある」と述べている⁸³。このようにエジプトの農業の成果はジスルの管理維持にかかっていたことが窺えるが、このジスルは大きく2つの区分に分けられていた。第一に、中央政庁が管理するジスルである「政府管理のジスルがあげられ、国庫 (*Māl al-Sultān*) からその経費の支出が賄われたものである。第二は、イクター受給者、すなわちムクター (*muqta'*) やむら (*balad*) がその改修に責任を持ち、経費の支出、労働者の供出を請け負っていたジスルである。ただし、このジスルの区分がどのような基準で分けられていたかは、史料上は確認できない⁸⁴。

このマムルーク朝時代のエジプトにおけるジスルの二つの区別の起源について森本公誠は、アイユーブ朝時代からこの政府管理のジスルが現れたとする。イスラーム初期のウマイヤ朝時代にはこれらの灌漑設備の維持・管理は県 (*kūra*) 内の労働賦役によって賄われ、アッバース朝からファー

⁸² Rabie, "Some Technical Aspects of Agriculture in Medieval Egypt," pp. 61–62.

⁸³ *Khiṭaṭ*, 1:272.

⁸⁴ *Khiṭaṭ*, 1:272.

ティマ朝にかけては納税請負人 (muzāri) が灌漑施設の整備についても責任を負っていたと考えられるとし、アイユーブ朝時代に灌漑設備の管理が納税請負人から政府の事業として直接管理するようになった最大の要因として、納税請負人が灌漑設備の管理にかかる経費を大きく見積もって請負総額から控除し、必要経費の余剰額を私消したために国庫の収入減を招いたばかりでなく、灌漑設備の整備が不十分であったためとしている⁸⁵。

しかし、上記の2つの区分が実際に適用された時期についてははっきりとは分らない。ただし、アイユーブ朝創設者のサラディン Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf b. Ayyūb (在位 532–589/1169–93 年) は、エジプトにイクター制を導入したことで知られるが、彼が 577 年ラジャブ月/1181 年 11 月に実施したとされる検地 (サラーフ検地)⁸⁶では、エジプトのイクターの調査に基づき、アミール、兵士の数が定められたという。これに先立つ同 577 年ジュマダーII 月/1181 年 6 月頃に「イマーラ (‘imāra) の充足のため、ガルビーヤ地方とシャルキーヤ地方に派遣されたワーリー (wālī) にジスルのこと (amr al-jusūr) が課せられた」⁸⁷という記事がみられ、明確に「政府管理の (al-sultāniya)」とは書かれていないが、政府が派遣するワーリーにジスルの管理が任されたことから、この時期に「政府管理のジスル」の慣習が始まったと考えられる。

このイブン・マンマーティーが伝えるアイユーブ朝時代のエジプトのジスルの分類と水利行政のあり方について伝える記事は⁸⁸、その後もマムルーク朝時代のマクリーズィーの『エジプト地誌』やカルカシャンディーの『黎明の書』をはじめ、地誌、書記手引、統治の書など多くの史料にほぼそのまま引用されているため、マムルーク朝時代の水利慣行はアイユーブ朝時代の慣行を引き継いだものであり、またそれを理想形と考えていたことが窺える⁸⁹。

これらナイル灌漑農業の管理において要となる政府管理のジスルとむら管理のジスルがどれほど存在していたかについては、時代、地域により異なるが、アイユーブ朝時代からマムルーク朝時代にかけて政府管理のジスルの多くは下エジプト地域に集中しており、上エジプトには少なかったとされる。このことについては『官庁の諸規則』には、政府管理のジスルが存在したのはシャルキー

⁸⁵ 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』286–288 頁。

⁸⁶ サラーフ検地については、Sato, *State and Rural Society*, pp. 60–63; 佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』114–117 頁を参照。なお、佐藤がサラーフ検地の内容について典拠とする、*Khīṭāṭ* (1:86–87) および同様の記事を伝える *Sulūk* (1:75) にもこのサラディンのイクター調査について検地を表す rawk の語は見られない。

⁸⁷ *Sulūk*, 1:74. イマーラ (‘imāra/ pl. ‘imārā) は、一般には「建物」や「繁栄した状態」を指すが、城塞、モスク、マドラサの建設、水利機構の維持・管理もイマーラと呼ばれた。イクター受給者の奉仕義務の一つとされた (Sato, *State and Rural Society*, p. 246)。

⁸⁸ *Qawānīn*, 232–233.

⁸⁹ *Khīṭāṭ*, 1:272.

ヤ地方、ガルビーヤ地方、ジャズイーラ・クーシナー地方の3地方であるとしており⁹⁰、この政府管理のジスルの建設・改修に対する必要経費は、官庁 (al-Dīwān) が官吏を派遣して税を徴収し、ジスルの建設、改修に使用される必要経費を差し引いた残金は国庫 (Bayt al-Māl) に送付されたと伝えている⁹¹。このうちジャズイーラ・クーシナーは、ナーシイル検地に伴う行政区画の再編により、ガルビーヤ地方とミヌーフイーヤ地方に編入されたため⁹²、マムルーク朝時代にはシャルキーヤ地方とガルビーヤ地方の2地方と、ミヌーフイーヤ地方の一部に政府管理のジスルが集中していたことになる。ただし、ナーシイル検地後に、スルターンの直轄地はブハイラ地方、カルユーブ地方、ギザ地方、アスユート地方、クース地方の、上記の政府管理の灌漑土手が存在した場所と異なる場所に指定されたため⁹³、マムルーク朝時代の政府管理のジスルの所在地については、スルターン直轄地を含めた地域に拡大した可能性を指摘できるが、史料上は確認できない。

また、この政府管理のジスルに対して、毎年どれくらいの費用が充てられていたかについて具体的な数字を示す史料はない。ファダーイルの書では預言者ムーサーの時代の慣習として古代エジプトの王 (ファラオ) は地租を次のように分配するとして、これをイスラーム時代まで続くエジプトの伝統的慣習であるとしている。

4分の1を王と一族に、4分の1を大臣、官僚、兵士に、4分の1を貯えに (dhakhīra) に、そして、残りの4分の1を運河 (khalij)、灌漑土手 (jisr)、灌漑水路 (tur) の管理維持に⁹⁴

このように水利施設の維持管理にハラージュの4分の1が費やされたことはイブン・アブド・アル=ハカムもイスラーム時代以前の慣習として『エジプト征服誌 *Futūḥ Miṣr*』に伝えている。一方、マクリーズイーの『エジプト地誌』では、4分の1の伝承の他、ハラージュの3分の1が費やされたとする伝承も伝えている⁹⁵。

マムルーク朝時代における政府管理のジスルについて、マクリーズイーはその管理・維持について、15世紀前半の彼の同時代に至るまでの変化について次のように伝えている。

⁹⁰ *Qawānīn*, 206.

⁹¹ *Qawānīn*, 232.

⁹² Muḥammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣriya*, vol. 1, p. 217.

⁹³ *Khīṭaṭ*, 1:90; *Sulūk*, 2:153.

⁹⁴ *Fayḍ al-Maḍīd*, 40. Cf. *Sukrūdān*, 34; Ibrāhīm Ḥasan Sa'īd, *al-Baḥrīya fi 'Aṣr Salāṭīn al-Mamālīk*, pp. 28–29.

⁹⁵ *Futūḥ Miṣr*, 161; *Khīṭaṭ*, 1:61, 74: マクリーズイーは水利施設に関する具体的支出として、毎年のミクヤースのダクトの清掃には50DNを要したとしている (*Khīṭaṭ*, 1:75)。

かつて、このジスルは各地方の租税 (amwāl al-nawāḥī) によって維持され、土地の納税請負人 (mustaqbilū al-arāḍī) がこの管理に当たっていた。彼らは契約した請負金の中から必要経費を支出していたが、やがて政府の官吏がシャルキーヤ地方とガルビーヤ地方の両地方から税を徴収して経費を支出し、残金を国庫に送っていた。その後、王朝の有力アミール (a'yān umarā' al-dawla) がこのジスルを管理するようになり、これがスルターン・ファラジュ al-Nāṣir Faraj b. Barqūq (在位 801–808/1399–1405、808–815/1405–1412 年) の時代に変更されるまで続いた。各地 (al-bilad) で多くの税が徴収されたが、余剰金はスルターンの元 (国庫) には送られなくなり、各地の人々がジスルの管理に駆り出されるようになった⁹⁶。

冒頭の部分は先に述べたようにファーティマ朝時代の慣習がアイユーブ朝時代に改革され、主要なジスルを政府管理下におき、官吏を派遣して状態の維持管理を行ったことを伝えている部分である。後半部分の、アミールたちがジスルの管理を行い始めた時期がいつなのかが重要な部分である。『諸王朝知識の旅』では、スルターン・ファラジュ在位期の 815/1412 年に「毎年、農民 (fallāḥ) から徴税される債務 (maghārim/sg. maghram) がエジプトの諸地方から徴収された。そして、エジプトの諸地域のジスルの建設が捨て置かれた⁹⁷」と伝えている。この年は、ティムールによる侵攻を受けた後、シリアの諸都市は破壊され、エジプトの経済も悪化した。基本通貨である金の価格が、以前は 1 ミスカールあたり 20 ディルハムに過ぎなかったものが 240 ディルハムに達し、通貨として機能を果たさなくなり、補助貨幣に過ぎなかった銅貨が主要な通貨として流通を始め、インフレーションが進んだ。これに伴い、農地の賃借料も跳ね上がり、遂には農地から得られる収入より賃借料を含む経費が上回るようになり、農村が疲弊したという⁹⁸。おそらく、この時期を境に中央政府が管轄する「政府管理のジスル」、イクター受給者が管理する「むら管理のジスル」もともにその管理について変化が現れたのであろう。

一方これに先立つ 750/1349 年に、「ジスルの監督のため (li-kashf al-jusūr)、アミールのアルナーン Arnān を上エジプト地域に、スルターンの近親 (qarīb) のアミール・アフマド Ahmad をガルビーヤ地方に、アミール・アークブガー・アル=ハマウィー Āqbughā al-Ḥamawī をファイユーム地方に、武器庫長 (amīr akhūr) のアライー Arāy をシャルキーヤ地方に、十人長の [アミール] の一人をアシユーム地方に派遣した」⁹⁹とされ、エジプト全土でジスルの調査が行われた。これは第 2 節で説

⁹⁶ *Khīṭat*, 1:101.

⁹⁷ *Sulūk*, 4:226.

⁹⁸ *Sulūk*, 4:226.

⁹⁹ *Sulūk*, 2:808.

明したように、前年 749/1348 年にエジプトにおいて猖獗を極めた黒死病の影響で人口が激減したことをうけて行われた特別の会計年度の繰越に伴い、その他の場合と同様に行われた灌漑設備の調査、改修が目的の一つと考えられる。また、同年に宰相のマンジャク Manjak al-Yūsufi が着手した歳出の緊縮策と関連が見られる。しかし、翌 751/1350 年にはガルビーヤ地方の調査を担当したアミール・アフマドがこの調査の際に手落ちがあったことを理由にアレppoへと左遷されていることは¹⁰⁰、このときの調査でジスルの管理が必ずしも首尾よく済まなかったことを示唆している。

またこの調査を前後して、ジスルの管理を義務づけられた地方総督（ワーリー）の行状の伝える以下のような事件が起きた。

各地の地方行政官（wālī）がジスルを放棄し、ジャラーリーフ（jarāfī）を売却したため、多くの地域が浸水した。それに加え、地方総督たちの暴挙は農民たちに及び、通例にないお金を支払わせた。農民たちは、地方総督に対する不平を宰相（wazīr）に訴えたが、宰相は不平を述べるものに対する考慮を行わなかった¹⁰¹。

ジャラーリーフ（sg. jarāfa）は、耕作に用いられる農具の一種で、和語では「鍬」、「シャベル」の訳語が付される。佐藤はナブルスィーの『ファイユーム史 *Ta'rikh al-Fayyūm*』の分析を通じて、アイユーブ朝時代のファイユームの各むらに賦役として割り当てられたジャラーリーフの数がむらごとに分数で現されていることから、実際には現物のジャラーリーフの提出だけでなくそれに見合う現金での供出も含まれていた可能性を指摘する¹⁰²。上記の記事では、売却したとしているので、現物の供出の可能性が高い。この記事からは一見すると行政の悪化を伝えるものであるが、少なくともこの時期にはジスルの管理については地方に派遣された行政官のワーリーが管轄していたことが窺える。

すなわち、少なくとも上記の 750/1349 年からスルターン・ファラジュの在位中の間、約半世紀の間に、マクリーズィーが述べるところの変化が起きたと考えられる。これについて、マクリーズィーとほぼ同時代のカルカシャンディーも、「すでにわれわれの時代には、政府管理のジスルについての管理は忘れられていた。むら管理のジスルの施設の多くは捨て置かれていた¹⁰³」と述べ、15 世紀前半にはすでに多くのジスルが管理されなくなっていたことを伝えている。また 15 世紀後半の歴史

¹⁰⁰ *Sulūk*, 2:819.

¹⁰¹ *Sulūk*, 2:811.

¹⁰² Sato, *State and Rural Society*, pp. 230–231 (佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』353–356 頁) .

¹⁰³ *Subh*, 3:515–516.

家サイラフィー al-Sayrafi も 835/1528 年には、ジスル管理は悪化し、人々や労働用の牛を徴発する代わりに、その諸経費をアミール、兵士らから徴収するようになったとしており¹⁰⁴、アイユーブ朝以来の政府管理のジスルを通した中央政府による灌漑設備、特にジスルの管理については 15 世紀前半までに衰退したものと考えられる。これまでもラビー、レヴァノーニーらが上記の記事をもとに 14 世紀後半から 15 世紀にかけて、灌漑設備の管理・維持が急激に崩壊していったことについて触れているが、その過程については明らかになっていない¹⁰⁵。では実際にどのような過程をへて、「政府管理のジスル」を通した灌漑施設の管理は崩壊していったのであろうか。15 世紀初頭の間水利に関する直接の言及は大規模なものを除いて確認できないが、ジスルの監督を義務づけられた地方総督（ワーリー、カーシフ、ナーイブ）の動向については確認できる。

小結

エジプトにおけるナイル川を利用した灌漑農業の管理について、農事暦、ナイル川の計測、灌漑設備の維持管理といった側面から、マムルーク朝時代においても、イスラーム以前からの継承された慣習と、イスラーム以降の新しい慣習が見られた。特に、中央政府が直接管理した「政府管理のジスル」については、アイユーブ朝以降に成立した新しい慣習であったが、パブリー・マムルーク朝時代の政治社会的動向によりその慣習が衰退するとともに、ナイル灌漑設備の管理・維持がムクターたちにより直接管理されるようになった可能性を指摘した。しかし、14 世紀後半に見られる政治社会の混乱が直接的な原因であったと結論付けるには議論の余地があると考えられる。

一方で、政府が主宰して行った大規模な水利事業も存在した。これらは、政府管理のジスルと異なり、恒常的に行われたものではなく、農地開発、水害の発生、水運の効率化などの目的で、その都度、必要に応じて行われた水利事業であった。しかし、これらの水利事業を行う際には、政府管理のジスルと同様に一定の政治的慣行が成立していたものと考えられている¹⁰⁶。この一見すると政府管理のジスルとは同様には捉えることができないと思われる水利事業にも、ナーシル没後に変化がおき始めた。次章ではナーシル期までに成立した国家的水利事業の政治的慣行がいかに変化したかを概観するとともに、それが政府管理のジスルに関する経営の変化とどのように関連するかについて考察を行う。

¹⁰⁴ *Nuzhat al-Nufus*, 3:241. Cf. al-Bayūmī Ismā'īl al-Shirbīnī, *Muṣāḍarat al-Amlāk fī al-Dawla al-Islāmīya*, vol. 1, pp. 231–232.

¹⁰⁵ Rabie, *Financial System*, p. 115; idem, “Some Technical Aspects of Agriculture in Medieval Egypt,” p. 62; Levanoni, *A Turning Point in Mamluk History*, p. 170.

¹⁰⁶ Sato, *State and Rural Society*, p. 230.

第2章

14世紀の大規模治水事業と行政慣行

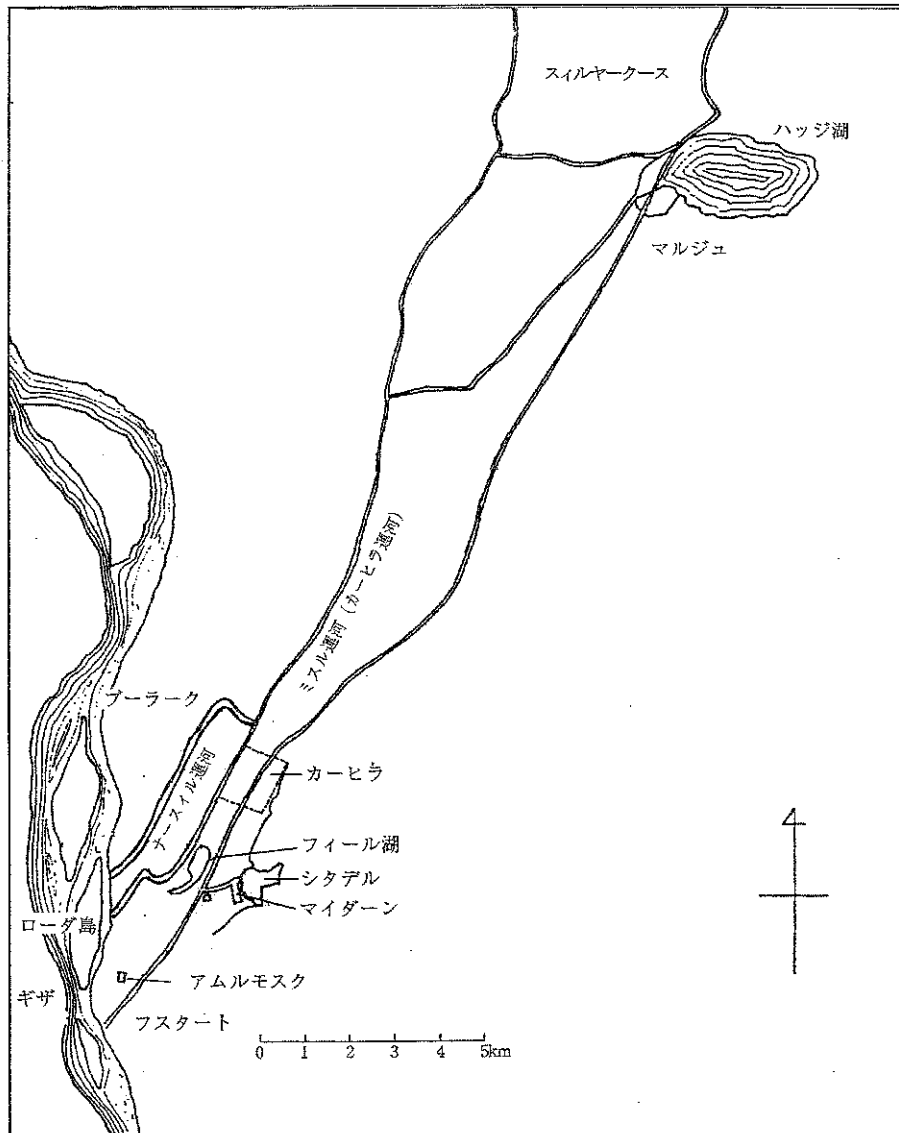
—ナースィル運河の掘削事業を中心に—

はじめに

マムルーク朝をはじめ、エジプトを統治したイスラーム諸王朝の行政において、農業生産を左右するナイル川を利用した水利の管理は、国家の財政において必要不可欠なものであった。行政上の重要性を示す例としてはバフリー・マムルーク朝スルターン、カラーウン Qalāwūn al-Manṣūrī (在位 678-689/1279-1290 年) の時代に、スルターンが不在中のエジプト統治の要点をまとめた覚書 (tadhkira) が、副スルターン (nā'ib al-saltāna) のアミール・キトブガー Kitbghā に対して編まれて渡された。佐藤次高はこのエジプト統治に関して網羅的な指示を記した覚書を『アミール・キトブガーへの覚書』として分析したが、全 28 項目におよぶ覚書のなかで、治水に関する項目は 3 項目に及ぶ¹。

カラーウンの息子でイクター制度を整備したスルターン・ナースィル・ムハンマド・ブン・カラーウン al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn の第 3 期治世 (在位 709-740/1310-1341 年) には、多くの治水事業が行われた。しかし、その他の為政者の事業と比べて、彼の行った治水事業の注目すべき点は、カイロ西部において行われた複数の運河掘削事業である。カイロ西部とは、ここではナイル川とその東岸にファーティマ朝によって建設されたカリフの居城であるカーヒラ (al-Qāhira) の西側を流れるミスル運河に挟まれた地域を指す。ナースィル・ムハンマドによるこの地域での運河掘削事業が他の治水事業と異なる点は、地方やむら単位で掘削・改修が行われた個々の運河、灌漑水路、灌漑土手、灌漑ため池などの水利施設と比べると、規模が大きいことと、農業とは直接の関係が薄いと考えられる首都カイロの西部という都市域で行われた点である。この地域において、大規模な治水事業が集中して行われた例はマムルーク朝時代を通じても多くは見られない。

¹ 『アミール・キトブガーへの覚書』の翻訳、解説については、Sato, *State and Rural Society*, pp. 91-123 (佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』409-438頁)を参照。水利に関する項目は、第13、14、15項目に記載されている。なお、佐藤が典拠とした *Ṣubḥ* と *Ibn al-Furāt* に所収されているマムルーク朝時代の「覚書 *tadhkira*」は、このキトブガーに対して記されたもののみである。このほかに、シャーフィウ・イブン・アリー Shāfi' Ibn 'Alī (649-730/1252-1330年) の *al-Faḍl al-Ma'ūr min Ṣīra al-Sultān al-Malik al-Manṣūr* (MS. Marsh 424, Bodleian Library, Oxford) に所収されている3篇がある (Cf. Lewicka, "What a King Should Care About," pp. 5-45)。



図版5 カイロ—スィルヤークース

(William, "The Khānaq Siryāqūs"をもとに著者作成)

このカイロ西部地域における運河掘削事業の目的については、既にいくつかの見解が示されている。ハンナ N. Hanna は、アイユーブ朝時代の末期から、マムルーク朝時代初期にかけて発生した、ナイル川の流域の西側への移動に伴い、それまでナイル川を利用し運ばれてきた物資をカーヒラに水揚げし、課税を行っていたマクス al-Maqs の港が内陸に位置するようになり、カーヒラへの物資運搬ルートとして新たなナイル河岸の港であるブーラーク Būlāq とマクスの間の交通を容易にすること、第二に、人口増加時期であった同時代に、ナイル川とカーヒラとの距離が離れたことによって発生した飲料水の高騰に対し、新たに給水源を増やすこと、この2つが潜在的要因であると述べ

ている²。また、レイモン A. Raymond は、流域変化に伴いカイロ西部に新しく現出した土地への都市拡張を可能にするために運河掘削がなされたと述べている³。これらは、主に都市機能の拡張という視点からの見解であり、自然変化の時期とナスイル・ムハンマドの統治期とが重なったとしている。これに対し、ウィリアム J. Willam とラバト N. Rabbat はカイロの北 15 キロほどのスィルヤークース⁴にナスイル・ムハンマドが建設したスーフイーの修道場ハーンカー (khānqāh) と宮殿を中心とするスルターン夏の離宮への移動のために運河が掘削されたとし、これに伴いカイロ西部で運河沿いに都市機能が拡張したことは、副次的な産物であるとしている⁵。しかし、これらの見解は、都市拡張やスィルヤークースにおける建設事業の補足としてのみ運河掘削事業を捉えており、ナスイル・ムハンマドが行った治水事業全体の中での位置づけは行われていない。同時期の水利行政については、農村レベルにおける水利施設の管理、維持について、すでに佐藤により言及がなされているが⁶、大規模運河の掘削、管理の詳細についての研究は不十分である⁷。

ここでは、以上の先行研究を踏まえつつ、ナスイル・ムハンマドの運河掘削事業について、その情報が比較的多く残されているナスイル運河の掘削事業を中心に分析する。これにより、マムルーク朝期のエジプトにおける治水事業の一端を明らかにする。

第1節 運河とナイル川の増水

第1章第1節で説明したように、エジプトにおけるナイル川を利用した灌漑水利の施設としては、農地に灌漑用水を導水する運河 (khalij)⁸、灌漑水路 (tur'a) のほか、増水したナイル川の水を堰き

² Hanna, *An Urban History of Būlāq in the Mamluk and Ottoman Periods*, pp. 1–7.

³ Raymond, *Le Caire*, pp.130–133.

⁴ Siryāqūs:カイロの北に隣接するカルユーブ地方 Qalyūbiya にあり、もともとはコプト教徒が多く住む巡礼地の一つであった。地名もコプト語の Sirīāqous に由来する。(Muḥammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Juḡhrāfi lil-Bilād al-Misrīya*, vol. 2-1, p. 35) また、同地の地名の読み方には Saryāqaus (*Mu'jam al-Buldān*, s.v. [s-r-q-s]) ともあるが、本論ではスィルヤークース Siryāqūs と統一して記述する。ヤークートによればカーヒラとスィルヤークースの距離は1バリード (barīd: 1 バリード≒12 キロ) であると述べている。

⁵ Williams, “The Khānqāh Siryāqūs: A Mamluk Royal Religious Foundation,” pp. 109–119; Rabbat, *The Citadel of Cairo*, pp. 231–234. ハンナ、レイモンもナスイル運河の建設目的の中にスィルヤークースへの物資運搬を挙げ、経済的な側面を重視している。

⁶ Sato, *State and Rural Society*, pp. 220–227 (佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』340–348頁) に農村単位での水利施設の管理について言及を行っている。

⁷ スルターン主宰の大規模水利の実例については、Sato, *State and Rural Society*, pp. 227–230 (佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』349–356頁) を参照。

⁸ pl. khuljān. khalij には、運河の他に「湾 (sharm)」や水が吹き出る場所の意味があり、大量の水が存在する場所を指す (*Muḥīt*, s. v. [kh-l-j]).

止める灌漑用の土手であるジスル (jīsr) がある⁹。マクリーズィーの『エジプト地誌』では、ナイル川の増水が満水を迎えた後、運河と灌漑水路の水門や堰を開くことで、ナイル川の流れから離れた場所に水を通すことが出来ると述べている¹⁰。これらの水利施設の主たる目的は、農地に水を供給することであるが、そのほかに農地で収穫された農産物を運搬するためにも利用された。特に、運河としては規模の大きいミスル運河、アレクサンドリア運河、ダミエッタ運河などは、地中海や紅海と首都カイロを結ぶ、物資の運搬ルートとして重要な役割を担っていた。例えば、ミスル運河はアラブ・イスラーム勢力によるエジプト征服直後に第2代正統カリフ・ウマル Umar b. al-Khaṭṭāb (在位 13-24/634-644年) の命により、エジプト征服軍司令官のアムル・ブン・アル=アース Amr b. al-ʿĀṣ (43/663年没) に運河の改修を行わせている。これにより、エジプトで産出された小麦を紅海経由でアラビア半島のヒジャーズ地方に供給するルートを確立させようとしたことが伝えられている¹¹。このときの改修によりミスル運河はフスタートの北側から現在のスエズ近くまで掘削がなされ、紅海に直結する灌漑と物資運搬の2つの機能を持つ運河として機能していたが、アッバース朝カリフ・マンスール al-Manṣūr Abū Jaʿfar b. Abd Allāh b. Muḥammad b. ʿAlī al-ʿAbbās (在位 136-158/754-775年) の時代にメディナでムハンマド・ブン・アブド・アッラー Muḥammad b. ʿAbd Allāh によるシーア派の反乱が起きると、マンスールはエジプトの総督に命じて、穀物を運ばせないためにミスル運河の河口部分を埋めてしまったという。この事件以降、ミスル運河から紅海への直接の航行はできなくなったとされる¹²。その後、969年にファーティマ朝によりカリフの居城としてカーヒラがミスル運河の東岸に建設されると、同運河にはカーヒラ運河 al-Khalīj al-Qāhira という名称が加わる¹³。

ミスル運河をはじめエジプトの大規模運河の規模については不明な点が多いが、例えばイブン・マンマーティーの『官庁の諸規則』が伝えるところによれば、ナイル川と地中海岸の港町アレクサンドリア運河は、川幅と深さはそれぞれ2と1/2カサバ¹⁴ (約10m) あり、小型の船であれば航行には全く問題のない広さと深さを持っていたことが窺える¹⁵。また、711/1311年にはナーシル・ムハンマドの命により拡張工事が行われ、幅8カサバ (≒32m)、深さ6カサバ (≒24m) にまで拡張されたことが知られており、船舶の航行が滞らぬように意を尽くしたことが知られている¹⁶。

さて、これらの運河を利用する主たる目的は次の3つが考えられる。第1に、農耕地への水の供

⁹ ジスルについては本論第1章第2節、第4節を参照。

¹⁰ *Khīṭat*, 1:70.

¹¹ *Khīṭat*, 2:139.

¹² *Khīṭat*, 2:139.

¹³ *Khīṭat*, 2:140.

¹⁴ 1カサバ (qasaba) は3.99m。

¹⁵ *Qawānīn*, 221-222.

¹⁶ 佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』353頁。

給（後述するナースィル検地の前後には、農耕地に対する目的での水利関係の造営・修復が頻繁に行われた¹⁷）、第2に、収穫された穀物をはじめとする物資の運搬、第3に、飲料水の供給が挙げられる。しかし、カイロ周辺の運河やアレクサンドリア運河、ユースフ運河をはじめとする、通年利用可能な大規模運河を除く農業灌漑に利用される運河は、ナイル川が増水する夏の2ヶ月間だけ使用可能となるために、以上の3つの目的が常に果たされていたわけではないことに留意する必要がある。

そのため、ナイルの増水 (*ziyāda*) は、上記3つの目的がすべて満たされることを表す重要な祝祭の意味を持ち合わせていたと考えられる。古来、ナイルの増水はエジプトの富の源泉であったが、アイユーブ朝やマムルーク朝時代のカイロにおいても「ナイルの満水 (*wafā' al-Nīl*)」が発表されると盛大な祝典が執り行われることが恒例になっていた。ローダ島に設置されたナイル水位の計測施設であるミクヤース (*miqyās*) での観測結果が発表され、満水時の水位が16から17ジラー (*dhīrā'*) であれば、翌年は豊作であると言われていた。これに対して、これより水量が多ければ水害が起き、少なければ旱魃となり、小麦をはじめとした穀物の価格が急騰したことが伝えられている¹⁸。このため、豊作が約束されるナイル川の満水が期待通りの水位に達した時には、物価は安定の方向に向かい、カイロの市民は川に船を繰り出して満水を祝ったとされている¹⁹。

第2節 カイロ周辺の運河

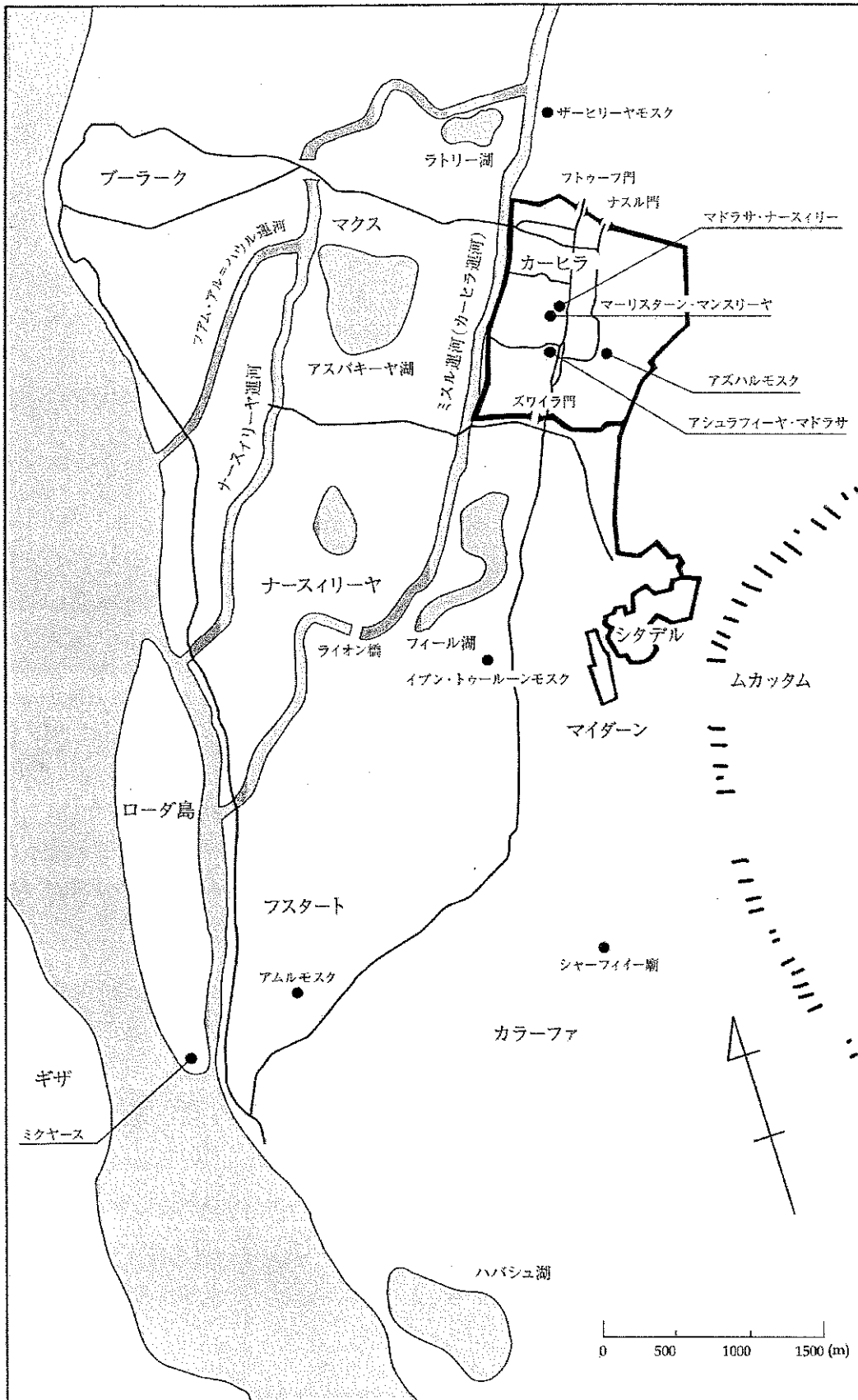
マムルーク朝の首都カイロ周辺の運河としては、ナースィル・ムハンマド時代以前からフスタートの北側に取水口を持つミスル運河 *al-Khalīj Miṣr* が存在し、カイロを構成する街であるフスタート *al-Fustāt* とカーヒラを結び、メッカ、メディナ両聖都が存在するアラビア半島のヒジャーズ地方への物資運搬という重要な働きを持っていた。この運河はイスラーム征服以前から存在する運河の一つであると考えられているが、エジプトの政治経済の中心地に近いという立地条件から、イスラーム征服以降は重要な位置を占めてきたと言えよう。特にイスラーム初期には、ヒジャーズ地方にエジプトの小麦を運ぶために使用されていたことが知られている。『エジプト地誌』に拠れば、このミスル運河は時代によってその呼称を変化させている。以下はその主要なものである²⁰。

¹⁷ Levanoni, *A Turning Point in Mamluk History*, pp. 143–148.

¹⁸ *Ighātha*, 28, 48.

¹⁹ ミクヤースとナイルの満水儀礼については、石黒大岳「ブルジー・マムルーク朝時代におけるナイル満水儀礼の執行者たち：マカームの登場とその背景に関して」120–141頁；長谷部史彦「王権とイスラーム都市」247–267頁を参照。

²⁰ *Khiṭat*, 2:139–144.



図版6 カイロ周辺の運河

(著者作成)

- ① アミール・アル=ムーミニーン運河 *Khalīj Amīr al-Mu'minīn* : 第2代正統カリフ・ウマルの命による改修に由来。
- ② カーヒラ運河 *Khalīj al-Qāhira* : ファーティマ朝が運河沿いにカーヒラを建設したことに由来。
- ③ ハーキム運河 *al-Khalīj al-Ḥakīmī* : ファーティマ朝第6代カリフ・ハーキム・ビ・アムリ・アッラー *al-Ḥakīm bi-Amr Allāh al-Fāṭimī* (在位 386-412/996-1021年) の修復に由来。
- ④ 真珠運河 *Khalīj al-Lu'lu'*
- ⑤ 大運河 *al-Khalīj al-Kabīr*

以上の名称のうち、マムルーク朝時代は一般にハーキム運河もしくは真珠運河と呼称された。また、このような呼称の変化は、エジプトの首府であるフスタートとカーヒラに在住する人々とミスル運河の関係が密接であり、常にその重要性が高かったことを示している。

この他のカイロ周辺における運河としては、ザカル運河 *Khalīj al-Zakar*、ザカル運河を改修・拡張した、ファム・アル=ハウル運河 *Khalīj Fam al-Khawr*、カンタラ・アル=ファフル運河 *Khalīj Qanṭara al-Fakhr*、ナーシイル運河 *al-Khalīj al-Nāṣirī* があつた。これらの運河はすべて、ナーシイル・ムハンマドによって掘削・改修が行われた運河である。またこれらの運河の掘削・改修はすべて、725/1325年前後に行われていることが特徴である。

これらの中で、最初にナーシイル・ムハンマドが改修を命じたのが、ファム・アル=ハウル運河である。この運河は724/1324年に、当時すでに荒廃に帰していたザカル運河を改修させたものである。マクリーズィーの『エジプト地誌』に拠れば、この運河掘削の目的はナーシイル運河の水の流れを強化し水量を豊かにするためと記されているが²¹、これはナーシイル運河よりも早く掘削された事実と矛盾を生じている。この問題点については、同時代史料であるスワイリー『学芸の究極の目的』では「ザカル運河の代わりにナーシイル運河と呼ばれる新設の運河の掘削を命じた」²²と伝え、イブン・ハビーブ *al-Ḥasan b. 'Umar b. Ḥabīb* (779/1377年没) の『回顧録 *Tadhkirat al-Nabih fi Ayyām al-Manṣūr wa Banīh*』では、「スルターン—神よ彼を援助し給え—は、スィルヤークースに至る運河をファム・アル=ハウル (ナイル岸の入江) から掘削することを命じた」とあり、後述するように、ナーシイル運河と同様の目的で、掘削が決定されたことを伝えている²³。つまり、この2つの運河の掘削は連続したひとつの水利事業と捉えることが出来るが、後述するナーシイル運河掘削の経緯と共により詳細な検証を行う。

一方、カンタラ・アル=ファフル運河はファム・アル=ハウル運河と同様にナーシイル運河と連結

²¹ *Khīṭat*, 2:144–145.

²² *Nihāyat al-Arab*, 33:182.

²³ *Tadhkira*, 145; *Ibn al-Wardī*, 2:392; *Khīṭat*, 2:144–145.

する運河であるが、こちらはナースィル運河の後に掘削されたと伝えられており齟齬はない。この運河の重要性はその位置関係にある。この運河はブーラク付近から取水され、マクスの近くでナースィル運河へと流れ込んでいる。『エジプト地誌』に拠れば、この運河の目的は、ナースィル運河の流れを強化するためのものと記されているが、もう一つの重要な目的としては、ブーラクの港から物資をマクスに運び課税するためと、カーヒラに物資を搬入するために便宜を図ったものと考えられることのできるであろう²⁴。

以上の2つの運河の掘削・改修には、ナースィル運河掘削の目的についても重要な示唆が含まれていると言えよう。それは、ミスル運河もしくはナースィル運河の水量を増やすことが目的とされていることである²⁵。特に、ナースィル運河とファム・アル=ハウル運河の掘削目的は、「スィルヤークースに至る (intahā) 運河」²⁶を掘削することであったのに対し、実際にはこれらの運河はスィルヤークースまでは掘削されておらず、「スィルヤークースに至ることが出来るように」ミスル運河の水量を増加することであったと考えられる。つまり、これらカイロ西部に掘削された運河はミスル運河に対するバイパスとしての働きを持つ運河であったと言える。

第3節 ナースィル運河掘削の背景

ナースィル運河の掘削を命じたナースィル・ムハンマドは、マムルーク朝の最盛期のスルターンとして知られる。一般にナースィル期の繁栄の理由として、まず第一に大規模な対外戦争が終わったことが挙げられる。2世紀にわたるシリアの十字軍勢力も、ナースィル・ムハンマドの兄であるスルターン・アシュラフ・ハリール al-Ashraf Khalīl b. Qalāwūn (在位 690-693/1290-93年) による691/1291年のアッコンのAkkāの攻略で終焉し²⁷、また、モンゴル勢力に対しては、ナースィル・ムハンマド治世の723/1323年にイル・ハン国との間に講和が結ばれた²⁸。これによりマムルーク朝統治下のエジプト、シリアでは対外関係の安定期を迎え、膨大な戦費が抑えられたと考えられる。また、第二に、内政面では、ナースィル・ムハンマドはマムルーク朝領内全域にわたるナースィル検地 (al-Rawk al-Nāṣiri) ²⁹の実施を通して、イクター制に基づく土地制度を整備し、「マムルーク支配体

²⁴ *Khīṭat*, 2:146. Cf. Hanna, *An Urban History of Būlāq*, pp. 1-7.

²⁵ *Khīṭat*, 2:145.

²⁶ *Sulūk*, 2:261.

²⁷ Holt, *The Age of the Crusades*, pp. 103-105.

²⁸ Amitai-Preiss, *Mongols and Mamluks*, p. 68.

²⁹ 713/1313-14年にシリアの中南部を手始めとして、715/1315年にエジプト、717/1317年にトリポリ、725/1325年にアレppoで実施されたマムルーク朝領内の農地の面積、収穫高を検地した。以上の4回にわたる検地を総称して「ナースィル検地」と呼ぶ。ナースィル検地の実施内容については、Sato, *State and*

制を完成」したことが挙げられる³⁰。このことから、アミールの改廃・粛清を通してナーシルは絶対的な政治基盤を築きあげたと考えられている。また、対外的な平和と農業を始め、ガラス、砂糖などの国内産業の基盤も彼の時代に最高潮に達しマムルーク朝時代の最盛期を迎えたとされる³¹。

ナーシル・ムハンマドの第3期治世は、マムルーク朝全体から見れば比較的安定した時代であったが、何度か天災にも見舞われている。ナーシル運河が掘削されたとされる、725/1325年直前の723/1323年、724/1324年には連続してナイル川の水位が異常に上り、水害を受けている³²。アシュトール E. Ashtor は、この年を含めナーシル治世において何度か小麦粉の値段が上昇したことを指摘している³³。また723/1323年の水害では、ブーラークを中心としたカイロ西部が水没し、果樹園や住宅に被害があったため、スルターン自らが指揮してナイル河岸の堤防 (jizr) の改修を行ったと伝えられている³⁴。このように、絶対的な権勢を誇ったナーシル・ムハンマドにしても、ナイル川の水系を管理することが必ずしも容易ではなかったことが窺える。そして、これらの水害が運河掘削に影響を与えたと考えられる。

また、ナーシル・ムハンマドが運河掘削を行った契機として、多くの史料が伝えているところによれば、カーヒラの北方約20キロのところにある、ミスル運河沿岸のシルヤークースに建設したハーンカー (khānkāh) と宮殿 (quṣūr/sg. qaṣr) への物資の運搬が挙げられている。シルヤークース近郊のハッジ湖 Birkat al-Hajj の畔はアイユブ朝時代から知られるスルターンの狩猟場があり、ナーシル・ムハンマド自身もこの地にマイダーン³⁵を建設していた。723/1323年に山の城塞においてスルターンの御前会議を執り行うダール・アル=アドル Dār al-'Adl の建設を終えたナーシル・ムハンマドは、新たな宮殿の建設場所としてこの地を選んだとされる³⁶。シルヤークースが宮殿とハーンカーの造営の候補地となった理由については明らかとなっていないが、『エジプト地誌』には、ここで狩りをしていたナーシル・ムハンマドが突如、腹痛に襲われ、その回復を神に祈願したこ

Rural Society, pp. 135–152 (佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』223–238頁) を参照。

³⁰ マムルーク朝時代の検地とイクター制に基づくマムルーク支配体制については、Sato, *State and Rural Society*, pp. 124–161 (佐藤『中世イスラム国家とアラブ社会』223–248頁) を参照。また、五十嵐はナーシル期のマムルーク支配体制をナーシル・ムハンマドの絶対的権力下における特殊な時期とし、「ナーシル体制」として別個に考察するべきとしている (五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』7頁)。

³¹ Holt, “The Mamluk Sultans: 1250–1517,” p. 724.

³² *Sulūk*, 2:251, 258.

³³ パフリー・マムルーク朝期における小麦等の物価の動向については、Ashtor, *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*, pp. 288–301 を参照のこと。

³⁴ *Sulūk*, 7:251.

³⁵ Maydān: 現在は広場と訳されるが、中世においては軍人の馬術教練を行う馬場 hippodrome やアラビア語で *kura* または *akra* と呼ばれるポロを行う競技場、または闘兵などを行う空間。マムルーク朝時代のカイロのマイダーンについては、Rabbat, *The Citadel of Cairo*, pp.104–106 を参照。

³⁶ Rabbat, *The Citadel of Cairo*, p. 231.

とがハーンカー建設の契機になったという伝承を伝えている³⁷。しかし、実際はもともと軍事教練のマイダーンを建設し、狩猟のため度々訪れる同地に行政上の拠点を新たに築くことがその目的であったと考えられる。また、スィルヤークースはカイロから近距離にあり、カイロで政変が起きたとしても、数時間で戻れるという立地条件が重要であったとされる³⁸。

スィルヤークースにおける建設事業は、723/1323年の宮殿造営に始まり、725/1325年のハーンカー建設まで続いた³⁹。ナーシル・ムハンマドは、ナーシル運河掘削の1ヶ月前のラビーII月に自ら技師 (muhandis) を引き連れてスィルヤークースの郊外を訪れ、ハーンカーの建設を指揮した。このハーンカーにはスーフィーのために100の宿泊施設 (khulwa)、浴場 (ḥammām)、調理場 (maṭbakh)、モスクが併設された⁴⁰。その他に、ハーンカーの周りには、住居やスルターン子飼いのアミール達 (al-umarā' al-khāṣṣakīya) のための宮殿も併設された⁴¹。このハーンカーはナーシル運河の掘削中に完成し、ジュマダーII月の初めにはアミールの他、裁判官 (qādī) や高名な法学者などを招いた盛大な宴席 (walīma) が設けられた。数日間続いたこの宴席でアミールを始め列席者に褒賞が与えられ、また、ハーンカーの長 (shaykh)、スーフィー、そして貧者に対しても金品が下賜された。このとき、ハーンカーの長であるアクサライー Majd al-Dīn al-Aqṣarāyī (740/1339年没)⁴² に大シャイフ (Shaykh al-Shuyūkh/Mashyakha al-Shuyūkh) の称号 (laqab) が与えられた。この称号はそれまでエジプトにおいては、ハーンカー・サイード・アル=スアダー (Khānqāh Sa'īd al-Su'adā') のシャイフにのみ付与された称号であった⁴³。このことから、ナーシル・ムハンマドがこのハーンカーの建設を重要なものと考えていたことが窺える。

この大シャイフは、マムルーク朝時代においては宗教職 (arbāb al-wazā'if al-dīniya) のひとつとして挙げられている。『黎明の書』に拠れば、ハーンカー・スィルヤークースとハーンカー・サイード・アル=スアダーとして知られるハーンカー・サラヒーヤのシャイフがこの職に就いたとしており、

³⁷ *Khīṭat*, 2:422.

³⁸ Rabbat, *The Citadel of Cairo*, pp. 231–233.

³⁹ *Kanz al-Durar* (9:319) によればこのハーンカーの建設は725年ジュマダーI月9日/1325年4月23日に完了したと伝えている。また *Sulūk* (2:251) に依れば723年ズー・アル=ヒッジャ月の終わり頃/1323年12月終わり頃に建設が開始された。

⁴⁰ スワイリーは、スーフィーの数を40名としている。また、スーフィーたちには各々毎月40ディルハムと毎日3ラトルのパン (khubz) が支給されたとしている (*Nihāyat al-Arab*, 33:183)。

⁴¹ *Khīṭat*, 2:145; *Sulūk*, 7:251.

⁴² *al-Durar al-Kāmina*, 3:373.

⁴³ 大シャイフの称号はそれまで、ハーンカー・サイード・スアダー (Khānqāh Sa'īd al-Su'adā') のシャイフにのみ与えられていた。このハーンカーは、ファーティマ朝時代に建設された宮殿の一部がサラディン Ṣalāḥ al-Dīn の発願によって596/1173–74年にハーンカーに改められ、ワクフが設定された。以後、ハーンカー・スィルヤークースが建設されるまで、エジプト第1のハーンカーとされた (*Khīṭat*, 2:415–416; Fernades, *The Evolution of a Sufi Institution in Mamluk Egypt*, 21–25)。

大カーディー職 (Qāḍī al-Quḍāt)、軍事カーディー職 (Qāḍī al-‘Askar)、公正の家のムフティー職 (iftā’ Dār al-‘Adl)、国庫の代理人職 (Wakāla Bayt al-Māl)、ヒスバ職 (al-Hisba or Muhtasib) に次いで第6位の宗教職とされた。上記5つの上位職と異なり、スルターンの諮問機関である御前会議 (majlis) に出席する義務はなかったとされている⁴⁴。

以上述べたように、ナースィル・ムハンマドの運河掘削の背景には経済的および政治的な複数の要因が含まれていることが明らかとなったが、次に実際の掘削の過程をたどることでこの時代における水利事業の運営について検討することにしたい。

第4節 ナースィル運河掘削の経緯

ナースィル運河の掘削の経緯については、マクリーズィーが最も詳細な記録を残している。そこで、彼の記録を中心に掘削の経緯を追いつつ、その他の史料と比較検討を行い、この水利事業の全容について分析を加えてゆく。

まず、掘削事業の工期については、『エジプト地誌』では掘削工事は725/1325年のジュマードーI月初めに始められ、ジュマードーII月の終わりまでの約2ヶ月間を要したと伝えている。この掘削期間については、他の年代記とほぼ同様であるが⁴⁵、イブン・アイバク・アル＝ダワーダーリー Ibn Aybak al-Dawādārī (8/14世紀没)の『真珠の宝庫 *Kanz al-Durar wal-Jāmi‘ al-Ghurur*』では「(724/1324年) シャーバーン月、(スルターンは) スィルヤークースに至るナースィル運河の掘削を命じた」と記しており、一方、725/1325年の記事ではナースィル運河の掘削については触れていない⁴⁶。しかし、この年のシャーバーン月は西暦で1324年7月に当たり、すでにナイル川は夏季の増水期に入っているため工事は不可能である⁴⁷。つまり、この1ヶ月前に行われたファム・アル＝ハウル運河の工事によって当初の目的を果たせなかったことが判明したため⁴⁸、新たな運河掘削を計画したものと考えられる。

また、イブン・イヤース Muḥammad b. Aḥmad Ibn Iyās (930/1524年頃没)『花々の驚異 *Badā‘i‘ al-Zuhūr fi Waqā‘i‘ al-Duhūr*』においても724/1324年の出来事として伝えているが、これについては説明が必要であろう。少なくとも725/1325年前後の『花々の驚異』の記事には、年代と記載内容の混同が生

⁴⁴ *Subh*, 4:35–39.

⁴⁵ *Khiṭat*, 2:145; *Sulūk*, 3:80; *Badā‘i‘ al-Zuhūr*, 1:455; *Kanz al-Durar*, 9:319; *al-Nujūm al-Zāhira*, 9:82; *Husn*, 2:328.

⁴⁶ *Kanz al-Durar*, 9:315, 319.

⁴⁷ 暦とナイル川の増水の関係については本論第1章第2節を参照。

⁴⁸ *Khiṭat*, 2:144.

じている。例えば、タクルール al-Takrūr (現在のマリ共和国周辺地域) の王、マンサー・ムーサー Mansā Mūsā (在位 711-37/1312-37 年) のメッカ巡礼の途上のエジプト来訪については、他の年代記が 724/1324 年の出来事としているのに対し⁴⁹、『花々の驚異』では 723/1323 年の出来事としている。また、スィルヤークースのハーンカーのシャイフであるアクサライーに大シャイフの称号を与えたのは、ハーンカー完成後の 725/1325 年の出来事であるのに、723/1323 年にハーンカーの建設とまとめて書かれている。同様に、ナースィル運河の他に、前年の 724/1324 年に掘削されたファム・アル=ハウル運河の掘削についても触れているので、724 年の記事にまとめて書かれた可能性がある。

また、工事期間である 725/1325 年のジュマードーI月からジュマードーII月は西暦で換算すれば、おおよそ4月中旬から5月中旬にあたる。この時期はちょうどナイル川が増水し始める直前の時期である。前年のファム・アル=ハウル運河の掘削もジュマードーI月に行われた⁵⁰が、これも西暦では4月から5月頃にあたる。先に挙げた『アミール・キトブガーへの覚書』の第14条でも、「カイロ郊外の灌漑土手 (*jusūr*) は、その完成や拡張を急ぎ、その建設や運河 (*masārib*) の掘削、および破壊からの保全に努める。そしてナイルの増水期まで完全な状態が保持されるようにする⁵¹」、と述べられているように、運河をはじめとする水利関係の工事はナイル川が増水する前の春に行われるのが慣行であったと考えられる。

この工事の監督官には、当時の副スルターン (*nā'ib al-saltāna*) であったサイフ・アル=ディーン・アルグーン Sayf al-Dīn al-Argḥūn⁵²が任命された⁵³。彼が監督官に命じられた理由については、『花々の驚異』では、「この運河が掘削される時、この方面に土地を所有しているアミールら全員に割り当てが行われた。そして、彼らはそれに従った」⁵⁴とあり、また『エジプト地誌』、同じくマクリーズィーの『諸王朝知識の旅 *al-Sulūk li-Ma'rīfat Duwal al-Mulūk*』においても、ナースィル運河の掘削現場にサイフ・アル=ディーン・アルグーンが果樹園を所有していたことが述べられている⁵⁵。以上のことから、サイフ・アル=ディーン・アルグーンが監督官に任命された理由は、副スルターンとしての、役職上のことも考慮に入れるべきであるが、掘削現場に果樹園等の土地を所有するアミールの一人であったことが要因としてあげられよう。同様に、前年 724/1324 年に行われたファム・

⁴⁹ *Sulūk*, 3:73; *Ibn al-Wardī*, 2:393.

⁵⁰ *Khīṭaṭ*, 2:144.

⁵¹ 佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』416頁。

⁵² Argḥūn al-Dawādārī al-Nāṣirī: ナースィルムハンマド直属のマムルーク出身のアミール。731/1330年没 (*al-Durar al-Kāmina*, 2:376)。

⁵³ *Khīṭaṭ*, 2:145.

⁵⁴ *Badā'i' al-Zuhūr*, 1:455.

⁵⁵ アルグーンはカルムート池 Birkat Qarumūt 近辺に果樹園を所有していたことが知られている (*Khīṭaṭ*, 2:145; *Sulūk*, 3:73)。

アル=ハウル運河の掘削では、アミールのアラー・アル=ディーン・ムグルターイ‘Alā’ al-Dīn Muḡhlṭāy al-Jimālī (732/1331 年没)⁵⁶が掘削の総指揮者に任命されているが、彼も同地に土地を所有していたことが知られている⁵⁷。

このように運河掘削工事の監督を行う担当者の指名に関する基準は明確ではないが、ナーシイル運河の場合は、サイフ・アル=ディーン・アルグーンのように工事予定地に土地を所有するアミールの中で、高位のものが選ばれたことは、工事に対する反対者を抑える意図があったと思われる。

次に、掘削の準備について監督官に任命された副スルターンのサイフ・アル=ディーン・アルグーンは、技師 (muhandisūn) を伴って実際にナイル河畔に赴いて測量を行い、掘削予定地が決まるとスルターンに報告を行った。その後、アミールに彼らのイクターから労働力として農民の徴発を命じ、各地の行政官であるワーリー達 (wulāt/ sg. wālī) に掘削の労働者 (rijāl/ sg. rajul) を集めるよう命令書を送った⁵⁸。また、『諸王朝知識の旅』ではアミール達にそれぞれ一定の工区の長さを掘削することを請け負わせたと述べている⁵⁹。このように、スルターン主導の大規模な水利事業においてはエジプト全土のアミールやワーリーに工事を分担して請け負わせていた事例が知られている⁶⁰。このように、ナーシイル運河の掘削事業自体は、それまでのスルターンによる大規模な掘削事業と同様の手順を経ていることが窺える。それらの行政上の慣習は次のようにまとめられる (図版 7 参照)。

- ① スルターンが施主として水利事業を主催。自ら指揮をとる場合もある。
- ② 各地の地方行政官 (ワーリー)、軍司令官 (アミール)、兵士らに仕事が分担される。各イクターから農民を労働力/賦役 (sukhra) として提供。
- ③ 農民には労働力等の提供が義務付けられる。農民以外に日雇い労働者 (rajul) が確認できる。その構成・実態は不明。
- ④ 資金や食料は政府が国庫 (Bayt al-Māl) から支給し、それ以外は各アミールらイクター受給者の持ち出しとなる。
- ⑤ 通常、ジスルの改修は、コプト農事暦のアムシール月 (1 月末～2 月末) に行われることが慣行となっていたが、国家的な大規模水利事業についてはこの限りではない。

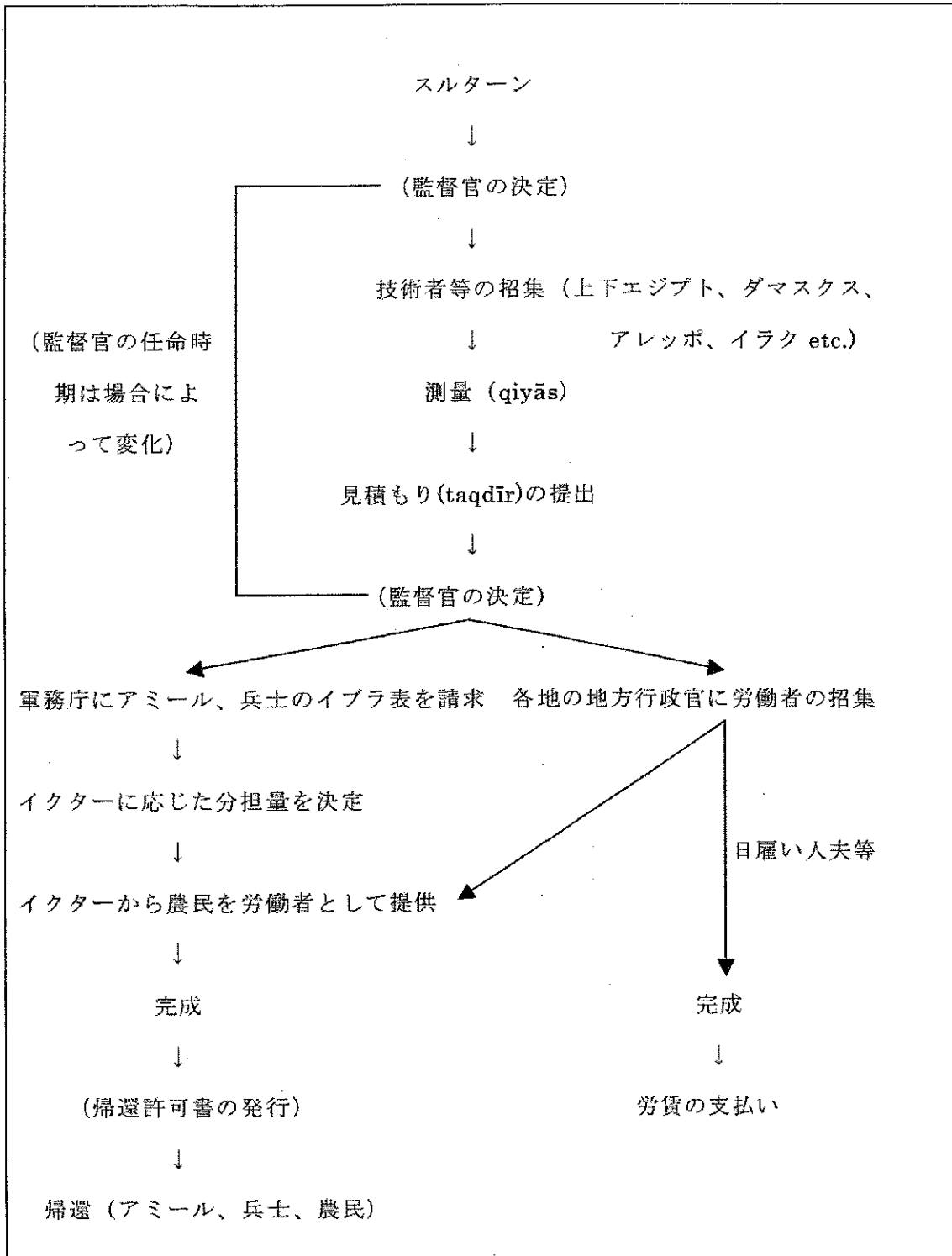
⁵⁶ *al-Durar al-Kāmina*, 5:124.

⁵⁷ *Tadhkira*, 2:145.

⁵⁸ *Khīṭa*, 2:145.

⁵⁹ *Sulūk*, 3:80; *al-Nujūm al-Zāhira*, 9:82.

⁶⁰ 佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』354 頁。



図版7 バフリー・マムルーク朝時代の大規模水利における行政手続きのモデル

(著者作成)

次に、建設の開始と共にまず行われたことは、建設予定地を更地にすることであった。掘削場所に存在した建物は取り壊されたが、その際に補償を行うことが命じられた。建物の所有者はその所

有物 (milk) を売ることができ、その場合は政府予算 (māl al-sultān) から代価 (thaman) を受け取った。また、自ら建物を取り壊してその残滓 (anqād) を別の場所に移すこともできた⁶¹。このような買取あるいは補償措置が、大規模な工事に於いて常に行われたかどうかは不明であるが、少なくともナースィル運河の場合には、運河と運河沿いの土地は国庫 (bayt al-māl) の所有地となり、運河の使用権についても同様に政府に所属するものとなったと考えてよいであろう。ただし、『エジプト地誌』に拠れば、運河沿いの土地については、運河の完成後に一般に売りに出されたと述べられている⁶²。

ナースィル運河が完成した後、カイロ西部の発展の様子についても『エジプト地誌』では次のように伝えている。

ナイルの増水期には水が流れ、人々は多くの荷 (awsāq/sg. wasq) をもたらし、運河を小麦やそれ以外のものを積んだ船が行き交った。スルターンはそのことに喜び、人々に恩恵を施した。人々のそこ (運河周辺) に対する羨望が高まった。人々は国庫に属する土地から多くの土地を購入し、そこに木々を植えた。また、人々はこの運河の兩岸に家を建てた。そして、マクスからブーラクの岸まで家が立ち並んだ。家々がこの運河沿いに増え、運河の始まり (取水口) である、マウリダ・アル=バラート Mawridat al-Barāt から、大運河 (ミスル運河) に注ぐ場所まで (ナースィル運河の流域全体) の土地に連なった⁶³。

このように、運河沿いの土地は先に述べたように、一般に売りに出されることによって住宅地もしくは商業地として利用されるようになった。また、支流が幾つも作られることで、広範囲に住宅地が広がったことも窺える。この地域の発展についてレイモンは、マムルーク朝時代においては、カイロ西部の発展はミスル運河とナースィル運河に挟まれた限定的場所だけのものであるとし、カイロ西部全体が街区として利用されるのは、オスマン朝期に入ってからであるとしている⁶⁴。しかし、先の記述からも明らかなように、このカイロ西部はナースィル運河が開通する前から果樹園や建物がすでに建設されていて、すでに利用されていた土地であったこと、そしてナースィル運河の掘削後は、この運河を利用した商業地区としての発展が見られたことが窺える。ナースィル運河を

⁶¹ *Khīṭat*, 2:145.

⁶² *Khīṭat*, 2:145; *Sulūk*, 3:80.

⁶³ *Khīṭat*, 2:145.

⁶⁴ アンドレ・レイモンは、この土地の売却については、ナースィル・ムハンマドから彼の子飼いのアミール達に下賜されたとしている (Raymond, *Le Caire*, pp. 131–132)。

はじめとする一連の運河掘削によってこの地域が以前よりも利便性が高い土地になったことは疑いようがないであろう。特に、カイロの外港であるブーラクとマクスの運河網による結合は、この後のカイロの経済と市民生活の発展には不可欠な基盤となったことは間違いないようである。

小結

本章の分析を通じて、ナースィル・ムハンマドによるナースィル運河をはじめとするカイロ西部における一連の運河掘削事業は、ナースィル・ムハンマドの新たな政治拠点であるスィルヤークースのハーンカーと宮殿の建設が契機であったことが明らかになった。そして、このスィルヤークースの建設は、アクサラーイーの大シャイフ任命に見られるように、政治的に重要な出来事であったと考えられる。そのため、カイロとスィルヤークースを運河によって結合させることは、重要な意味を持っていたと考えられる。一方、運河掘削のもう1つの理由として、カイロ西部における交通網の整備を行うという二重の目的があったことが明らかとなった。カイロ西部に運河網が形成されることで、土地の利用価値が上がり、それに伴い商業地・住宅地が建設されることで、この地域における経済的な発展の基礎が形成されたと言える。このように、ナースィル運河をはじめとする、カイロ西部で掘削された運河は複合的な目的を果たすよう、計画的に行われた水利事業であったと言える。

また、ナースィル運河掘削の目的は、通常農業を目的とした水利機構の整備とは異なるものであったが、その建設過程においては、アミールと各地の行政官に作業を分担させるという、他の政府管理に属する水利機構の建設・改修と同様の手続きが採られたことが明らかとなった。このことから、スルターンによる大規模な水利事業には、行政上の慣行と手続きが成立していたことが窺える。同時に、船舶の航行を可能とするために、ミスル運河を拡張するのではなく、ナースィル運河をはじめとする複数の運河を組み合わせることで、ミスル運河の流量を増加させる手法は、当時の水利に関する知識が極めて高かったことやそれを支える技術者の存在を示している。このほか運河や河岸の土地が運河掘削に際して、王朝政府のにより買い取られ、土地の所有者に対する補償、建築廃材の再利用の許可など、他の水利事業にはない新たな側面も見られた。

表 2 14 世紀におけるナイル川の水利事業

年代	水利の内容	施工者←職名をいれる	特記事項	出典
708/1308 年	カルニューブからダミエッタ間の ジスル	スルターン・バイバルス II 世		Sulūk, 2:48-49
710/1310 年	アレクサンドリア運河の改修	スルターン・ナースイル・ムハンマ ド		Sulūk, 2:111
711/1311/年	ナースイル湖の掘削	"		Khitat, 2:165
713/1313 年	ギザにジスルの建設	"		Sulūk, 2:130
714/1314 年	エジプト全土のジスルとトウル アの調査・整備	"	翌年の検地のための事前 調査。	Sulūk, 2:137-138
723/1323 年	ブーラークからミニヤ・アル=シ ーラジエまでのジスル	"	貧民を労働者として雇 用。	Sulūk, 2:251
724/1324 年	ファム・アル=ハウル運河の開鑿	"		Khitat, 2:144-145
724/1324/ 年	ナイル川が氾濫しファイエーム 地方が水没。アミールのバクタム ルがジスルの改修に向かう。	バクタムル・アル=ハージブ		Suluk, 2:258
725/1325 年	ナースイル運河の開鑿	スルターン・ナースイル・ムハンマ ド	用地と用地にある建造物 を国庫が買い取り。後に 運河沿いの土地を売却。	Kanz, 9:319; Ibn al-Wardī, 2: 392; Sulūk, 2:261-262; Khatat, 2:306; Nujūm, 9:81-82; Husn, 2:347; Badā'i, 1:445-446
"	ラトリー湖の掘削	バクタムル・アル=ハージブ		Badā'i, 1:445-446
"	アルド・アル=タッバラのジス ル (ナースイル運河とラトリー 湖の間) の建設	"		Khitat, 2:165; Badā'i, 1:445-446

728/1328 年	ヘルワンからシタデルまでの運河掘削の計画(中止)	"	計画の段階で中止。	<i>Sulūk</i> , 2:302
737/1337 年	ジスル・シャイバイニー?の建設	"		<i>Khifat</i> , 2:170
738/1338 年	ナイル川の間におけるジスルの建設、ハウル運河の掘削	"	ナイル川の増水に対処する為、ハウル運河と同時に建設	<i>Sulūk</i> , 2:449-451; <i>Khifat</i> , 2:167; <i>Nujūm</i> , 9:124-128; 'Iqd, 24:33
740/1339 年	カンタラ・アル=ファフルの運河	ナースイル・ムハンマド		<i>Khifat</i> , 2:148
740/1339 年	ジスル・シャイバイニー?のカンタラを修復	"	工費 3 千 D.N.。各地から 4 千人の労働者。	<i>Sulūk</i> , 2:472
741/1340 年	ナイルからハバシュ湖に至る運河の開鑿	"		<i>Husn</i> , 2:328
749/1348 年	ギザとローダ島間のジスル(ジスル・マンジャク)の建設	ナースイル・ハサン・ブン・ムハンマド	ミスルとカーヒラから臨時税を徴収。	<i>Sulūk</i> , 2:761-766; <i>Khifat</i> , 2:167-168; <i>Badā'i'</i> , 1-1:522-523
750/1349 年	各地のワーリーがジスルの管理を放棄。を売却。			<i>Sulūk</i> , 2:811
784/1382 年	ジスル・マンジャクの建設。ローダ島とアルワー(ウスタール)島の間	ジャハリクス(ジャルカス)・アル=ハリール	ジャハリクス・ハリールと彼のマムルークが工事に従事。	<i>Khifat</i> , 2:169
822/1419 年	ギザにおけるカンタラ・シイッビーン	ムアイヤド・シャイフ	5 千 DH の臨時税(Ifeddan あたり 20DH、農夫から 6DH、ムクターから 14DH.)。さらに不足分を追徴。	<i>Sulūk</i> , 4:481-482

Sato, *State and Rural Society*, p. 228. を基に増補、修正。

第3章

ジスル・マンジャクの建設と水利慣行の変化

はじめに

バフリー・マムルーク朝時代（1250–1382年）のエジプトでは、首都のカイロ周辺部をはじめとして、スルターンが主宰する大規模水利事業が多く行われた。しかし、このスルターンが執り行った大規模水利事業の多くはバフリー・マムルーク朝時代中期のスルターン・ナーシル・ムハンマド第3期治世（在位1310–41年）までに集中し、政治、社会的に混乱の時代とされる14世紀後半になるとほとんど事例がみられなくなる。佐藤次高は、12から14世紀の大規模な灌漑水利について、その建設過程においてはアミールによる分担や労働力（農民）の提供など共通性が見られるが、その分担の基準については不明であるとしている¹。前章ではスルターン、ナーシル・ムハンマド第3期治世に行われた、カイロ西部での運河掘削事業について分析をおこない、バフリー・マムルーク朝時代の前半期に行われた大規模な水利事業との共通の手法が取られつつも、工事区間の土地に対する国庫（Bayt al-Māl）からの支出による買い取りが行われ、立ち退きに関して補償が行われた点などの特異点について明らかにした²。

本章ではスルターン・ナーシル・ムハンマド没後の1348年にナイル川西岸のギザ al-Jiza とナイル川の中州の島、ローダ島 Jazīrat al-Rawḍa との間に建設された土手＝ジスル（jīsr）、別名ジスル・マンジャク（Jīsr Manjak）として知られた水利施設の建設過程を取り上げる。これまで、このジスルの建設事業について分析した専論は管見の限りないが、ドルズ M. Dols がこの建設事業の背景となった飲料水価格の高騰と人夫の賃金について触れている³。この建設事業について最も詳細な記事を残している15世紀のエジプトの歴史家マクリーズィー（845/1442年没）は、このジスルの建設について、「[建設事業のために] 課税された金額としてはこれ以上はないほど多かった」と評している⁴。また、建設過程、手法についてもそれまでの大規模水利事業とは極めて異なる手段が取られた。本章ではこのジスル・マンジャクを対象として、その背景、過程を分析することで14世紀の大規模水利における行政慣行の変化について考察する。

本章では1346–1348年の3年にわたるギザとローダ島間のジスル建設の概要について、マクリ

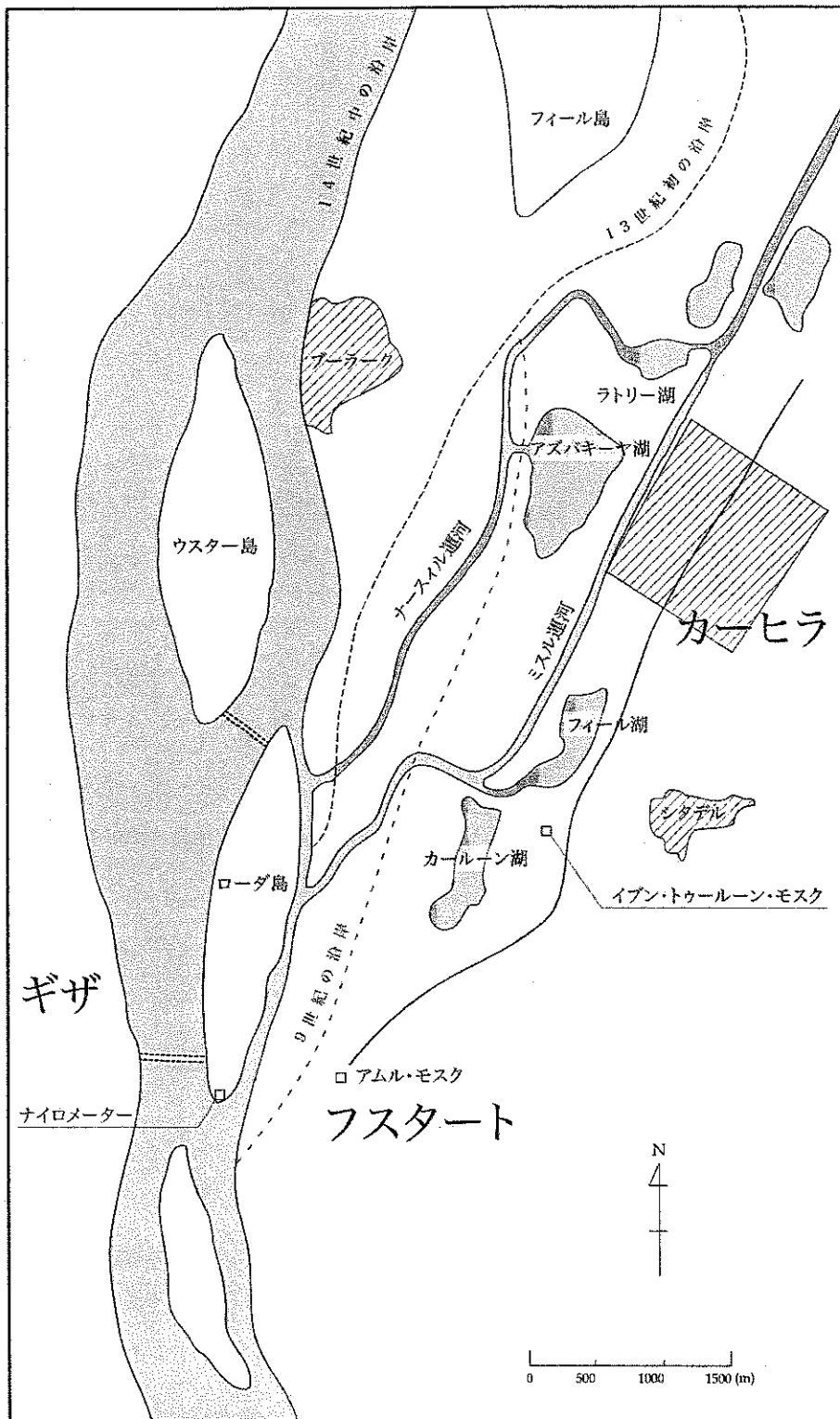
¹ Sato, *State and Rural Society*, pp. 227–230.

² 拙稿「バフリー・マムルーク朝期における水利行政に関する一試論」19–32頁。

³ Dols, *The Black Death in the Middle East*, p. 269.

⁴ *Khīṭat*, 2:169.

ーズイーの『エジプト地誌』と『諸王朝知識の旅』の記述を中心に、時系列にそって他の史料と比較しながらその概要を説明する。



図版8 14世紀後半のカイロとジスル・マンジャク的位置予想図

(著者作成)

第1節 ジスル・マンジャク建設までの経緯

§1 747/1346年の対応

このジスル建設の計画は、実際にジスルの建設が完成する2年前の747/1346年に発生したナイル川の異常な減水に端を発する。この年のナイル川の減水は飲料水価格の高騰を招き、これに対して人々が不平を政府に訴えたことが、この場所でのジスルの建設が試みられた発端であった。マクリーズィーは『諸王朝知識の旅』においてその様子を「ナイル川の水がミクヤースからフスタートの間が水溜になるほど減少した。そして、ブーラク Būlaq からミンシャー・アル=マフラーニー Minsh'at al-Mahrānī, 象島 Jazīrat al-Fīl からブーラク、ブーラクからアル=ミニヤ al-Minya まだが「水が干上がり」一つの道（のように）なった」⁵と描写している。

この結果、水の運搬費 (rāwiyat al-mā') は3/4DH (dirham) から2DHに高騰したとしている。ただし、この水の運搬費については、値段のみが記述され水の容積の単位は記載されておらず不明である⁶。また、その後の経緯について、『エジプト地誌』では以下のように伝えている。

そのため、人々はこのことをアミール・アルグーン・アル=アラーイー Arghūn al-'Alāyī⁷とスルターン・シャーバーンI世 al-Kāmil Sha'bān b. al-Nāṣir Muḥammad b. al-Manṣūr al-Qalāwūn (在位736-37/1345-46年) に対して不平を述べた。それで、スルターンは技術者 (muhandis) とライス・アル=バフル (Ra'īs al-Baḥr, 後述) に諮問した。そして、スルターンはアミールたちとスルターンの居城である山の城塞 (カルア・アル=ジャバル Qal'at al-Jabal) からナイル川の河畔に向かった。しかし、ナイルの増水が始まっていたため、土砂とフスタートにあった砂糖の精製所の陶片 (shiaqāf)、ローダ島にあるそれら廃棄物をジスルの建設のために運ぶことだけが行われた。大量の土砂が船でローダ島へと運ばれた。そして、ギザからミクヤースに向かって、その間の3分の2の長さのジスルが作られた。そして、ナイルの水は簡単にフスタートの

⁵ *Sulūk*, 2:704; *Nayl al-Amal*, 1:128.

⁶ ドルズは水を入れる革袋 goatskin of water あたりの値段としているが、値段から考えればロバなどの駄獣一頭が運ぶ水の量か、容積単位の1アルダップ (=90ℓ) と考えるのが妥当であろう (Dols, *The Black Death in the Middle East*, p. 269)。

⁷ スルターン・ナーシル・ムハンマドのマムルーク出身。主人のナーシルの生前中にはスルターンの護衛隊長 (ra's al-nawba al-jamdāriyya) に任命されたが、ナーシルの没後クースに追放される。その後、スルターン・シャーバーンがスルターン位に就くと、アルグーンはシャーバーンとその同母弟のイスマーイルの母親の再婚相手であったために復権し、アミールの最有力者 (mudabbir mamlaka) となる。しかし、ハーッジーI世がスルターンに即位した後には再びアレクサンドリアに移動させられ、748/1347年にはカイロに連行され殺害された (*Wāfi*, 8:355; *al-Durar al-Kāmina*, 1:376; *Sulūk*, 2:756; *Daṭil*, 1:105)。

方へと戻った。しかし、土砂の少なさのためジスルと（ローダ島の）ナイル測量所（al-Miqyās）への接合は貧弱であった。だが、ナイルの増水はこのジスルにより強められたのである⁸。

バフル al-Bahr とは元々は海を意味するアラビア語であるが、エジプトにおいては豊饒なるナイル川に対し敬意をこめてアル=バフルと呼ぶ慣習がある。一方、引用した史料中に現われるライース・アル=バフル（「ナイル川の長」）とは、どのような人を指すか不明であるが、『諸王朝知識の旅』には749/1348年にマンジャクがジスルを建設する際に同行した人々の中に「船の頭 ru'asā' al-marākib」 という語が確認できる⁹。これらが同一のものを指すとすれば、ナイル川の船舶航行にかかわった人々の指導的もしくは親方的人物を指すものと考えられる。

また、この建設時に集められた砂糖精製所の陶片とは何か。佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』では、エジプトの地方で収穫・圧搾されたサトウキビから作られた粗糖をさらに精製して、上質な砂糖を生産する精糖所（maṭbah al-sukkar）が数多くフスタートに存在していたことについて触れている。イブン・ドゥクマク Ibn Duqmāq（806/1406年没）の『勝利の書 al-Intiṣār』に基づく情報では、スルターンの精糖所として7箇所、アミールの精糖所として21箇所、商人の精糖所として13箇所、その他の精糖所として21箇所、の計65箇所の精糖所を計上している¹⁰。また、このスルターンの精糖所のうち1箇所は王朝のため（lii-dawla）とされており、残りはスルターンの私的財産（li-khāṣṣ al-sultānī）とされていた¹¹。

この精糖所からジスルの建設のために集められた陶片 shaqāf とは、この精糖所で使用されたウブルージュ（ublūj）を含む砂糖精製の素焼きの土器であったと考えられる。ウブルージュとは下部に小さな穴が開けられた、上部が広く下部が狭い円錐形の素焼きの壺で、粗糖から糖蜜を分離し砂糖を精製するために使用された分蜜用の器具である¹²。砂糖の精製所が多く設置されていたフスタートにおいては、砂糖の精製過程で使用される素焼きの土器が大量に使用されていた。精製過程で糖蜜により目が詰まったり、破損したりしたために廃棄されたこれら素焼きの土器の陶片が大量に存在し、このジスル建設に利用されたと考えられる。

さて、この年のジスルの建設は、夏季のナイルの増水期と重なってしまい、中途の処で建設は取りやめになった。この結果、ナイル川の流れはカイロ側にわずかにばかり復したが、その後増水した

⁸ *Khīṭāṭ*, 2:167.

⁹ *Sulūk*, 2:761.

¹⁰ 佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』86-88頁。

¹¹ *Intiṣār*, 41. また、このスルターンの私的財産とされる精糖所のうち3軒は、スルターン・ハサンの時代に3人の子供にそれぞれ分けられたとイブン・ドゥクマクは伝えている。

¹² 佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』53-60頁。

ナイル川はこのジスルを越えて流れ出し、多くのものがそれに伴い流されてしまったという¹³。

§2 748/1347年の対応

748年の初め/1347年4月には、再び水不足が発生し、人々はスルターンへ上訴を行った。このときのスルターン・シャーバーンは有力アミールによって殺害され、その兄弟であるハーッジーI世 al-Muzaffar Hājī b. al-Nāṣir Muḥammad b. al-Manṣūr al-Qalāwūn (在位 748–49/1346–47年) が747年ジューマダーII月の始め/1346年9月にスルターン位に就いていた。スルターン・ハーッジーI世は、前年と同じく技術者を派遣し測量を行わせ、その結果、技術者たちはギザからカイロまでジスルを建設することを提言し、それにかかる費用として銀貨120,000DHが必要であるという見積書 (taqdīr) を提出した。¹⁴

大規模水利事業において、見積書を作成することはこれ以前の建設事業では確認できないが、728/1327年にスルターン・ナーシル・ムハンマドがナイル川の水を冬季の減水期を含めて季節を問わず山の城塞の麓まで流す為、カイロ南部のヘルワーンから水路を引くことを計画した。スルターン自ら測量を指揮し、42,000 カサバ・ハーキミーヤ¹⁵ (約155km) という測量結果がでた。ナーシル・ムハンマドはアミールたちにこの建設事業について諮問したとき、軍務庁長官 (nāẓir al-jaysh) のファフル・アル=ディーン Fakhr al-Dīn のみが反対し、スルターンとの間に次のようなやり取りが行われた。

ファフル・アル=ディーンが「誰にその運河 (khalīj) を掘らせるのでしょうか」とスルターンに尋ねると、スルターンは「軍人 (‘askar) たちによって」と答えた。そして、ファフル・アル=ディーンは、「おお神よ、もし軍人らを [そのために] 集めたら、軍人たちはスルターンを恨むでしょう。何年も建設に係るでしょうし、彼らにはこの掘削事業を行う力はありません。それに加え国庫三つ分の費用がかかるでしょう。また、成功するか否かわかりません。スルターンが何も聞き入れなかったら、人々は疲弊し、人々の呪いを受けるでしょう。」スルターンは、この言葉を受け入れてこの事業をあきらめた¹⁶。

¹³ *Nayl al-Amal*, 1:128.

¹⁴ *Khiṭaṭ*, 2:168; *Sulūk*, 2:724; *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:155.

¹⁵ qaṣaba al-Ḥākimiyya : ファーティマ朝カリフ、アル=ハーキム・ビ・アムリ・アッラー al-Ḥākīm bi-Amr Allāh al-Fāṭimī (在位 386–411/996–1021年) の時代に制定された長さの単位。qaṣaba al-Ḥāshimīya と同様の長さ。1 qaṣaba al-Ḥākimiyya=6 azra’ al-Ḥāshimīya=369.6cm (*Ṣubḥ*, 3:512–513)。

¹⁶ *Sulūk*, 2:302.

ナーズィル・アル=ジャイシュは軍務庁 (Dīwān al-Jaysh) の長官で、イクター、軍人の給与、糧秣を管理する責任者であった。そのため、このナーズィル・ムハンマドの計画に必要な経費を鑑みて、反対の意を唱えたのである。この時にはタクディール (見積書) の語は現れないが、測量に基づく計画であり当然それにかかる費用が算出され、上記のやり取りがなされたと考えられる。

ジスル・マンジャクの建設では、この 12 万 DH の見積書に基づき、カイロとフスタートにおいてナイル川沿いに私有財産 (milk : 建物、果樹園など) をもつ人々にジスル建設の税 (jibāya) を課した。そして、その税の徴収のためにカイロのムフタシブ¹⁷であるカーディー・ディヤー・アル=ディーン・ユースフ・ブン・アビー・バクル Dīyā' al-Dīn Yūsuf b. Abī Bakr を任じた。そして、建物が測量され、各 1 ジラー (dhirā')¹⁸ から 15DH を徴収した。この測量にも同じくムフタシブのディヤー・アッディーンが任じられ、測量の結果として 7,600 ジラーという数値が得られた。しかし、実際には総計の 114,000DH (=7,600×15) の約 3 分の 2 の 70,000DH が税として集められることになった¹⁹。

この建設計画で徴税を担当したディヤー・アル=ディーンはカイロのムフタシブに 3 回就任し、それ以前にはフスタートのムフタシブも歴任した。彼の不正に対して厳格なムフタシブとしての手腕はスルターン・ナーズィル・ムハンマドにも高く評価されたが、不正の追及を恐れるアミールたちからは不興を買った人物として知られている²⁰。そのため、その後すぐに彼はムフタシブ、および同時期に就任していたマンスール病院の管財人 (nāzir al-Bīmāristān al-Manṣūr) ²¹からも解任させられた。このため、上記で計測の結果により課税された臨時税が実際に徴収されたか否かについては不明である。

¹⁷ muhtasib : 市場監督官。カイロと下エジプトを管轄する「カイロのムフタシブ muhtasib al-Qāhira」とフスタートと上エジプトを管轄する「フスタートのムフタシブ muhtasib Miṣr」がエジプトのムフタシブとして任命された。ムフタシブの職務は「善行を勧め、悪行を禁ずる amr bil-ma'rūf wa nahy 'an al-munkar」 (=ヒスバ ḥisba) というムスリム宗教的義務を遂行することを目的とし、市場における食品、商品の取引におけるごまかしや詐欺行為が行われていないかを調べることであった。マムルーク朝の官制では宗教職の第 5 位の座を占めていた。Cf. 菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ」131-176 頁; 湯川武「ヒスバとムフタシブ」61-83 頁。

¹⁸ 法定の 1 ジラーは 6 qabda=24 aṣba' で約 49cm である。ただし、ミクヤースで使用されるジラーは 1 ジラーが 24 イスパアと 28 イスパアの 2 種のジラーが使用された。本論第 1 章第 3 節 (28 頁) を参照。

¹⁹ *Khūṭa*, 2:168; *Sulūk* 2:724; *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:155.

²⁰ Yūsuf b. Abī Bakr b. Muḥammad, Dīyā' al-Dīn al-Shamsī, Ibn Khaṭīb Bayt al-Ābār (d. 761/1360). Cf. 菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ」134-135、153 頁。

²¹ スルターン・カラーウン・アル=マンスーリー (在位 687-89/1279-90 年) が、683-4/1284-5 年に建設した、病院、マドラサ、廟などを含む総合施設。ナーズィルはマンスール病院の収入・支出を管理するワクフ管財人。菊池によれば、14 世紀にこの職に就く人物は、ディヤー・アル=ディーンと同じくムフタシブを兼任して事例が多く見られる (菊池忠純「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について」47-67 頁)。

またこれに加え、同年のラビーII月にはアラブ遊牧民（‘urbān）同士の争いが発生し、穀物の強奪が発生するほか、ナイル川の水の減少のため穀物輸送が困難となりその価格が高騰した。小麦の価格は1アルダップ（irdabb）（容積単位：エジプトでは約90ℓ）あたり30DHから55DHに上がり、大麦の価格は1アルダップあたり25DHに、豆の価格は1アルダップあたり20DHに達した²²。このように、ギザ、ローダ島間のジスルの建設は、都市民の生活の安定のために急務となったことがうかがえる。しかし、スルターン・ハーッジー I世はシリアのアミールたちとの抗争のため、エジプトについて全く考慮を怠るようになってしまったことから²³、ジスルの建設はこの年は継続されなかった。

第2節 ジスル・マンジャクの建設

748/1347年のジスル建設の計画が不調に終わり、スルターン・ハーッジー I世もアミールとの争いから748年ラマダーン月/1347年5月に殺害された。彼の兄弟のハサン al-Nāṣir Ḥasan b. al-Nāṣir Muḥammad b. al-Manṣūr al-Qalāwūn（在位748–52/1347–51, 755–63/1354–61年）がスルターン位を継いだ翌749年に入ると（1348年4月）、ギザとローダ島間のジスルの建設が本格的に始動した。

副スルターン（nā’ib al-saltāna）のアミール・バイブガー・アールス Baybughā Arūs²⁴とウスターダール（ustādār）²⁵のアミール・マンジャク、ハージブ（hājib）のアミール・キーラーイ Qilāyをはじめとするアミールたちは、技術者たちを伴い対岸のギザに渡り、ギザとミクヤースの間の測量を行った。そはして、748/1347年と同様にタクディール（見積書）を作成した。その合計は約150,000DHで、その内訳は1,000本の木材、500本の帆柱（ṣār）、1,000個の2ジラー（約130cm）四方の石材、5,000袋のシャンファ（shanfa）²⁶、その他の多数の材料が計上された²⁷。また、『諸王朝知識の旅』によれば、この時にミスル運河の取水口からブーラクまでのナイル川沿岸の私有財産（milk）の所有者に対して70,000DHが課せられたが、これは一昨年の748/1347年の計測に基づくものであった、と伝えていることから前年は調査と見積もりが出されたところまでで、徴税には至らなかった

²² *Sulūk*, 2:728.

²³ *Sulūk*, 2:731–32.

²⁴ Baybughā Arūs/Rūs al-Nāṣirī：ナーシル・ムハンマドのマムルーク出身のアミール。スルターン・ハーッジー I 世、スルターン・ハサン時代に副スルターンを務める。754/1353年にアレppoで殺害される（*al-Durar al-Kāmina*, 2:44–45 (no.1387)）。

²⁵ ustādār/ ustādh dār：マムルーク朝時代には軍人に俸給や糧秣を支給する責任者としてアミールから選抜された（*Subh*, 4:457）。

²⁶ *Sulūk*, 2:763 では shanf. 同頁註2の注釈に依れば、麦わら等を入れる袋状の網を指すとしている。shanif と同意。Cf. R. Dozy, *Supplément aux dictionnaires arabes*; J. G. Hava, *al-Faraid: Arabic-English Dictionary*.

²⁷ *Khīṭat*, 2:168; *Sulūk*, 2:763.

のであろう²⁸。

副スルターンのアミール・バイブガー、ダワーダールのアミール・マンジャク、アミール・シャイフー Shaykhū²⁹、そのほかのアミールは、再度ギザへと向かいジスルのことについて専門の技術者らと再検討した。そして、マンジャクがこのジスルの建設の責任者となった。

このマンジャクはこの建設事業の直前まで宰相 (wazīr) の職に就いていた人物であったが、公金の取り扱いについて他のアミールたちと争いとなり、宰相職を解任されていた。その際に彼には「ウスターダール職とジスルのこと (umūr al-jusūr) が残された」とされており、灌漑設備の管理・維持と税務に関する責務が負わされていた³⁰。このことが、直接にこの建設事業の責任者に決定した要因かは不明であるが、それ以前の宰相としての実績とともに、徴税を伴う灌漑水利の責任者としてこの任に就いたと考えるのが妥当であろう。

マンジャクはジスル建設に必要な臨時税をすべてのアミールと兵士、書記、カイロとフスタートの私有財の持ち主に対し、誰一人として欠けることなく課した (表3参照)。そして、この課税に際して、軍務庁 (Dīwān al-Jaysh) の書記たち (kuttāb al-jaysh) に命じて兵士たちの名簿を提出させ、全てのイクター保有者に課税した。そして、徴税のためあらゆる方面に官吏 (shādd)、財務官 (ṣayrafi)、書記 (kātib) などが派遣され、執拗に行われたようである。それは、「徴税人は年寄りや弱いものや未亡人からまでも税を取り、人々から強引にお金を徴収した」ほどであった³¹。

必要な資金を集めると、マンジャクは都市部の下層の人々 (ḥarāfish/sg. ḥarfūsh)³²や仕事を求める労働者 (fa'ala/sg. fā'il) たちに人夫を募集していることと、その賃金として日に 1.5DH とパン (raghīf) 3枚を用意していると布告した³³。マムルーク朝時代の非熟練者の日雇労働の賃金は、事例がほとんどなく不明な点が多いが、723/1323年に行われたブーラークからミニヤ・アル・シーラジュまでのジスルの建設の際には、カイロの貧者が建設に駆り出され賃金として1日あたり1から3DHが支払

²⁸ *Sulūk*, 2:763.

²⁹ Shaykhū/Shaykhūn al-Nāṣirī (d. 758/1357) : スルターン・ナースィル・ムハンマドのマムルーク出身のアミール。スルターン・ハサンのもとでアターベクを務め、マムルーク朝時代においてはじめて大アミール al-Amīr al-Kabīr の称号を得た。宰相のマンジャク、副スルターンのアルース兄弟と権力をめぐって争い、勝利した。しかし、後に自らが擁立したスルターン・ハサンとも対立し殺害された (*al-Durar al-Kāmina*, 2:293 (no. 1950); *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:324; *Dalīl*, 1:346 (no.1189); *Shadharāt al-Dhahab*, 6:183)。

³⁰ *al-Sulūk*, 2:760; *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:192.

³¹ *Khiṭat*, 2:168.

³² マムルーク朝時代のカイロやダマスカスなどの都市部に存在した無頼の集団やそれに与する人々。反権力的な暴動に加わる一方、支配者層と密接にかかわる集団もいた。それぞれの集団には指導的立場の人間がおり、一定の統制がとれた集団と考えられている。また、史料によっては被支配者層である都市住民一般 ‘amm を指す場合もある。ここでは後者の意味を指す。 Cf. Brinner “The Significance of the Harāfish and their “Sultan,”” pp. 190–215; *EI*^{2nd} s.v. [Ḥarfūsh] (written by W. M. Brinner).

³³ *Khiṭat*, 2:168.

われたという³⁴。

ジスルの建設は748年ムハッラム月の初め/1348年4月から始まり、748年ラビーⅡ月の終わり/1348年8月の4ヶ月で完了した。ジスル・マンジャクの長さは290カサバ³⁵ (約870m)、底辺は8カサバ (約24m)、上辺は4カサバ (12m) に達し、そして、ローダ島からウスター島のジスルは長さ230カサバ (約900m) に達した。この事業で石材、土砂、その他の資材を搬送するために使用された船は12,000隻に上ったと伝えられている³⁶。

この建設の最中に、あまりの課税の多さにマンジャクに対して他のアミールから蓄財をしているのではないかとの誹謗が起き、兄弟でもある副スルターンのアルースはそれを禁じようとした。しかし、マンジャクはこれに対して、「ジスルの建設において日当なしに誰も使役しておらず、またこの事業は人々にとても利益があり、そして悪意を目的とした人々の言葉を取り上げてはならない」³⁷、と抗弁した。これについてマクリーズィーは『エジプト地誌』において、最後に次のように付け加えている。「この事業のために課税された金子は全く秘蔵されなかった。というのもマンジャクは必要なものを除いて、カイロにもフスタートにも邸宅、隊商宿 (funduq)、ハンマーム、粉ひきの臼、そして集会モスク、マドラサ、マスジドといったワクフ、またリズカ (rizqa) も教会も残さなかった」と³⁸。また、イブン・イヤースはこの建設事業に用いられた最終的な費用は当初の測量に基づく150,000DHを超え400,000DHに達したと伝えており、加えてイブン・ドゥクマークからの引用としてマンジャクは費用の中から私腹を肥やすことはしなかったが、スルターンやアミールたちからはその徴収金の多さから疑いをもたれたことを記している³⁹。

以上が3年にわたるジスル建設の概要である。次にこのジスルの建設事業を整理して、それまでの大規模水利との異同について考察してみたい。

第3節 ジスル・マンジャク建設の特徴

これまで概観したジスル・マンジャクの建設の過程からにおけるいくつかの特徴について考察す

³⁴ *Sulūk*, 2:251.

³⁵ qaṣaba: 法定換算比によれば1カサバは1.5バー=6ジラーで約3m。またエジプトのローカルなジラー (=66.5cm) での換算では390cmとなる (『新イスラム事典』567頁)。ここでは法定換算による。

³⁶ *Khīṭat*, 2:169.

³⁷ *Khīṭat*, 2:169.

³⁸ *Khīṭat*, 2:169.

³⁹ *Badā'i' al-Zuhūr*, 1-1:522. ただし、このイブン・ドゥクマークからの引用とされる部分については、現在刊行されている *Intiṣār* や *Jawhar* といったイブン・ドゥクマークの記した諸史料からは確認できていない。

る。特にジスル・マンジャクの建設において注目すべきは、その建設費用を臨時課税による供出金で賄った点である。冒頭で述べたように、14世紀前半までの大規模水利事業の慣行では、各アミール、イクター受給者が分担して労働力の提供、建設の指揮にあたった。各地の農民にとってそれは力役 (sukhra) の一部となっていたが、アミールらに課せられた負担の基準は不明なままである⁴⁰。そこで、ジスル・マンジャクの臨時税を基にアミールへの課税がどれほどの負担であったかを試算してみたい (課税基準額は表3参照)。

ここではアミールへの負担額をイクターのみで換算するとどれほどの額になるかについて、1313-15年に行われたナースィル検地のイブラ表を基に計算を行うこととする⁴¹。イブラ表によれば百騎長のアミールは80,000から100,000ディーナール・ジャイシー (dīnār jayshī: 以下DNJ) のイクターが与えられており、イクターへの課税は100DNJにつき1DHであるので800から1,000DHとなり、百騎長にはさらに4,000から5,000DHが課せられているので、最大値と最小値をとると、4,800から6,000DHが課税されたことになる。さらにこれに自らの書記に課せられた200DHを加算すれば5,000から6,200DHとなる。彼らの実収入は780,000から900,000DHと算定されていることから彼らのイクター収入のうち約0.7%の比率であると算出される。

同様に、一つ下の位階の四十騎長のアミールには30,000から40,000DNJのイクターが与えられていたことから、300から400DHがイクターに対して課税された。彼らのイブラがおおよそ百人長の35から40%程度であることを鑑みて、四十騎長という職位に課せられた金額をおおよそ1,400から2,000DHと推定すると、計1,700から2,400DHとなり、これに書記の100DHを加えると1,800から2,500DHが課税されたと推定できる。四十騎長のイクターからの実収入は216,000から365,000DHと算定されているので、それに対する比率はおおよそ0.7から0.8%である。

また、十騎長のアミールも同様に算定すると、これもおおよそ0.7%となる⁴²。以上のことから、あくまで推定値ではあるが、アミールらに課せられた臨時税は彼らのイクター収入のおおよそ0.7%を基準値として計算されたと考えられる。ただし、高位のアミールは課税されたカイロ西部に果樹園や邸宅などの私有財産を所有し、また都市部にワクフ施設を建造しているので、実際にはそれらに対する臨時税も加味すると、課税額はさらに高額に上ったことは言うまでもない。

このように臨時税を課すことになった直接の要因を史料の記述には見出すことはできなかったが、

⁴⁰ Sato, *State and Rural Society*, p. 230.

⁴¹ イブラ表及び実収入の算定については、Sato, *State and Rural Society*, p. 154 を使用した。

⁴² 同様の計算方式でスルターン・マムルーク親衛隊長 muqaddam al-mamālik al-sultānī、ハルカ騎士団長 muqaddam al-haiqa についても算定するとイクターのみの場合、おおよそ実収入の0.1%となるが、アミール同様に追加税があるとして算定すると0.6%となり、アミールの場合と近似値を得ることができる。

当時の政治・社会的背景について考えてみる。まず、政治的要因として、スルターン・ナーシル没後の権力闘争による政治的混乱があげられる。すでに見てきたように、747-49/1346-48年の3年間の間にスルターンは3代交代した。いずれもアミールとの間の政治権力をめぐる政争が原因である。また、ジスル・マンジャク建設は、ナイル川の減水・退行という自然現象に対し、社会経済的な安定を図るという公益的な目的があつたにもかかわらず、当時の政治背景が色濃く表層化している点も見逃せない。第1年目の747/1346年の建設では、すでにナイル川が増水期に入ってしまったため、工事自体が完全には行えず、出来る限りの対処を行ったことがわかり、結果としてその年の水不足を一時的に解消するに至った。しかし、第2年目の748/1347年における建設の中断は、不正に対して厳格なことで知られるディヤー・アル=ディーンに対するアミールたちの警戒によるムフタシブの解任、そしてスルターン・ハーッジーのエジプト内政への無関心から発生した。その結果、さらなるナイル川の減水によって穀物輸送が困難になったため、穀物価格の高騰を招くこととなった。ナイル川の減水は天災であつたが、穀物価格の高騰には多分に人災の側面があるといえる。749/1349年においてもマンジャクに対する誹謗がおきたが、これについてもマンジャクや敵対するアミール・シャイフーをはじめとする有力アミール間の権力闘争が表面化した結果といえよう。

このうち、スルターンが主宰する大規模水利事業の事例が14世紀中に見られないため、臨時税を課して大規模水利施設の建設を行うことが新しい政治慣行として定着したかは不明であるが、参考として次節では14世紀末から15世紀初頭の大規模な水利事業の例として二つの事例を紹介する。

表3 ジスル・マンジャク建設の臨時税	
対 象	金 額
イクター所有者	100DNJ 当たり 1DH
百騎長	4,000~5,000 DH
その他アミール	適宜 (イクター規模に比例)
百騎長の書記 (<i>kātib</i>)	200 DH
四十騎長のカーティブ	100 DH
店舗 (商人、小売商) (<i>hānūt</i>)	1 DH
職人	2 DH
カーヒラ、フスタートの住居 (<i>dār</i>)	2 DH
果樹園	1 フェッダーン当たり 10DH

一部の果樹園	1 フェッターン当たり 20DH
粉ひきの石臼	5DH
カラーファとカーヒラ郊外の墓地とマドラサの貯水槽 (<i>silwāj</i>)	5~10 DH
墓地	2~3 DH
露天商と道路に面して生計を営む人々	適宜
ブーラクからミニヤ・アル=シーラジュ(ナーシル運河とハージブ池の間)、ナーシル運河、ハバシュ池周辺の新しい住居と果樹園	1 ジラー当たり 15DH
カーヒラ、フスタート、カラーファのワクフ施設 (モスク、ハーンカー、ザーウィヤ)	適宜 (ワクフの規模に比例?)
各地方のキリスト教会、修道院	100~200 DH (地方行政官 <i>wālī</i> が徴収)
上下エジプトのナツメヤシの木*	1 DH
カーヒラ、ミスの煉瓦焼成窯、製陶所	1~10 DH**
廟 (<i>qā'</i>)	3 DH
倉庫、厩舎	1 DH
隊商宿 <i>Funduq</i> and <i>Khān</i>	適宜
大邸宅の保証人 <i>dāmīna al-moghānī</i>	計 50,000DH

* *Sulūk* では上エジプトのみ

** *Sulūk* では 2DH

参照 : *Khūṭat*, 2:168; *Sulūk*, 2:764

第4節 14世紀末から15世紀初頭の大規模水利事業

§1 ジスル・ハリリーリーの建設

ナーシル・ムハンマド時代のミニヤ・アル=シーラジュや本章のジスル・マンジャクの建設の主要な目的はすでに述べたように、ナイル川の水の流れをカイロの対岸の西岸からカイロ側へと強

化し、カイロ側の岸や運河にナイル本流からの流水を通年保つことであった。ジスル・マンジャク
の建設後に一時的には解決されたこの問題は40年後に再び表面化する⁴³。バルクークのアターベク
としての統治期にあたる784/1382年にも、ナイル川の水がカイロの河岸において停滞し悪臭を放つ
ようになり、この問題を解決するためアミール・ジャルカス・ハリリー Jarkas (Jarkash/Jahāriks)
Khalīf⁴⁴によりローダ島とウスター島の上にジスルが建設された。784年のラビーI月初旬にはじめ
られたこのジスル建設はラビーII月末の2か月間かけて行われ、工期はジスル・マンジャクの建設
とほぼ同様である。

サント木 (khashab al-sant) でできた8ジラー (約5.3m) の長さの杭 (khāzīq/pl. khawāzīq) を打ち
込み、土砂をその間に埋める工法で行われ、総延長300カサバ (約1.2km)、底辺幅10カサバ (約
40m) のジスルを建設した。このジスル建設事業では、アミール・ハリリーと配下のマムルーク
が建設に従事し、資金もアミール自身が支出した⁴⁵。ジスルの建設後、このジスルとカイロの河岸
の間を運河のごとく掘り下げたとしており、これにより流量を増やしたと考えられる。

§2 カンタラ・シービーンの改修

15世紀前半の822/1419年にスルターン・ムアイヤド・シャイフ Mu'ayyad Shaykh (在位1412-21
年) によってギザの運河を渡るための橋、カンタラ・シービーン Qanṭarat Shibīn の改修が行われた。
この際にはギザの農地に対し5,000DNの臨時税が計上され、1フェッターンの農地に対して20DH
が課税された。これに対して農民が6DH、ムクターが14DHを支払うことが決められたという事例
が見られる⁴⁶。以上のようにジスル・マンジャクの建設以降の大規模水利事業では、第2章で取り
上げたナースィル運河をはじめとする14世紀前半の大規模水利事業が行っていた、アミールの動員
や力役などの政治的慣行というべき手続きが全く見られなくなる。

小結

本章で見てきたジスル・マンジャク建設の過程から、14世紀後半に入るとナイル治水行政上の変
革が始まったことが窺えた。その背景としては741/1340年以降のスルターン・ナースィル・ムハン

⁴³ *Khīṭat*, 2:169.

⁴⁴ アミール・ハリリーの名前 (イスマ) については、*Badā'ī' al-Zuhūr*, 1-2:304 では Jarkas、*Sulūk*, 3:472
では Jarkash、*Khīṭat*, 2:169 では Jahāriks といくつかのバリエーションがある。

⁴⁵ *Khīṭat*, 2:169.

⁴⁶ *Sulūk*, 4:481.

マド没後のアミールたちによる権力闘争、749/1348年にエジプトで本格化した黒死病の流行による農村人口の減少と、貧困者の都市部への流入がもたらした農村の弱体化などを要因として、それまでの行政慣行を維持する形では実施できなくなったことが考えられるが、この建設事業にはその影響が行政慣行の変化として、その表層的な事例として現れたと見ることができる。

また、政治的腐敗は中央の有力アミールにとどまらず、地方行政官の横領、水利機構の維持の放棄に見られるように、政治の末端にまで及び始めていた⁴⁷。農村経営の弱体化はイクター収入を基本とするマムルーク体制に変化をもたらすには十分な要因である⁴⁸。特に大規模水利の様な労働力の集約が必要な事業にはその影響がいち早く現われたといえよう。そして、臨時税の徴収により政府主宰の水利事業が執行されたことは、それまでのマムルーク軍人に対するイクターの受給に対する軍事奉仕としての労働力の供出という、14世紀前半までに見られたマムルーク朝における基本的なスルターンとアミール、マムルーク軍人らの間に見られた相関関係に変化が現れた兆候のひとつとして着目に値すると言える。

これらの行政慣行に変化が生じた背景となるペストをはじめとする疫病の流行、農村支配の弱体化は地方行政制度そのものにも影響し、頻発するアラブ遊牧民の反乱の鎮圧、懐柔のためそれまでのワーリーに加えより軍事に特化したカーシフらの地方官が上下エジプト地域に常駐するようになる⁴⁹。政治面においても社会面においても混乱期、衰退期といわれる14世紀後半の治水行政の変化の背景については、次章以降の地方行政制度の変遷と併せて検討する必要があると考える。

⁴⁷ *Subūk*, 2:806, 811.

⁴⁸ マムルーク朝における黒死病後の社会経済の変動については、ドルズ（本章註3）のほかに Udovitch, Lopez and Miskimin, "England to Egypt, 1350–1500," pp. 93–128; Borsch, *The Black Death in Egypt and England* を参照（Cf. 拙評「S.J. ボーシュ著『エジプトとイギリスにおける「黒死病」：比較研究』」029–035頁）。

⁴⁹ 14世紀後半のアラブ遊牧民反乱とカーシフの設置については、本論第4章第4節および松田俊道「マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱」061–088頁を参照。

第4章

14世紀エジプトにおける地方行政官制度の変遷

はじめに

マムルーク朝時代のエジプトは、マムルーク支配層が徴税権を分与された土地 (iqṭāʿ: 以下、イクター地) から徴収される地租 (kharāj)、人頭税 (jawālī)、貢物 (diyāfa)、雑税 (maks) からなる税を主たる収入源とするイクター制度が敷かれていたことはよく知られている。バフリー・マムルーク朝スルターン・ナーシル・ムハンマドによって実施されたナーシル検地により確立されたイクター制度のもとで、イクター地を授与されたアミール、マムルーク軍人らはムクター (muqṭaʿ/pl. muqṭaʿūn) と呼ばれたが、彼らに与えられたイクター地は、各軍人の位階ごとに定められた徴税額 ('ibra) に見合う、一つないし複数の村の集合体であった。軍人の位階、役職の異動などによってイクター地は中央政庁により頻繁に変更され、特定のイクター地を終身保有するような結びつきを持ってないようにされた¹。また、スルターン自身もイクターを所有し、ナーシル・ムハンマド期にはスルターン直轄地を管理する私財庁 (Dīwān al-Khāṣṣ) が設立され、地租収入と中央政庁、宮廷にかかる経費を管理するようになった²。また、アミールら軍人は首都カイロに居住し、私的な財務官庁であるアミールの官庁 (dīwān amīr) を設け、イクター地には徴税人 (mubāshir)³ を派遣し税の徴収を行い、イクターを管理した。

また、バフリー・マムルーク朝時代には、エジプトの諸地方にアミールの中から選任された地方行政の長であるワーリー (wālī/pl. wulāt) が派遣され、スルターンのイクター、政府管理の灌漑土手の整備、アミールたちのイクター地における徴税の監視などを行ったと考えられている。しかし、イクター制をエジプトに導入した前代のアイユーブ朝時代には、ガルビーヤ地方、シャルキーヤ地方、クース地方を除いて、ワーリーの存在が確認できないという⁴。その理由としてアイユーブ朝時代にはムクターが直接イクター地に赴き支配地を経営していたため、ファーティマ朝時代まで中央政庁からエジプト各地に派遣されていたような、地方の治安、徴税などを担う役職が存在しなかつ

¹ Sato, *State and Rural Society*, pp. 152–158.

² *Subh*, 3:452.

³ アミールの私的なディーワーンから派遣された徴税に関わるムバーシルには、代官 (wakīl)、監督者 (shādd/mushidd)、執事 (dawādār)、倉庫管理人 (shādd al-shūna)、書記 (katīb)、公証人 (shāhid) などが含まれ、イクター地を管理した (Sato, *State and Rural Society*, pp. 88–89; Rabie, *Financial System*, pp. 66–67)。

⁴ Sato, *State and Rural Society*, pp. 56, 82. Cf. *Sulūk*, 1:74–75.

たとされる⁵。マムルーク朝時代に入り、このワーリーがエジプトの諸地方に派遣された理由は、これまでのところ明らかとされていない。また、14世紀にはワーリーの他に上・下エジプト地域に派遣されたカーシフ (*kāshif*/pl. *kushshāf*)、そして14世紀末に設置されたナーイブ (*nā'ib*/pl. *nuwwāb*) といった地方行政官が知られている。これらの地方行政官は任地、管轄範囲、また任命される軍人の位階などにより、それぞれの職務および権限はおのずと異なっていたと考えられるが、これまでのところこれらの地方行政官職についてその変遷と背景についての分析は十分にはなされておらず、管見の限り専論は見当たらない⁶。

本章では、地方行政区ごとに派遣された地方行政官であるワーリーとカーシフの2つの職に注目し地方に派遣される総督官職の役割とその制度的な変遷を概観し、第1章でみた政府による地方の水利施設の管理維持の慣行の変化の背景について考察する。まず、マムルーク朝時代の地方行政区画について概観し、次いで地方行政官の任地、人事内容から職務内容を検討する。

第1節 エジプトの地方行政区画

§1 マムルーク朝時代以前の行政区画の変遷

7世紀、アラブ・ムスリム軍によるエジプト征服(19-20/640-41年)の後、徴税制度をはじめとしてビザンツ時代の行政機構の多くを受け継いだ。それに伴い地方行政の区画もそのまま受け継いだ。ビザンツ時代にエジプトは *Aegyptus*、*Augustamnica*、*Arcadia*、*Thebaid*、*Libya* の5つの州からなり、このうちナイル川流域にあるのは、*Libya* を除く4つの州であった⁷。

これらの州(エパルクシア *ἐπαρχία*)には知事(ドゥークス *δούξ*)が任命され、州の下位に当たる県(パガルキア *παγαρχία*)には長官(パガルコス *παγαρχος*)が任命されていた。エジプト全体は、正統カリフ・ウマルI世 'Umar b. al-Khattāb (在位13-23/634-44年)が亡くなった時に南北に分割されたが、後に上エジプト地域の総督を務めたアブド・アッラーフ・ブン・サアド 'Abd Allāh b. Sa'd がエジプト全体を支配下に置いた。そして、彼の時代にフスタートに政庁が置かれ、各県の長官パガルコスはその支配下に組み込まれていった⁸。

⁵ Rabie, *al-Nuzm al-Mālīya fī Miṣr Zamān al-Ayyūbiyyīn*, pp. 89-90.

⁶ カーシフおよび地方行政官の変遷について部分的取り扱っている研究は多くあるが、エジプトの地方史をあつかっているものとして、Garcin, "The Regime of the Circassian Mamlūks", 水利史の観点からは; Qāsim 'Abduh Qāsim, *al-Nīl wal-Mujtami' al-Miṣrī fī 'Aṣr Salāṭīn al-Mamālik* を参考として挙げる。

⁷ 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』49、103頁。

⁸ 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』103-104頁。

アッバース朝カリフ、ムタワッキル al-Mutawakkil ‘alā Allāh Abū al-Faḍl Ja‘far b. Muḥammad (在位 232-47/847-61 年) 時代には、エジプト総督ヤズィード・ブン・アブド・アッラーフ Yazīd b. ‘Abd Allāh al-Turkī (在位 242-253/856-867 年) の改革により、242/856 年に知事 (mukhtār) を徴税単位である行政村 (nāhiya) ごとに選出し、徴税を行った⁹。

エジプトの地方の区分けは、アラブ・イスラーム軍による征服の後、伝統的に軍営地がおかれたフスタートを中心に南北に二分割し、北部をバフリー地方 al-Wajh al-Baḥrī、南部をキブリー地方 al-Wajh al-Qibli と呼んだ¹⁰。また、北部エジプトについてはナイルの下流である低地を意味する Ard al-Asfal (下エジプト)、南部エジプトについては上流の高地を意味する al-Ṣa‘īd/ Ṣa‘īd Miṣr (上エジプト) という表現もある。史料によってその表現は不統一なので、本論ではカイロを起点に一般にデルタ地帯ともよばれる北部エジプトを「下エジプト地域」、南部エジプトを「上エジプト地域」と統一して記載する。

さて、ビザンツ時代の行政単位であるギリシア語のパガルコスがアラビア語化したものがクーラ (kūra /pl. kuwar) とされる。クーラは「町」、「むら」、「地域」など一定の空間を持つ領域を指す語であるが¹¹、ここでは地方行政の区画としての「地方」の意味で用いる。このクーラについてマクリーズィーは次のように説明する。

エジプトの地は、古代には 153 の地方 (kūra) があり、それぞれの地方には町 (madīna) と 165 のむら (qarya) があった。キリスト教化 (bukht naṣṣara) の後に、85 の地方になった。その後イスラーム期に入るまでに減少し、40 の行政区 (‘āmira) となったが、むらの数は減っていない¹²。

これによれば、その数値の信憑性はともかくとしても、アラブ・ムスリム軍によるエジプト征服までに 153 から 40 に行政区画数が減りつつもむらの数は減っていないことから、一つの行政区画が管轄/支配するむらの数が増加していることがわかる。これは一つの行政区画(パガルコス=クーラ)の範囲が広がっていったと言い換えることもできる。また、引用の最後では「地方」の呼称がクーラではなくアーミラ (‘āmira) となっているが、これは通常は「農地」を意味するため、徴税とかわるクーラと同様の意味があると考えられる。

⁹ 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』293 頁。

¹⁰ *Khīṭat*, 1:72.

¹¹ *Muḥīṭ al-Muḥīṭ*, s.v. [k-w-r].

¹² *Khīṭat*, 1:72.

このクーラに基づいた行政区画はアラブ・ムスリム軍による征服以降、ウマイヤ朝、アッバース朝を通じて継続して適用され、徴税の単位とされたが、後にイクリーム (iqṭim/pl. aqāṭim) またはアマル (‘amal/pl. a‘māl) に変更され、クーラはアマルの下位の行政単位を示す用語となった¹³。この行政単位の名称変更がいつなされたかについては意見が分かれており、一つは、マフズミー『エジプトの地租に関する知識の道標』とマクリーズィー『エジプト地誌』の記述に基づいた森本公誠に拠るもので、下エジプト地域の行政区画の再編を行ったとされるファーティマ朝カリフ・ムスタンスィル al-Mustansir bi-Allāh (在位 427-87/1036-94 年) の治世末期に変更が加えられたとする。また一方は、ムハンマド・ラムズィー Muḥammad Ramzī『エジプト地名辞典 *al-Qāmūs al-Jughrāfiyā lil-Bilād al-Miṣriya*』に拠るもので、ナーズィル検地 (rawk al-Nāṣirī : エジプトにおける検地は 715/1315 年に実施) を境に、24 区画に分けられたクーラから 21 区画のアマルへと再編されたとする¹⁴。

ムスタンスィルの治世末期とは、軍人から初めて宰相になったバドル・アル=ジャマーリー Badr al-Jamālī (487/1085 年没) の執政時期を指すものとも思われる。ファーティマ朝末期の書記イブン・アル=サイラフィー Ibn al-Ṣayrafī (542/1147 年没) が伝えるところに拠れば、バドル・アル=ジャマーリーは宰相職に就くと王朝内の改革に着手し、「現在まで続くこととなる諸官庁と諸役人を整え、人々と諸地域 (a‘māl) のことについて決定を下した」上で、下エジプト地域を支配していたアラブ遊牧民 (‘urbān/pl. ‘arab) のラワータ族から取り戻し、また上エジプト地域にも遠征をおこない、ファーティマ朝によるエジプトの地方支配を強化したとする¹⁵。この同時代史料ではすでに地方の区画を表す語としてアマルが使用されていることから、官制上のエジプトの行政単位の名称はファーティマ朝時代に変更された可能性を指摘できる。

次にマムルーク朝時代の行政区画を検証する。なお、断りのない限りイクリーム、アマルは「地方」の訳語に統一して記述する。

§2 マムルーク朝時代の行政区画

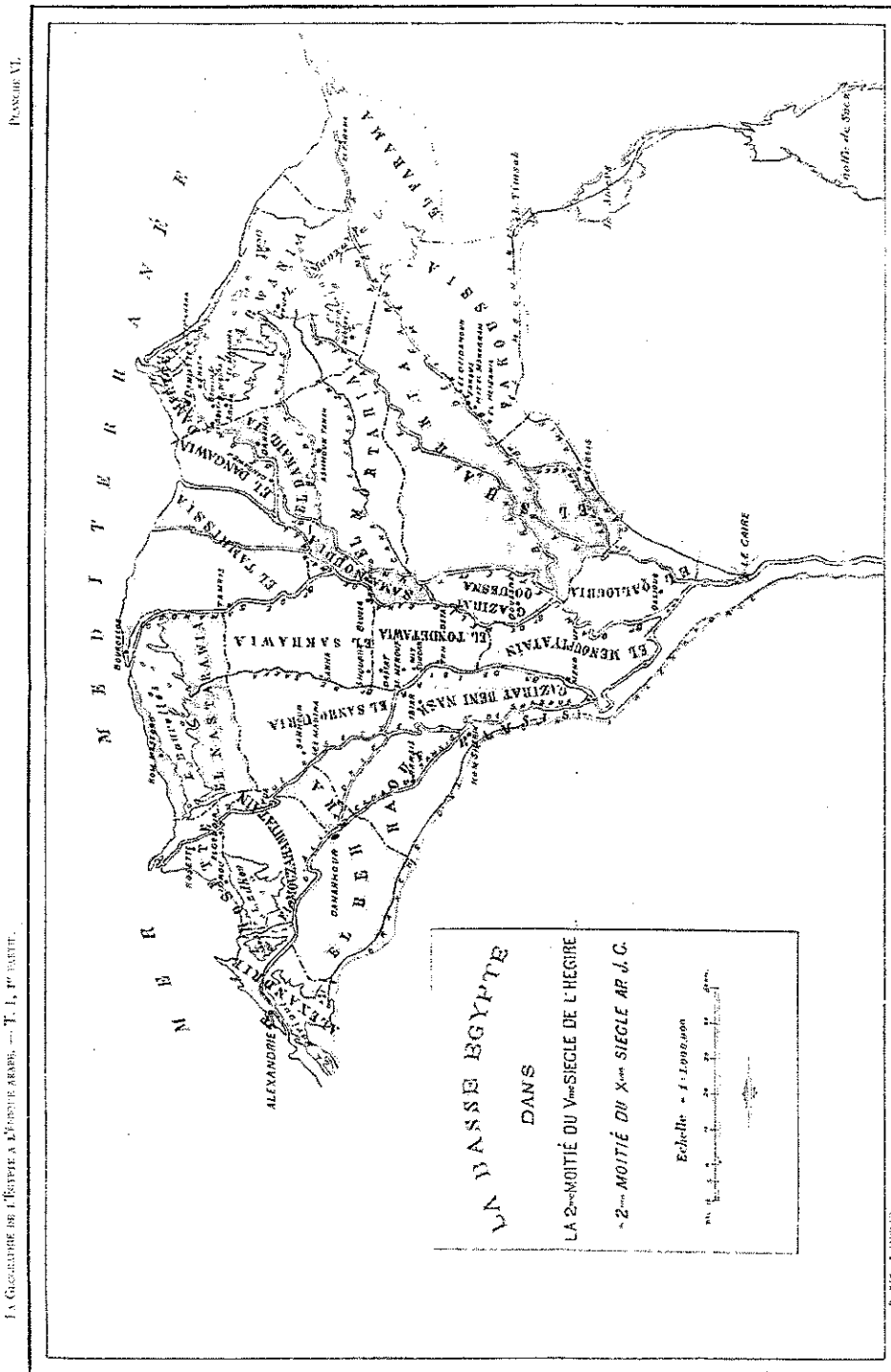
エジプトの行政区の数には時代によって異なることを示したが、上・下エジプトの両地域間で行政区画の数に大きく変化があるのは、ナイル川の最下流の河口域にあたる扇状のデルタ地帯である下エジプト地域である。同地域は先に述べたようにファーティマ朝カリフ・ムスタンスィルの時代を境に 22 の地方に分割され、徴税の管理単位とされた。以下はファーティマ朝時代の下エジプト地域

¹³ *Khitaṭ*, 1:72; *al-Nujūm al-Zāhira*, 9:38, note 2.

¹⁴ Muḥammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣriya*, vol. 1, pp. 28-31; ‘Alī Ibrāhīm Ḥasan, *Ta’rikh al-Mamālik al-Bahriya*, pp. 232-236.

¹⁵ *Ibn al-Ṣayrafī*, 95-96.

の行政区画を示した¹⁶。



図版9 ファーティマ朝時代の下エジプト地域の行政区画

(Toussoun, *La géographie de l'Égypte à l'époque arabe*, plate no. 6 より転載)

¹⁶ Toussoun, *La géographie de l'Égypte à l'époque arabe*, vol. 1, pp. 4–13, plate no. 6. Cf. 'Alī Ibrāhīm Ḥasan, *Ta'riḫ al-Mamālik al-Baḥrīya*, pp. 232–236.

表4 下エジプト地域：ムスタンシル期の改革以降		
	地方名	行政中心地
1	アレクサンドリア地方 (al-Iskandarīya)	アレクサンドリア (al-Iskandarīya)
2	ブハイラ地方 (al-Buḥayra)	ダマンフル (Damanhūr)
3	フツワとムザーハミーヤタイニ地方 (Fuwwa wal-Muzāhamīyatayn)	フツワ (Fuwwa)
4	ラシード地方 (ロゼッタ) (Rashid)	ラシード (Rashīd)
5	ナストラウイーヤ地方 (al-Nastrāwīya)	ナストラウイーヤ (Nastrāwīya)
6	タマリースィーヤ地方 (al-Ṭamarīsīya)	タマリース (Ṭamarīs)
7	ダンジャウイーヤ地方 (al-Danjawīya)	ダンジャウイーヤ (Danjawīya)
8	ダミエッタ地方 (Dimyāt)	ダミエッタ (Dimyāt)
9	イブワーニーヤ地方 (al-Ibwānīya)	イブワーン (Ibwān)
10	ファークースィーヤ地方 (al-Fāqūsīya)	ファークース (Fāqūs)
11	シャルキーヤ地方 (al-Sharqīya)	ビルバイス (Bilbays)
12	マルターヒーヤ地方 (al-Martāhīya)	ウシュムーン・タナーフ (Ushmūm Ṭanāḥ)
13	ダカハリイーヤ地方 (al-Daḡḡalīya)	ダカハリイーヤ (Daḡḡalīya)
14	サムヌーディーヤ地方 (al-Samnūdīya)	サムヌード (Samnūd)
15	サハーウイーヤ地方 (al-Sakhāwīya)	サハー (Sakhā)
16	サンフーリーヤ地方 (al-Sanhūrīya)	サンフル (Sanhūr)
17	ハウフ・ラムスィース地方 (Ḥawf Ramsīs)	ラムシース (Ramsīs)
18	ジャジーラ・バヌー・ナスル地方 (Jazīrat Banī Naṣr)	アブヤール (Abyār)
19	タンダターウイーヤ地方 (al-Ṭandatāwīya)	タンダター (Ṭandatā)
20	ジャジーラ・クワイスナー地方 (Jazīrat Quwaysnā)	クワイスナー (Quwaysnā)
21	ミヌーフィーターニ地方 (al-Manūfītāni)	ミヌーフ (Manūf)
22	カルユービーヤ地方 (al-Qalyūbīya)	カルユーブ (Qalyūb)

以上の地域区画がマムルーク朝時代に至るまでに、どのように再編されたのであろうか。『官庁の諸規則』の校訂版では各地域の行政村をまとめた章が掲載されているが、各地方が上・下エジプト地域のどちらに所属していたかは記されていない。校訂に際して参照された、エジプト国立図書館蔵の写本 (Ta'rikh 4775) には、この情報が唯一記載されている。これに基づくと、下エジプト地域は上記の表4とほぼ一致するが、カイロ周辺部 (al-Dawāhī) が付加されている¹⁷。

14世紀、バフリー・マムルーク朝の同時代史料である、ウマリー-Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Yahyā b. Faḍl Allāh al-'Umarī (749/1349年没)の『諸王朝見聞録 *Masālik al-Absār fi Mamālik al-Amṣār*』では、全エジプトを15の地方 ('amal) とし、上エジプト地域は9地方 (①コース地方、②イフミーム地方、③アスユート地方、④マンファルト地方、⑤ウシュムーナイン地方、⑥バフナサー地方、⑦ファイユーム地方、⑧イトフィーフ地方、⑨ギザ地方) とし、アスワンはコースに付属するとしている。また、下エジプト地域を7地方 (⑩ブハイラ地方、⑪ガルビーヤ地方、⑫マンファルト地方、⑬カルユーブ地方、⑭シャルキーヤ地方、⑮ダクハリヤ地方、⑯マンスーラ地方) とし、地中海沿岸の港町アレクサンドリア、ダミエッタは特別な町として地方に計上しないとしている¹⁸。

一方、15世紀の後期マムルーク朝時代に軍務庁長官を勤めたヤフヤー・イブン・ジーアーン Sharaf al-Dīn Yahyā Ibn al-Jī'ān (885/1480年没)が記した『エジプトの村々の名前についての輝ける至宝 *al-Tuhfa al-Sanīya bi-Asmā' al-Bilād al-Miṣriya*』 (以下、『輝ける至宝』) は、エジプト全土のアミールらに授与されたイクター地、マムルーク兵士への現金給与の基となったりザク地、そしてワクフ地のそれぞれの収入高を行政村 (nāhiya) ごとに計上したものを、地方行政単位ごとにまとめた15世紀の作品である。そこでは情報として、スルターン・シャーバーンII世時代 al-Ashraf Sha'bān b. Al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn (在位764-778/1363-77年)の時代、777年シャーバーン月末/1376年1月後半のエジプトの農地に関する土地台帳に記された各行政村 (nāhiya) ごとの農地面積、収入高 ('ibra) が併記されているため、14世紀のエジプトのイクター制の状況を検討する上できわめて重要な史料である¹⁹。この『輝ける至宝』を基に示したマムルーク朝時代の行政区画が表5、表6である²⁰。マムルーク朝時代の土地台帳は、地方単位でまとめられ、中央の軍務庁で管理・保管されていたと考えられている。そのため、以下の行政区画はマムルーク朝時代の税務上の行政単位と捉えてよいであろう。

¹⁷ *Qawānīn* (MS), fol. 6b. Cf. *Qawānīn*, 84, note 10.

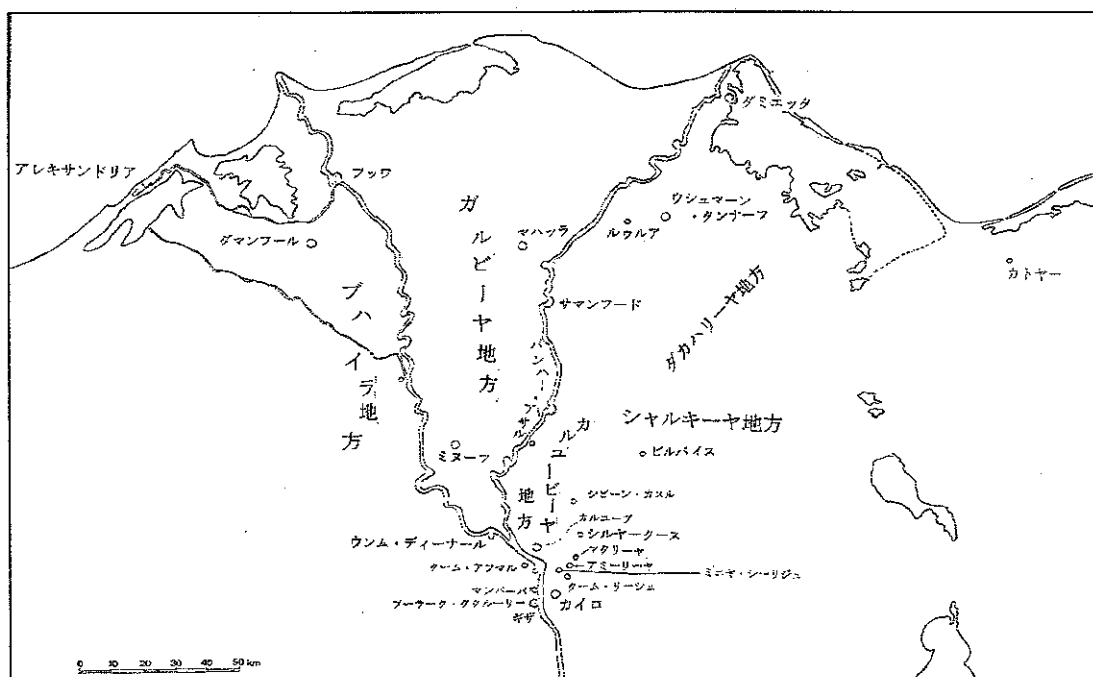
¹⁸ *Masālik al-Absār* (2): 97-100.

¹⁹ 『輝ける至宝』の内容、成立過程、写本間の異同については、熊倉和歌子「マムルーク朝後期エジプトの土地調査記録の継承と更新」95-120頁を参照。また、本論の史料和名も熊倉に拠った。

²⁰ *Tuhfa*, 3-4.

表5 下エジプト地域		
	地方名	行政中心地
1	カイロ周辺部 (al-Dawāhī)	カーヒラとミスル (カイロ) (al-Qāhira and Miṣr)
2	カルユーブ地方 (al-Qalyūbiya)	カルユーブ (Qalyūb)
3	シャルキーヤ地方 (al-Sharqīya)	ビルバイス (Bilbays)
4	ダカハリヤーとマルターヒーヤ地方 (al-Daqahliya wal-Martāhiya)	ダカハリヤー (Daqahliya)
5	ダミエッタ地方 (Dimyāt)	ダミエッタ (Dimyāt)
6	ガルビーヤ地方 (al-Gharbiya)	マハッラ・クブラー (al-Mahalla al-Kubrā)
7	ミヌーフイーヤ地方 (al-Minūfiya)	ミヌーフ (Minūf)
8	アブヤールとジャジーラ・バニー・ナスル地方 (Abyār wa Jazīrat Banī Naṣr)	アブヤール (Abyār)
9	ブハイラ地方 (al-Buḥayra)	ダマンフル (Damanhūr)
10	フワとムザーハミーヤタイン地方 (Fuwwa wal-Muzāhamīyatayn)	フワ (Fuwwa)
11	ナストラウイーヤ地方 (al-Nastrāwīya)	ナストラウイーヤ (Nastrāwīya)
12	アレクサンドリア地方 (al-Iskandariya)	アレクサンドリア (Iskandariya)
13	ギザ地方 (al-Jizīya)	ギザ (al-Jiza)

表6 上エジプト地域		
	地方名	行政中心地
1	イトフィーフ地方 (al-Itfihīya)	イトフィーフ (Itfih)
2	ファイユーム地方 (al-Fayyūmiya)	ファイユーム (al-Fayyūm)
3	バフナサー地方 (al-Bahnasāwiya)	バフナサー (al-Bahansā)
4	ウシュムーナイン地方 (al-Ushmūnayn)	ウシュムーナイン (al-Ushmūnayn)
5	アスユート地方 (al-Asyūṭiya)	アスユート (Asyūt)
6	イフミーム地方 (al-Ikḥmīmīya)	イフミーム (Ikḥmīm)
7	クース地方 (al-Qūṣīya)	クース (Qūṣ)



図版10 下エジプトの主要都市

(Levanoni, *A Turning Point in Mamluk History*, p. 144 より著者作成)



図版11 上エジプトの主要都市

(Levanoni, *A Turning Point in Mamluk History*, p. 146 より著者作成)

同じく 15 世紀の統治の手引書であるハリール・アル＝ザーヒリー Khalil al-Zāhiri (873/1468 年没) の『諸王朝行政便覧 *Zubdat Kashf al-Mamālik*』ではエジプトの地方について、全エジプトを 14 の地方 (iqḥim) に分け、そのうち下エジプト地域を 7 地方：カルユーブ地方、シャルキーヤ地方、ダカハリヤとマルターヒーヤ地方、ダミエッタ地方、ガルビーヤ地方、ミスーフイーヤ地方、ブハイラ地方とし、一方、上エジプト地域を 7 地方：ギザ地方、イトフイーフ地方、ファイユーム地方、バフナサー地方、ウシュムーナイン地方、アスユート地方、クース地方としている²¹。

『諸王朝行政便覧』では、『輝ける至宝』と同じくアスワンはクースの管轄下とし、マンファールートをアスユート地方の管轄下としている。また、クース地方はアスワンのほか、紅海の港町クセイル、アイザーブの紅海沿岸の 2 港を管轄下に置いていた。両史料とも各地方の行政中心地に関して違いはない。ただし、ザーヒリーは各地方において行政中心地となっている都市のほかにも重要な都市を挙げている。上エジプト地域ではウシュムーナインのほかにもニヤ・イブン・ハスィーブである。アスユート地方に組み込まれたマンファールートについてはその規模について、約 30 のむら (balad) がマンファールートに所属し、スルターン (政府) のために、年 115 万アルダップの穀物がハラージュとして納められるとしている²²。大きな違いがあるのは下エジプト地域の区分である。カイロ区域は除いても、両史料の間には総数で 5 地方の開きがある。『諸王朝行政便覧』に含まれていない地方は、基本的に隣接する地方に組み込まれているほか、ギザ地方を上エジプト地域に分類している。

以上のように、エジプトの地方の区画についての分類は、ギザ地方を除き上エジプト地域では共通する。他方で下エジプト地域の分類は史料間で開きがあるが、それは地理環境の変化が起きやすい扇状地であることも理由に挙げられよう。実際に、上記の地方の区分とワーリーら地方行政官が派遣された任地とどのような関連があるかについて、次節において検討する。

第 2 節 ワーリー職

§1 マムルーク朝時代のワーリー職

まず、地方行政官のワーリーを検証する前に、マムルーク朝の官制には同名の役職があるので、確認しておきたい。ワーリーとはマムルーク朝における特殊な職名ではなく、イスラーム初期から

²¹ *Zubdat*, 32–34.

²² *Zubda*, 33.

為政者の代理とし首都以外の町や地方で執政を行うものを指していた²³。マムルーク朝時代においては、ワーリーを名称とするいくつかの軍人職が知られており、エジプトにおいては、首都カイロにおいて治安を司るワーリーと、地方に派遣される地方行政官職としてのワーリーが存在した。

前者の首都カイロに置かれたワーリーについては、さらに2つのカテゴリーに分かれ、第一に市内の治安を司る警察としてのワーリー (*wulāt al-shurṭa*) がある。この警察のワーリーは首都を構成するカーヒラ *al-Qāhira*、ミスル *Miṣr* (つまりフスタート *al-Fustāt*)、カラーファ *al-Qarāfa* の3か所にそれぞれ1名のワーリーが任命された。このうちカーヒラのワーリーが最上位であり、ミスルのワーリーを監督下に置き、さらにミスルのワーリーはカラーファの警察のワーリーを監督下に置いていたという。『黎明の書』に拠れば、15世紀初頭にはカラーファのワーリーはミスルのワーリーが兼任するようになっていたため、警察のワーリーの数は2名となっていた。このうちカーヒラを司る警察のワーリーは四十騎長から任命され、ミスルとカラーファの警察のワーリーは十騎長から任命されたが、ミスルのワーリーがカラーファも管轄するようになると、カーヒラと同様に四十騎長から任命された²⁴。このワーリーについてウマリーは「警察権の所有者 (*aṣḥāb al-shurṭa*)」²⁵とする。

第二にスルターン居城である城塞 (*al-Qal'a*) の門を守衛する城塞のワーリー (*wāḥī al-Qal'a*) である。城塞のワーリーは四十騎長のアミールが就任する、通常城塞に登下城する際に使用される大門 (*Bāb al-Qal'a al-Kabīr*) の開閉を司るものと、十騎長のアミールが就任する大門以外の小門 (*Bāb al-Qilla*) の開閉を司るものに分別されていた。

これに加えてエジプトの諸地方に派遣された地方行政官のワーリーが存在した²⁶。上記の都市部のワーリーとの間には特に関連性がないように思えるが、地方に派遣されたワーリーの中には、カーヒラのワーリーにも着任する事例も見られるため²⁷、治安業務の共通性があると考えられる。次に地方に派遣されたワーリーについてその任地を詳しく見ていくことにする。

§2 マムルーク朝時代の地方行政官職とその任地、職務

(i) 『エジプト地誌』

各地方のカーシフとワーリーの内訳についてはアミールの位階によって任地が分けられていた。

²³ Hasan Bāshā, *al-Furūn al-Islāmīya wa Wazā'if 'alā al-Āthār al-'Arabīya*, vol. 3, pp. 1308–1316; 『岩波イスラーム事典』[ワーリー] (森本一夫)

²⁴ *Ṣubḥ*, 4:23.

²⁵ *Masālik al-Absār* (2), 119. Cf. *Mu'īd*, 43–45.

²⁶ マムルーク朝の領域のうち、シリア地方にも同様にワーリーが任命されていた。ダマスクスやイエリサレムといった重要都市には、ワーリーが置かれ、治安維持を受け持っていた。また、シリアの主要な地方にはナーイブが置かれ、統治を行っていた。

²⁷ *Shujā* 7, 90; *Sulūk*, 2:283; *al-Durar al-Kāmina*, 3:110.

14世紀のエジプトの各地方に派遣された地方行政官と任地の関係を考えるため、まずナーシル・ムハンマド時代の地方行政官の配置をマクリーズィーの『エジプト地誌』の記述から715/1315年のエジプトにおける検地後の状況を確認する。

四十騎長：①アレクサンドリア、②ブハイラ地方、③ガルビーヤ地方、④シャルキーヤ地方、⑤ミヌーフィーヤ地方、⑥カトヤー (Qatya)²⁸、⑦ファイユーム地方、⑧バフナサー地方、⑨ウシュムーン地方、⑩クース地方、⑪アスワンに各1名ずつのワーリーを派遣し。加えて、⑫ギザ地方、⑬上エジプト地域、⑭下エジプト地域にはカーシフを各1名ずつ派遣したとする。そして、彼らが所有するマムルーク軍人の数は560人〔各40人〕とされていた。(中略)

十騎長：⑮ウシュムーン・アル＝ランマーン (Ushmūn al-Rammān)²⁹、⑯カルユーブ地方、⑰ギザ地方、⑱タッルージャ (Tarūjā)³⁰、⑲アレクサンドリアの侍従 (hājib al-Iskandarīya)、⑳イトフィーフ地方、㉑マンファールト地方に各1名ずつのワーリーを派遣した。彼らのマムルークは70人〔各10人〕とされた。(中略)

カーシフに与えられたイクターからの収入は、各1名につき、20,000DNJで、1DNJは8DHで換算するので、計160,000DHである。そのうち、支出分 (al-kalafa)³¹は15,000DNJで、実収入 (khālīs) は145,000DHである。

また、四十騎長のワーリーは各1名につき15,000DNJで、1DNJは8DHで、計120,000DHである。そのうち、支出分が10,000DHで、実収入が110,000DHであった。十騎長のワーリーは各1名につき5,000DNJで、1DNJは7DHで、計35,000DHである。そのうち、支出分は3,000DHで、実収入は32,000DHとされた³²。

(引用中の丸番号は筆者が加筆)

²⁸ エジプトとシリアの間にある幹線路沿の町。アリーシュの近郊 (Muhammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣrīya*, vol. 1, p. 350)。

²⁹ ダミエッタ近郊のダカハリーヤ地方に所属する町。ナーシル検地の後、ダカハリーヤ地方とマルターヒーヤ地方が一つの行政区画とされた際に両地域を統括する町とされた。アラブ・ムスリム勢力のエジプト支配後の初期イスラーム時代には、ウシュムーン・タナーフ Ushmūn Tanāḥとして知られていた (Muhammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣrīya*, vol. 2-1, p. 229)。

³⁰ ブハイラ地方の町。穀倉地として知られる (Muhammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣrīya*, vol. 1, p. 190)。

³¹ 現物徴収された穀物の輸送費とそれに課せられる関税を加えたものを指す (Sato, *State and Rural Society*, p. 155)。

³² *Khiṭāṭ*, 2:218.

以上の『エジプト地誌』の内容は³³、先に述べたエジプトの行政区画に対して、14世紀初頭のエジプトでは、北部の下エジプト地域の12地方に対し9名、上エジプト地域の7地方に対し9名のワリーを任命していたことになる。行政区画外ではエジプトとシリアの中継地の⑤カトヤーにワリーが任命されていた。また、1地方に2人のワリーが派遣される⑬タッルージャ（②ブハイラ地方の町）、⑪アスワン（⑩クース地方の一部）、⑫⑬ギザ地方などがあり、この3地方の重要性が窺える。これらの地域は第1章第5節で述べたように、スルタンのイクターが指定されていたことから、特に重要な地域として、四十騎長に加え十騎長のワリーが業務の輔弼のため派遣されていたと考えられる。

引用中のイクター収入については、ナースィル検地後の軍人の位階に応じたイクターの配分基準と比べれば、地方行政官であるワリーとカーシフには、四十騎長と十騎長に次ぐイクターが与えられ、それに応じたマムルークを保持していたことが『エジプト地誌』からは窺える³⁴。しかし、地方行政官に与えられたイクターは、その他の四十騎長、十騎長と比べて年収高（'ibra）においても、また換算率においても同等のイクターを与えられず、それに準じる低いイクターが授与されていた。その理由についてポリアク A. N. Poliak は、地方行政官が与えられるイクターはそれぞれの任地に存在していたためと考えられるほか、何らかの役職上の利得があったとするが、明確な論拠は示されていない³⁵。

ワリーやカーシフに与えられたイクターが実際どこにあったのか詳細は不明である。しかし、イブン・アル=ジーアーンの『輝ける至宝』における777/1376年の記録から、ガルビーヤ地方とブハイラ地方のワリーのイクターについて取り上げると以下のようなになる。

- ・ ガルビーヤ地方のワリー：ミヌーフイーヤ地方トゥルア・ミン・ミヌーフ al-Tur'a min Kafir Minuf むら（イブラ：1,200DNJ）³⁶、ブハイラ地方クーム・アル=アフダル al-Kūm al-Akhḍar むら（イブラ：1,700DNJ）³⁷。
- ・ ブハイラ地方のワリー：ブハイラ地方アスマニーヤ Asmanīya むら（イブラ：2,000DNJ）³⁸、

³³ イクターからの各軍人の収入（'ibra）については、Sato, *State and Rural Society*, p. 154 を参照。

³⁴ Ayalon, "Studies on the Structure of the Mamluk Army III," p. 71; Sato, *State and Rural Society*, pp. 156-157; al-Bayyūmī, *Muṣāḍarat al-Amlāk*, 1:222-223.

³⁵ Poliak, "Some Notes on the Feudal System of the Mamlūks," p. 100. 佐藤もこの問題には触れているがその理由は不明としている（Sato, *State and Rural Society*, p. 153）。

³⁶ *Tuhfa*, 101.

³⁷ *Tuhfa*, 121.

³⁸ *Tuhfa*, 118.

ファイユーム地方ブルジューク *Buljūq* むら (イブラ: 1,800DNJ)³⁹

- ・ バフナサー地方のワーリー: ファイユーム地方バニー・マジュヌーン *Banī Majnūn* むら (イブラ: 500DNJ)⁴⁰、バフナサー地方のサーキヤ・マフフーザ *Sāqiya Maḥfūza* むら (イブラ: 4,000DNJ)

41

- ・ ファイユーム地方のワーリー: クース地方のデンドラ *Dandarā* むら (イブラ: 8,000DNJ)⁴²
- ・ クース地方のワーリー: クース地方ハラジャ *al-Ḥaraja* むら (イブラ: 10,000DNJ)⁴³

以上の『輝ける至宝』のデータに拠れば、ガルビーヤ地方、ファイユーム地方のワーリーは任地以外にイクター地を与えられているが、一方ブハイラ地方、バフナサー地方、クース地方のワーリーは任地にイクターを所有している。以上から、各地方のワーリーに授与されるイクターは、任地以外のものが含まれることがあったことがわかる。しかし、カーシフに与えられたイクターについての情報は史料中には見いだせず、彼らのイクター地については不明である⁴⁴。いずれにせよ、必ずしも任地とワーリーのイクターについては一致しないため、ポリアクの挙げる理由のうち、地方行政官が与えられるイクターはそれぞれの任地に存在していたためとするのはこれを見る限りは妥当ではない、第2の理由である何らかの役職上の利得があったと考えられる。その可能性を示す事例として、ワーリーの不正についての次のような記事がある。

(734/1334年) この年、スルターン (ナーシル・ムハンマド) はすべてのワーリーを罷免し、彼らの財産を没収した。同様に、収税長官 *shādd al-dawāwīn*⁴⁵ と財務長官 *muqaddam al-dawla* についても (罷免、財産没収を) 行った⁴⁶。

この時に追放されたのは、下エジプト地域の大ワーリー (*wālī al-wulāt bil-wajh al-Bahrī*) であったイZZ・アル=ディーン・アイダムル *Izz al-Dīn Aydamr* と、ウシュム=ナイン地方のワーリーであったトウーガン *Sayf al-Dīn Ṭughān al-Shamsī* と、シャルキーヤ地方のワーリーのクラシー *Sayf al-Dīn*

³⁹ *Tuhfa*, 153.

⁴⁰ *Tuhfa*, 153.

⁴¹ *Tuhfa*, 167.

⁴² *Tuhfa*, 137.

⁴³ *Tuhfa*, 191.

⁴⁴ アスワンとアイザーブ港については、上エジプト地域のナ=イブの管轄下とされている。777/1376年には同職はまだ設立されていないので、カーシフの管轄である可能性がある (*Tuhfa*, 195)。

⁴⁵ この職は税収について取り扱うもので、ワズィールを補弼する。通常、十騎長のアミールから任命される (*Ṣubḥ*, 4:22)。

⁴⁶ *Jawhar*, 2:164.

Qurashīであったといわれている。彼らは財産没収され、シリアへと配流された。収税長官や財務長官も連座して処分されていることから、徴税に関して大規模な不正が行われていたことが窺える⁴⁷。これに加え翌年にはその他諸官庁の長官も逮捕を財産没収のうえ更迭を行っている⁴⁸。また、15世紀前半にも次の地方行政官による収奪の事例がある。

(826年ズーアル=カーダ月/1423年10-11月) この月のある日に、各地のジスルが崩壊 (fasād) するとともに、ナイル河の水が急激に減少した。各地のワーリーたちの行状の悪化の為である。ワーリーたちはそれらの地方から多くの土地を収奪した (inqataʿ)。その為、上エジプト地域、下エジプト地域とギザ地方の各地のいくつかは、干上がった (sharraqa)。⁴⁹

(ii) 『黎明の書』

『黎明の書』では上・下エジプト地域のワーリーとして次の15名を挙げている。

下エジプト地域では四十騎長のアミールから①アレクサンドリア、②ガルビーヤ地方、③シャルキーヤ地方、④ミヌーフイーヤ地方、⑤ブハイラ地方に、そして十騎長のアミールから⑥カルユービーヤ地方、⑦ダカハリヤとマルターヒーヤ地方、⑧ダミエッタ、⑨カトヤー地方に。上エジプトでは四十騎長のアミールから⑩バフナサー地方、⑪ウシュムーナイン地方、⑫クースとイフミーム地方に。そして、十騎長のアミールから⑬ギザ地方、⑭イトゥフィーフ地方、⑮マンファールト地方に派遣されたとする⁵⁰。

これらのワーリーの内、下エジプト地域ではガルビーヤ地方、上エジプトではクース地方が最高位のワーリーとされていたとしている。これは先ほどの『エジプト地誌』において1つの地域に2名のワーリーを派遣した地域に重なる。

以上のワーリーの任地は先に挙げた上・下エジプトの地方数と比べると圧倒的に少なく、1人のワーリーが複数の地方を併せて担当したことが窺える。また、アレクサンドリアには、767/1365年にキプロス王国によるアレクサンドリア襲撃(キプロス十字軍)の後、防衛上の理由から百騎長のナーイブが置かれ別格の扱いとなった。⑦については、両地方を管轄するワーリーはカトヤーに置

⁴⁷ 制度上は、徴税権はムクターと中央政庁(スルターン領)がもっている。ワーリーは自らのイクターからの徴税において不正(過大な徴税)を行い、収税長官らはスルターン領からの徴税において過大な取り立てかあるいは着服をおこなったと見られる。財産没収は、こうした国家が授与した権限による着服、ないしは解任時に保持している税額の精算を行うものである。(See. Miura, "Administrative Networks in the Mamlūk Period," pp. 51-55.)

⁴⁸ *Jawhar*, 2:165.

⁴⁹ *Sulūk*, 4:646.

⁵⁰ *Ṣubḥ*, 4:26-28.

かれ、⑫はクース地方のワーリーが両地方の管轄を兼任した⁵¹。

(iii) 『要覧』

次にカルカシャンディーより後代のアサディーMuhammad b. Muhammad b. Khalil al-Asadi (854/1450年頃没)の『要覧 *al-Taysir wal-I'tibar wal-Tahrir wal-Ikhtiyar*』では、

全ての行政区 (iqlim/pl. uqalim) において、地方行政官として派遣されたカーシフとワーリーに対して国庫から [支出されるものは]、その場所、その位階、その補助者達に基づいて決められている。カーシフに対しては、彼らの中から各々一人に対して、年 20,000DNJ [が与えられる]。そして、四十騎長のワーリーに各々1人に対して、15,000DNJ [が与えられる]。1DNJの換算比は、8DHである。

そして、十騎長のワーリーに対しては、各々1人につき 5,000DNJ [が支払われる]。1ディーナールの対価は7DHである。

そして、各行政地区のカーシフとワーリーの数は14人である。それらは、かつては千人隊長 (muqaddam al-alf) からスルタンの選任を受けていた①アレクサンドリアのナーイブ (nā'ib al-Iskandariya)、②ブハイラ地方のナーイブ (nā'ib al-Buḥayra)、③ダミエッタ地方のナーイブ (nā'ib Dimyāt)、④クース地方のナーイブ (nā'ib Qūs)、⑤ガルビーヤ地方のカーシフ (kāshif al-Gharbiya)、⑥シャルキーヤ地方のカーシフ (kāshif al-Sharqiya)、⑦ミヌーフィーヤ地方のカーシフ (kāshif al-Minūfiya)、⑧ファイユーム地方のカーシフ (kāshif al-Fayyūm)、⑨バフナサー地方のカーシフ (kāshif al-Bahnasā)、⑩ウシュムーン地方のカーシフ (kāshif al-Ushmūn)、⑪下エジプト地域のカーシフ (kāshif al-Bahrī)、⑫上エジプト地域のカーシフ (kāshif al-Qibtī)、⑬カトヤー地方のワーリー (mutawalli Qatya)、⑭アスワン地方のワーリー (mutawalli Aswān)⁵²。(引用中の丸番号は著者加筆)

アサディーの情報は前半部分については『エジプト地誌』と同じであるが、後半部分に大きな違いがある。『要覧』の引用部分はナーシル・ムハンマド時代の軍制とイクター収入、官職について解説しているものであるが⁵³、先の『エジプト地誌』、『黎明の書』と大きく異なるのは、ほとんどの地域がカーシフの派遣先となり、ワーリーは⑬カトヤーと⑭アスワンのみとなっている。また、ア

⁵¹ *Subh*, 4:26–28.

⁵² *Taysir*, 70.

⁵³ *Taysir*, 68–72.

アレクサンドリア、ダミエッタといった地中海沿岸の重要港、下エジプト地域統治において重要なブハラ地方にはナーイブが派遣されている。これは『エジプト地誌』、『黎明の書』の記述を信頼するならばナーシル・ムハンマド時代の状況を記したのではない。上・下エジプト両地域にナーイブ職が設置されたのは、上エジプト地域が780/1379年、下エジプト地域が782/1380年とされ、バルクークが軍総司令官 (*atabak al-'asākir*) として、執政を行っていた (779–784/1378–1382年) 時期にたる。そして、ガルサン Jean-Claude Garcin によれば、アレクサンドリアを除いて上・下エジプトのナーイブは、スルターン・バルクーク (在位 784–791/1382–89年、792–801/1390–99年) 没後の15世紀には任命されなかったとしているので⁵⁴、概ねバルクーク統治期の間の14世紀末の様相を伝えたものだとすることが分かる。ただし、次節で述べるようにナーイブの設置はアレクサンドリア、上・下エジプト地域の3か所は確認できるが、ダミエッタは確認できていないので留意が必要である。

第3節 カーシフ職

§1 カーシフ職についての概要

マムルーク朝時代のエジプトでは、地方行政を担当するカーシフ (*kāshif/pl. kushshāf*) という地方行政官が知られており、同じく地方行政官であるワーリー (*wālī/pl. wulāt*) と同様に地方行政を担う官職であると考えられてきた。この官職名はエジプトがオスマン朝に征服された後にも残存し、マムルーク軍人がカーシフまたはカーシフ・アル=ジュスール (*kāshif al-jusūr*: ジスルの監督官) としてエジプトの諸地方の統治を担い、実質上のエジプトの支配者層を形成していた。彼らは時にオスマン朝政府に反抗する勢力の中核となり、1523年にはこのマムルークのカーシフが反乱を起こしたことが知られている⁵⁵。

アヤロン David Ayalon は、カーシフはワーリーよりも上位の地方行政官で、四十騎長もしくはそれに順ずる扱いであったとし、ナーシル検地の結果、カーシフは四十騎長に次ぐイクターが与えられ、それに応じたマムルークを保持していたとする⁵⁶。14世紀後半に関して史料に現れるカーシ

⁵⁴ Garcin, "The Regime of the Circassian Mamlūks," p. 294.

⁵⁵ Winter, "Re-emergence of the Mamlūks," pp. 93–95; 長谷部文彦「オスマン帝国治下のアラブ地域」329–330頁

⁵⁶ Ayalon, "Studies on the Structure of the Mamluk Army III," p. 71; Sato, *State and Rural Society*, pp. 156–157; al-Bayyūmī, *Muṣādara al-Amlāk*, 1:222–223.

フは上・下エジプトに一人ずつ置かれ、それぞれ下エジプト地域のカーシフ (kāshif al-wajh al-Bahri)、上エジプト地域のカーシフ (kāshif al-wajh al-Qibli) と呼ばれた。しかし、これらのカーシフがワーリーの上位の地方行政官としていつ設置されたかについては、史料には明確に記されていないため不明な点が多い。

カーシフ職が設置されたとされる 14 世紀前半には、たとえば同時代史料であるウマリーの『諸王朝見聞録』や、ヌワイリーの『学芸における究極の目的』などでは、カーシフ職については触れられていない。このうちウマリーはワーリーの説明を行っているが⁵⁷、これも前章で述べたように、都市部における警察権をもつ治安維持をつかさどるワーリーの説明に留まる。このように 14 世紀に記された行政便覧や書記の手引といった史料の作者にとって定着した職官として認識されていなかった可能性がある。一方、上エジプト地域のカーシフ (kāshif al-wajh al-Qibli)、下エジプト地域のカーシフ (kāshif al-wajh al-Bahri)、およびカーシフを指すと思われる大ワーリーを意味するワーリー・アル＝ウラー (walī al-wulāt) については、年代記等の史料で 14 世紀の事例を若干確認できる⁵⁸。

また、14 世紀中葉の同時代史料に現れる地方行政官職としてのカーシフの最初期のものとしては、アブー・バクル・アル＝ダワーダーリーの『真珠の宝庫』において、714/1314 年に捕縛されたアミール・サイフ・アル＝ディーン・バハーディル・アル＝ムイッズイー Sayf al-Dīn Bahādir al-Mu‘izzī がこの職に就いていたことが触れている (kāna kāshif bil-wajh al-Qibli)⁵⁹。また、ユースフィー Mūsā b. M. b. Yahyā al-Yūsufī (759/1358 年没) の『ナーシール王伝 *Nuzhat al-Nāzīr fī Sirat al-Malik al-Nāsir*』に拠れば、735/1335 年に侍従職 (hājib) のバドル・アル＝ディーン・アミール・マスウード Badr al-Dīn Amīr Mas‘ūd に下エジプト地域のカーシフ (kāshif al-wajh al-Bahri) の名誉のローブ (ヒルア) を与えた記録と⁶⁰、アミール・マルワーニー ‘Alā’ al-Dīn ‘Alī b. Ḥasan al-Marwānī に対する下エジプト地域のカーシフ職 (kāshif al-wajh al-Bahri) への任命記事が見られる⁶¹。

また、史料上のカーシフ職の呼称についても同時代と後代の史料の間で名称が異なる場合が多い。14 世紀の同時代史料では、カーシフ・アル＝ダワーリーブ (kāshif al-dawālīb) の語が見られる⁶²。そのほかに運河、灌漑用水路の浚渫を職務としたと考えられる 14 世紀末の 791/1389 年に「ナーシール・アル＝ディーン・ムハンマド・ブン・ライリー Nāsir al-Dīn Muḥammad b. Laylī がギザ地方のワーリーに任命された。それは、ギザの灌漑用水路の浚渫 (kashf al-turāb) を命じられたキルターイ・ア

⁵⁷ *Masālik al-Absār* (3), 1: 106, 119.

⁵⁸ *Shujā‘* 3, 27, 35, 96, 186, 193.

⁵⁹ *Kanz*, 9:274.

⁶⁰ *Nuzhat al-Nāzīr*, 254–255.

⁶¹ *Nuzhat al-Nāzīr*, 255; *Sulūk*, 2:385.

⁶² *Nuzhat al-Nāzīr*, 120, 126.

ル=タージ=Qirtāy al-Tājī の代わりであった」⁶³という事例が見られるほか、792/1390年には「バフナサー地方のカーシフ・アル=トゥラーブ (kāshif al-turāb) であるタンキズブガー・アル=サイフィ=Tankizbughā al-Sayfi をコースに移動させた」⁶⁴という事例が確認される。この時期には前節で述べたように、アターベクのバルクークにより上・下エジプト地域に百騎長のアミールから任命されるナーイブが上・下エジプト地域に派遣されるようになった時期にあたる。このため、カーシフの管轄範囲は、上・下エジプト地域から各地方単位へと管轄の範囲が変化したことが窺える。

次カーシフ職の職制についてマムルーク朝の行政組織体のなかでどのような位置づけにあったかを主に行政にかかわる書記の手引書、統治の書の諸史料から整理を行い、カーシフ職の変遷を検討する。

§2 カーシフ職の変遷

ここでは、カーシフ職の変遷について、カルカシャンディー『黎明の書』とハリール・ザーヒリー『諸王朝行政便覧』を基に比較をおこない、マムルーク朝の官制上のカーシフ職の変遷を確認する。

(i) 『黎明の書』

四十騎長のアミールたちは、諸職の第二の階層と各地方のカーシフ kushshāf (sg. kāshif)、高位のワーリーに就いた⁶⁵。

四十騎長から地方統治のための行政官であるカーシフとワーリーが任命されることを示している。また、さらに『黎明の書』では、カーシフの任地について、バルクークがナーイブを設置した後の変化について以下のように述べている。

クッシャーフ (カーシフ)

上エジプト地域と下エジプト地域にナーイブが設置される以前にこの2つの地域にはそれぞれカーシフが任命されていた。この2つの地域にナーイブが設置されたとき、以前のように下エジプト地域に四十騎長のアミールからカーシフが任命された。その地域(下エジプト)では、

⁶³ *Sulūk*, 3:681.

⁶⁴ *Sulūk*, 3:720.

⁶⁵ *Subh*, 4:15.

ブハイラ地方は下エジプト地域のナーイブの〔任地に〕に近いので、それ以外のところを管轄するカーシフが置かれ、もう一方（上エジプト地域）のカーシフは、彼の〔四十騎長という〕位階からファイユーム地方へ置かれ、〔この地方〕のワーリー職が撤廃された。そして、このカーシフの管轄にはバフナサー地方が加えられた。また、上エジプト地域のすべてにおいて、上述したところのナーイブへとその地域の権限が委譲された⁶⁶。

クッシャーフ（カーシフ）

すでに、上・下エジプト地域にナーイブを新設したところで述べたが、この2地域には大ワーリー（wālī wulā）と称されたカーシフが置かれていた。ナーイブが設置されると、以前のように四十騎長からカーシフが下エジプトに置かれたが、彼は実際には下エジプトのナーイブの権限下に置かれた。そして、彼の所在地はシャルキーヤ地方のミニヤ・ガムル（Miniyat Ghamr）⁶⁷とされた。もうひとり〔上エジプト地域〕のカーシフは、バフナサー地方とファイユーム地方に置かれた。そして、ファイユーム地方のワーリーは廃された。そして残りの上エジプトのことはナーイブに帰せられた。そして、ギザについてはカーシフがその地のジスルとそれに関わることに管轄するが、行政村（nāhiya）におけるそれ以外のことには係わらない⁶⁸。

『黎明の書』では、下エジプトのカーシフ職について、ナーイブ職の設置の後に所在地がダマンフルからの移動がみられるが、権限がナーイブに委譲され、カーシフはナーイブの管轄下のもとに限定された一部地域の行政を担当するようになったことが窺える。また、このナーイブ設置にともない、ワーリーが一部廃止されカーシフがワーリーの役割を担うことになったことが窺える。また、ギザに派遣されたカーシフの業務が灌漑設備の維持・管理に権限が限定されていることが確認できる。また、ナーイブの権限の強さとして、802/1400年に上エジプト地域のナーイブとしてムバーラク・シャーMubārak Shāh b. ‘Abd Allāh al-Zāhiri（816/1413年没）⁶⁹が任命されると、彼は「ワーリー達の中から選任し、好まざるものを解任した」⁷⁰、とされ地方行政官の任免権も与えられたことが窺える。

⁶⁶ *Subh*, 4:25.

⁶⁷ Minyat Ghamr：ダミエッタ支流沿いにあるシャルキーヤ地方のむらの一つ。現在は Mit Ghamr と呼ばれる（*Mu‘jam al-Buldān*, s. v. [Muniyat Ghamr]; Muḥammad Ramzi, *al-Qāmūs al-Jughrāfi lil-Bilād al-Miṣriya*, vol. 2-1, pp. 263）。

⁶⁸ *Subh*, 4:65.

⁶⁹ *Manhal*, 9:192; *Dalīl*, 2:571; *al-Nujūm al-Zāhira*, 14:125; *Daw’*, 6:237.

⁷⁰ *Sulūk*, 3:1003; *Badā’i’ al-Zuhūr*, 1-2:572.

ナード設置後、カーシフは上・下エジプト単位ではなく、各行政地単位で置かれ、その数を増やすとともに相対的に地位が下げられワーリーと同様の扱いとなる。バルクークは地方に対する中央政府の支配強化をねらってナードを任命したが、その背景としてはウルバーンの反乱の増加に対する治安維持の強化が挙げられる⁷¹。制度上の特徴として、ナードは上・下エジプトをそれぞれ監督下に置くが、各行政区画に置かれるワーリーの任免については権限を有していなかった。地方カーシフ、ワーリー官とも中央政庁により任免がなされていたが、特に14世紀前半においては侍従職 (hajib) による任命例が確認できた⁷²。一方で14世紀後半には侍従職による任命事例は確認できず、中央政府における地方統治に関する責任者の所在は明確ではない。

(ii) 『諸王朝行政便覧』

先に述べたように、多くの先行研究においてカーシフの職務と変遷についての典拠とされた史料である。『諸王朝行政便覧』第9章におけるカーシフの官制上の変遷と職務内容は次のように要約できる⁷³。

第一に、灌漑水利に関する職務として、カーシフの職務は灌漑土手をはじめとする灌漑設備の維持・管理を行うものとされる。その職務範囲は、政府管理の灌漑土手 (jisr al-sultāniya) に対しては責任を持つが、むら管理のジスル (jisr al-baladiya) に対しては責任を持たなかった。毎年一度、春季に百騎長級のアミールから任命され、エジプトの各地方に派遣される。そして、派遣されたカーシフは灌漑設備の建設、管理を行いとそれに伴い農民を労働力として徴発することが出来る。

第二に、官制上の変遷として、初期のカーシフは3名で上エジプト地域、下エジプト地域、ギザ地方を管轄した。上・下エジプト地域のカーシフには、それぞれ7人ずつワーリーが配下に置かれた。上・下エジプトの両地域には百騎長からカーシフは選任されるが、ギザ地方のカーシフは百騎長かもしくは四十騎長のアミールから選任される。それから時代が下ると任命者数が増加し、上エジプト地域に3人 (ファイユーム地方、上エジプト地域の北部 al-Ṣaʿid al-Adnā, 上エジプト地域の南部 al-Ṣaʿid al-Aʿlā)、下エジプト地域に3人 (シャルキーヤ地方、ガルビーヤ地方、ブハイラ地方) が置かれていたという。ハリール・ザーヒリーの時代である15世紀末には、さらに、1人のカーシフ (kāshif al-kushshāf) が全地方を統括していたとする。

『諸王朝行政便覧』の説明では、15世後半のカーシフの増加について触れているが、その人物が百騎長のアミールかそれ以下の階層のアミールであるのか判然としない。任地については上・下エ

⁷¹ *Iqd al-Jumān*, 3:329, 340.

⁷² *Sulūk*, 3:1003; *Badāʾiʾ al-Zuhūr*, 1-2:572.

⁷³ *Zubda*, 129-130.

ジプト地域とギザ地方の3か所で、前節で触れたように、ナーシイル検地後の状況を伝えた『エジプト地誌』の記事と一致する。しかし、ナーシイル検地後はカーシフに選任されるアミールは四十騎長とされているので、百騎長のカーシフはそれ以前に毎年派遣された灌漑設備の調査に派遣されたアミールと考えられる。例えば、696/1297年にエジプトの各地方へ調査(kashf)に派遣されたアミール達の中にトゥガイフ・アル=イーガーニーṬughyf al-Īghānī (709/1308年没)の名前が見られる⁷⁴。このトゥガイフ・アル=イーガーニーは692/1293年にトリポリのナーイブから解任されたことが知られている⁷⁵。トリポリのナーイブは百騎長の職であることから、この調査時において彼はすでに百騎長であったと考えられる。そのほか、ナーシイル検地に先立ちエジプト全土を調査した際に派遣されたアミールたちの中にも百騎長が含まれていた⁷⁶。

また、1人のカーシフが全地域を統括したことからは、通常は872/1466年スルターン・カーイトバーイ al-Ashraf Qāytbāy (在位 872-901/1468-1496年)によって当時の官房長であったヤシュバク・ミン・マフディー Yashbak min Maḥdī に宰相と総カーシフ(kāshif al-kushshāf)を兼任させ⁷⁷、さらに一度職を辞したヤシュバクを武具長(ṣilāhdār)も兼任することで同職に再任したマムルーク朝末期の重要な制度変革が想起される。これはハリール・ザーヒリーが亡くなる(873/1468年)ちょうど前年の出来事である。このことは本論とは別に『諸王朝行政便覧』の執筆年代、を確定するうえでも重要な情報といえる。

ヤシュバク以降、官房長職に就くものが宰相(wazīr)、官房長(dawādār)、執事長(ustādār)、武具長、そしてエジプト全地域を統括する総カーシフに一人の人物が任命され、中央政庁の政務を統轄するとともに地方の農村からの徴税強化を図ったと考えられる。そして、ヤシュバクを含めスルターンに次ぐ実力者がこれらの職を兼任したが、その中にはトゥーマン・バーイ I 世 al-Ādil Ṭūmān Bāy (在位 906/1501年)、カーンスーフ・アル=ガウリー al-Ashraf Qānṣūh al-Ghawrī (在位 906-922/1501-1516年)といった、後にスルターンに就任する者も含まれていた⁷⁸。ただし、総カーシフの任命によって、各地方の行政官が廃されたわけではなく、地方ごとにカーシフは派遣されていたので、総カーシフの役割りはそれらを統括し地方からの徴税確保を図ることであったと考えられる⁷⁹。

⁷⁴ *Sulūk*, 1:829; *Iqd al-Jumān*, 3:363.

⁷⁵ *Sulūk*, 1:782.

⁷⁶ *Sulūk*, 2:146-147.

⁷⁷ *Badā'ī' al-Zuhūr*, 3:149; 五十嵐『中世イスラーム国家の財政と寄進』133-135頁。五十嵐はこの kāshif al-kushshāf については、「全エジプトの地方総督」の訳語を与えている。

⁷⁸ *Badā'ī' al-Zuhūr*, 3:357, 445, 449, 453, 463.

⁷⁹ 地方単位のカーシフの任命例は、*Badā'ī' al-Zuhūr*, 3:159, 161, 164, 191, 221, 248.

第4節 地方行政官の職務、資質

§1 盲目のカーシフ、アズダムルの履歴

14世紀のワーリー、カーシフといった地方行政官はほとんど人名録に出てこないため、履歴が不明な人物が多い。その中でほぼ唯一、複数の人名録に記録が残る地方行政官がアズダムル・アル=アウマー ‘Izz al-Dīn Azdamr al-kāshif al-A‘mā (754/1353年没)⁸⁰である。ここではまず、最も詳細な記録を残すマクリーズィーの『大いなる先達の書 *Kitāb al-Muqaffā al-Kabīr*』の記述を中心に彼の経歴を再現しよう。また、それを基に地方行政官の職務、求められた資質について検討する。

アズダムル・アル=アウマーは、その名のとおり盲目 (a‘mā) のカーシフ・アズダムルとして知られ、ナーシル・ムハンマドの生前から没後にかけて活躍したアミールの一人である。生年は不明であるが、アミール・アルマース Almās のマムルークとして購入された後、武具長のカジュリース Qajūs のマムルークとなり、彼の執事となった。そして、カジュリースがなくなると、カリーム・アルディーン・カビール Karīm al-Dīn al-Kabīr に仕え、彼の職務に従属して各地方へ赴いた。

その後、スルターン・ナーシル・ムハンマドは彼をナイル川の中州の島々 (al-Jazā‘ir) の農地の測量に用い、ハルカ騎士団長 (muqaddamī al-ḥalqa) の一人に列した。その後、イエメンへの行軍に彼を派遣した。イエメンから帰還すると、当時スルターンであったキトブガー al-‘Adil Kitbughā al-Manṣūrī (在位 694-696/1294-96年) は彼の行軍を賞賛して十騎長のアミールに列した。それからアズダムルを軍船工場の代官 (wāfi al-ṣinā‘a) と穀物倉庫次官 (shadd al-ahrā‘) に任じた。

その後、四十騎長に列せられたアズダムルは、バフナサー地方のワーリーに任じられた後、上エジプト地域のカーシフに昇格した。アズダムルは上エジプトのカーシフに任命されると、反乱を平定した。この職務の間に彼は両目を痛めたため、上エジプト地域のカーシフから下エジプト地域のカーシフに転任した。そこで、彼は灌漑設備の管理維持とアレクサンドリア港、及び周辺地域の統治を行った。また、この地域でも反乱の平定を行い、その苛烈さからこの地の人々に畏れられる程であったという。しかし、在任中に炎症がもとで742/1341-42年には視力を失う (‘amiya) こととなったものの、それを数年間隠し続け職務を遂行したという。やがて周りの兵士やウルバーンに失明が知られ、下エジプト地域のカーシフから解任されたが、彼の地方行政官としての能力の高さから、上エジプト地域のカーシフに再任され、続けて下エジプトのカーシフにも再任された。彼は失明のまま職務に忠実に励んだのち、754/1353年に没したと伝えられる。

⁸⁰ *al-Durar al-Kāmina*, 1:378; *Muqaffā*, 2:36-37; *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:223-228.

以上のアズダムルの経歴からは、実地経験に基づく軍事能力の高さ、地方の統治や農地管理の経験などが窺える。特に当初は主人に従い地方を回った経験や、農地の測量にかかわった経験は後の地方行政官への資質を養ったとも考えられる。また一方で、彼の出自をみるとスルターンの子飼いのマムルーク (*khāṣṣakīya*) ではなく、いわゆる外様 (*kharjīya*) のマムルークであった。741/1340 年に下エジプト地域のカーシフから上エジプト地域のカーシフに異動したという記録から⁸¹、彼が下エジプト地域のカーシフに最初に着任したのはその前年ということが予測できる。キトブガー時代に十騎長への叙任が行われたことを考慮すれば、かなりの高齢となる。没年である 754/1353 年にはスルターンの命により下エジプト地域の平定を行い、350 人の捕虜、120 頭の馬を戦利品としてカイロに送ったほか自ら 640 頭もの馬を運んだといわれる。これにより下エジプト地域には馬がいなくなったといわれるほどの苛烈な対応であったという⁸²。こういったアズダムルの軍功が彼の名にカーシフ (*al-kashif*) を付加させた理由とするならば、当時のカーシフに求められたものとして軍事的資質は重要であったと考えられる。アズダムルは特筆に値するカーシフであったため、人名録にも記載されるほどのアミールとして記録されたのであって、カーシフの典型とはいえ、理想像の一つとして捉えるべきであろう。また、能力の高さがあってもナースィル検地後に四十騎長相当されたカーシフが彼の出世の限界であったことは出自も合わせて考慮する必要がある。

§2 ウルバーンとナーイブの設置

エジプトの諸地方の農村地帯やその外縁部には農民以外にアラブ遊牧民が多数存在した。彼らはアラブ・ムスリム軍のエジプト征服を皮切りにアラビア半島からエジプトに移住を始め、シナイ半島、紅海を経由して上・下エジプト両地域に定住を始めたとされる。マムルーク朝時代の諸史料では、アラブ遊牧民をアラブまたは複数形のウルバーン (*'arab/pl. 'urbān*) と表現するが、遊牧と農業をともに行う半農半牧の生活を営む者や、純粋な遊牧生活を営む者の双方を指すことが多い。ここではウルバーンと統一して記述する。マムルーク朝時代、ウルバーンは政権に対する反乱活動をしばしば起こしたことが知られている。マムルーク朝成立直後の 651/1253 年には、上エジプト地域のウルバーンが、外来のマムルークによる支配を不服とし、ヒスン・アル=ディーン・サアラブ・アル=ジャアファリー *Ḥiṣn al-Dīn Tha'lab al-Ja'farī* を指導者として反乱を起こしたことは

⁸¹ *Sulūk*, 2:514.

⁸² *Sulūk*, 2:899.

有名である⁸³。その後も散発的に発生するウルバーンの反乱の鎮圧はマムルーク朝政府にとって重要な課題であった。

バフリー・マムルーク朝時代まで上エジプト地域の最重要都市であったクースの歴史研究で知られるガルサンは、カーシフはウルバーンをより効果的に支配するためにワーリーの上に設置された地方行政官としている⁸⁴。また、マムルーク朝時代の上エジプト地域のウルバーン反乱を分析した松田は、カーシフ職は、ウルバーンの反乱に対応し、イクターからの徴税を確保して、上エジプト地域におけるマムルーク朝の支配体制を強化するために設立されたとする⁸⁵。松田に拠れば、この軍事目的のカーシフの設置は、731/1331年にシャルキーヤ地方のワーリーを勤めていたズルザイ *Zulzayh* (738/1337年没)の上エジプト地域のカーシフ就任をもって嚆矢とする。これにより、上エジプト地域に関して、カーシフの役割は地方におけるジスルの監督、ワーリーの監視よりもウルバーンの反乱への対応が急務となり、アズダムルのような経験および軍事的能力高い人物がカーシフへの就任が求められるようになった背景と考えられる。

しかし、14世紀後半は特に上エジプト地域を中心にウルバーンの反乱が続発したことが知られている。これに対応するため、780/1378年に当時軍総司令官 (*atābak*)であったバルクークが百騎長から選任したナーイブ (*nā'ib*)を上エジプト地域に派遣した⁸⁶。この時、その職は、それまで上エジプト地域の中心とされてきたクースではなくアスユート (アスユート地方) に設置された。

一方、下エジプト地域のナーイブはやや遅れて、782/1380年にブハイラ地方の中心地ダマンフルに、同じく百騎長から選任され派遣された。この上・下エジプト地域に配置されたナーイブは百騎長のアミールというだけでなく「アミールの王 (*malik al-umarā'*)」の称号が記された。これにより地方に派遣される百騎長の地方行政官はアレクサンドリアを含めて3人となった。しかし、バルクークが亡くなると上・下エジプト地域のナーイブは廃され、再び上・下エジプト地域の灌漑設備の監督行政、治安についてはカーシフが担うこととなった。またその数は、『諸王朝行政便覧』に拠れば、上・下エジプト地域にそれぞれ3人ずつが配置された⁸⁷。

また、ウルバーンへの対応は軍事的鎮圧だけではなく、治安を委託したと考えられる例も見られる。788/1368年にはシャルキーヤ地方のアーイド族 (*Banū al-Ā'id*)の長 (*shaykh*)であるムハンマド・ブン・イーサー *Muhammad b. ʿĪsā* を四十騎長に相当する灌漑土手のカーシフに任命し、

⁸³ *Sulūk*, 1:386.

⁸⁴ Garcin, "The Regime of the Circassian Mamlūks," p. 294.

⁸⁵ 松田俊道「マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱」083頁。

⁸⁶ *Sulūk*, 3:340; *Baḍā'ī al-Zuhūr*, 1-2:273.

⁸⁷ *Zubda*, 130; Garcin, "The Regime of the Circassian Mamlūks," p. 314.

790/1388年にはシャルキーヤ地方のワーリーおよびカーシフに任命したことが知られている⁸⁸。ムハンマド・ブン・イーサーは翌791/1389年には離任していることから、カーシフの慣習である1年任期のカーシフとして複数回任命されたものと思われる。ただし、これ以外の事例は今のところ確認できず、バルクーク没後の800/1398年にはシャルキーヤ地方でウルバーンの反乱が記録されているので、一時的な政策であった可能性もある。

小結

マムルーク朝初期には毎年各地の徴税のため、灌漑施設を監督するために百騎長クラスのアミールと各地方単位でワーリーを派遣していたが、ナースィル検地を境に行政区域も整理され、四十騎長のカーシフを上・下エジプト地域に、各地方には四十騎長、十騎長のアミールを中心とするワーリーが各地に派遣されるようになった。ただし、地方の数とワーリーの人数のバランスは時代によって変更が加えられていった様相が窺える。当初は、スルターン直轄のイクターが置かれた地方には複数人のワーリーが派遣されていた。この体制は、基本的に14世紀中には維持されたが、任命数や地域比重については時代ごとに、変化が見られる。カーシフの基本的な役割は検知以前の百騎長が担っていた時代の職務内容を引き継いでいる。

検地によって確立されたイクター制を円滑に運用するためには、イクターの管理を頻繁に交代するムクターだけに委ねるのではなく、地方行政官を派遣し、ムクターを管理監督する必要がある。このため、各地方にワーリーを派遣するとともに、それを監督し統括するカーシフが設置されたと考えられる。その背景として、ワーリーによる各地での不正、収奪が考えられ、その結果ワーリーの一斉の人事異動や、逮捕、財産没収などが見られた。また、カーシフがナイル川の増水を利用した農業の鍵を握る灌漑土手の管理を担っていたことにも留意する必要がある。

ナースィル・ムハンマド没後の政治的混乱と749/1347-48年の黒死病の流行による人口減少、社会の不安定化が進み、ウルバーンによる反乱も増加するようになると、これに対応する形でカーシフに選任される人材として、軍事的な経験が豊富なものが望まれるようになった。しかし、続発するウルバーンの反乱に対応するため、より多くの軍を派遣する必要が生まれた。

この状況を受けて、バルクークによってウルバーン勢力が強い地域にナーイブが設置され、同時にカーシフは各地方単位で派遣されるワーリーと同様の行政官へと変化した。14世紀の段階では、完全にカーシフとワーリーが一致していたわけではなく、治安維持を目的とした面も見られ

⁸⁸ *Sulūk*, 3:544, 585; *Inbā' al-Ghunn*, 1:354.

た。例えば下エジプト地域のカーシフはブハイラ地方の中心地ダマンフルからシャルキーヤ地方に移されたが、その任地は同地域の中心都市ビルバイスではなく、比較的ウルバーンが多く住む地域であった。その他にナーイブ設置後は、ウルバーン勢力を抑えるために、そのウルバーンの首長をカーシフに任命することで、治安維持をウルバーン自身に委任する事例も見られた。

結 論

本論文では、バフリー・マムルーク朝（1250-1382年）における、スルターン・ナーシル・ムハンマド第3期治世から、ブルジー・マムルーク朝（1382-1517年）にいたる15世初頭までを対象として、エジプトのナイル川を利用した灌漑水利、治水とその管理・維持に関わった地方行政官の制度的な変遷を対象として考察を行った。ナイル川流域というエジプトの地域的な特徴と、イクター制を基としたマムルーク朝の統治システムとの間で発生した行政上の慣行の変化から、当時のマムルーク朝の政治・社会上の変動がいかなる諸相として現れたかについて具体的事例を基に検討した。本論文において各章で行った考察と得られた新たな知見について以下に示す。

第1章では、エジプトにおけるナイル川を利用した灌漑農業の管理について、コプト農事暦、ミクヤースにおけるナイル川の増水の計測、政府管理のジスルの管理といった実務的側面から、マムルーク朝時代においても、イスラーム以前から継承された慣習がアラブ化、またはイスラーム化しながら、イスラーム以降の徴税システムなどの新しい慣習との共存していった様子が観察された。特に、徴税と深いかかわりを持つ「政府管理のジスル」については、バフリー・マムルーク朝時代の政治、社会的変動により14世紀後半にはその慣習が衰退するだけでなく、ナイル灌漑設備の維持管理がムクターたちにより直接管理されるようになった可能性を指摘した。

第2章では、マムルーク朝の中央政府が主宰するナイル川の大規模な水利事業についてその行政慣行の特徴について考察を行った。ナーシル運河の掘削事業を中心にその過程を検討した結果、14世紀前半の大規模水利事業に共通する政治慣行として、アミールらイクター受給者による作業の分担が見られたが、この事業では建設区間に土地を所有するアミールにその義務が課せられた点に特徴がある。

カイロ西部地域におけるナーシル運河をはじめとする一連の運河掘削事業には、大きく2つの目的があった。第一にナーシル・ムハンマドの新たな政治拠点であるシルヤークースに建設した宮殿とハーンカーと、首都カイロとの間の結合を運河によって強化すること。第二にカイロ西部における交通網の整備を行い土地の利用価値を上げ、同地域の経済的な発展の基礎を形成することにあつた。このように、ナーシル運河をはじめとするカイロ西部地域で掘削された運河は複合的な目的を果たすように計画的に行われた水利事業であったことを指摘した。また、水利事業の技術的側面を見ると、船舶の航行を可能とするために、ナーシル運河をはじめとする複数の運河をミ

スル運河に結合させ、流量を増加させる手法は、当時のマムルーク朝において水利に関する知識が高く、それを担う技術者の存在が大規模水利事業の実施を支えていたと言える。

第3章では、ジスル・マンジャク建設の過程から、14世紀後半の水利行政の変化を考察した。1341年にナースィル・ムハンマドが没すると後継のアミールたちによる権力闘争により政治的混乱が発生した。加えて、1348年にエジプトで発生した黒死病をはじめとする疫病の流行により農村人口が激減し、貧困者の都市部への流入など農村社会の弱体化は、14世紀後半のマムルーク朝の社会に大きな変化をもたらした。この影響がジスル・マンジャクの建設過程においては、第2章で見られたような14世紀前半の水利事業における行政慣行を踏襲することが困難となったと考えられる。その結果、軍人から都市住民にいたるまで臨時税の課税対象として税を徴収する、それまでに見られなかった行政手続きが採られた。

イクター受給とそれに対する軍事奉仕というマムルーク朝の基本的な軍事支配体制において、農村経営の弱体化はイクター収入を基本とするマムルーク体制に変化をもたらし、労働力の集約が必要な水利事業にその影響がより早く表面化したことが確認できた。臨時税の徴収により政府主宰の水利事業が執行されたことは、それまでのマムルーク軍人へのイクター受給に対する奉仕義務の一環である労働力の供出という、14世紀前半までに見られるスルターンとアミール、マムルーク軍人らの相互関係における政治慣行に現れた変化の一つとして考えられる。

第4章では、マムルーク朝初期には毎年各地の徴税のため、灌漑施設を監督するために百騎長のアミールと各地方単位でワーリーを派遣していたが、ナースィル検地を境に行政区域も整理され、四十騎長のカーシフを上・下エジプト地域に、各地方には四十騎長、十騎長のアミールを中心とするワーリーが各地に派遣するようになり、制度の整備が進んだ。ただし、地方の数とワーリーの人数のバランスは時代によって変更が加えられていった様相が窺え、スルターンの直轄地には複数のワーリーが派遣される時期もあった。カーシフの基本的な役割は検地以前の百騎長が担っていた時代の職務内容を引き継いでいることも確認された。この体制は地方行政官数や地域編成については時代ごとに変遷が見られたが、基本的に14世紀中には維持された。

ワーリーとカーシフの関係について言えば、マムルーク朝のイクター制度下においては、イクター地の管理を頻繁に交代するムクターに委ねるだけでなく、ムクターを管理・監督するために各地方にワーリーを派遣したが、同時にワーリーも各地で職権を利用した不正、収奪が見られたため、それを監督し統括するカーシフの設置が不可欠となっていたことが窺える。また、カーシフがナイル川の増水を利用した農業の鍵を握る灌漑土手の管理を担っていたことにも、マムルーク朝政府に

における地方管理の基本的方針、地理的範囲設定、各地域の相互関係を考える上で留意する必要がある。14世紀後半の社会の不安定化と農村社会の弱体化はウルバーンによる反乱も増加させ、これに対応する形でカーシフに、例として取り上げた盲目のアズダムルのように軍事的な経験が豊富なものが選任されるようになったと考えられる。バルクークによってウルバーン対策が強化され、ナーイブが設置されると、カーシフは各地方単位で派遣されるワーリーと同様の行政官へと変化した。14世紀の段階では、完全にカーシフとワーリーが一致していたわけではなく、灌漑・徴税のほかに治安維持を目的とした面も見られた。例えば下エジプト地域のカーシフは比較的ウルバーンが多く住むシャルキーヤ地方であった。ウルバーン勢力を抑えるために、その首長をカーシフに任命することで治安維持をウルバーン自身に委任する事例も見られたが、バルクーク没後にウルバーンの反乱が減少するとナーイブ職は廃止され、カーシフが上・下エジプト地域にそれぞれ3人ずつ派遣され、ワーリーと同様に地方単位で派遣される行政官としての制度が定着することとなった。

一方で、ワーリーとして任命される地方行政官の事例は減少し、15世紀中葉にはエジプトの辺境地域のみとなった。これに伴い各地方における地方行政官の職務はカーシフに集約され、16世紀のオスマン朝時代に引き継がれる地方行政制度の祖形が成立したと考えられる。これを踏まえ今後は、15世紀中葉から後半期にかけての地方統治の変遷について検討するとともに、16世紀オスマン朝統治下のエジプトの地方行政制度、カーシフ職の変遷を対象に前近代エジプトにおける地方支配の構造について、イスラームの統治理念を含めたエジプト政治、社会の連続性と非連続性に着目しつつ考察を進めていきたいと考えている。

参考文献

一次史料

・写本史料

Akhbār Nīl Miṣr (MS1):

Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. al-'Imād b. Yūsuf b. 'Abd al-Nabī al-Aqfāhī al-Qāhirī al-Shāfi'ī (d. 808/1406), *Akhbār Nīl Miṣr*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, al-Zakīya 471.

Akhbār Nīl Miṣr (MS2):

———. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Jughrāfiyā Ḥalīm 9.

Faḍā'il Miṣr (MS):

Abū Muḥammad al-Ḥasan Ibn Zūlāq (d. 387/997), *Kitāb Faḍā'il Miṣr wa Akhbār-hā wa Khawāṣṣ-hā*. MS. Bibliothèque Nationale de France, Arabe 1816.

Fayḍ al-Madīd:

Shihāb al-Dīn Abū al-Khayr Aḥmad b. Muḥammad b. Muḥammad b. 'Abd al-Salām b. Mūsā al-Manūfi al-Shāfi'ī (d. 931/1525), *Fayḍ al-Madīd fī Akhbār al-Nīl al-Sa'īd*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Jughrāfiyā 66.

'Iqd al-Jumān (MS):

Badr al-Dīn Maḥmūd al-'Aynī (d. 855/1451), *'Iqd al-Jumān fī Ta'rīkh Ahl al-Zamān*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Ta'rīkh 1584.

Mabda' al-Nīl:

Jalāl al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad b. Ibrāhīm al-Maḥallī (d. 864/1459), *Mabda' al-Nīl 'alā al-Taḥrīr*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Buldān Taymūr 129.

Nayl al-Rā'ida (1):

Badr al-Dīn Muḥammad b. 'Umar b. Raslān b. Naṣīr b. Šālīḥ b. Silāj al-Dīn al-Bulqīnī al-Shāfi'ī (d. 791/1389), *Nayl al-Rā'ida fī al-Nīl al-Zā'ida*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Jughrāfiyā 380.

Nayl al-Rā'ida (2):

———. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Buldān al-Taymūr 130.

Nuzhat al-Rāy:

Abū al-Maḥāsīn Yūsuf Ibn Taghrī Birdī (d. 874/1470), *al-Juz' al-Tāsi' min Nuzhat al-Rāy*. MS. Bodleian, Marsh 311.

Qawānīn (MS):

Ibn Mammānī (d. 606/1209), *Qawānīn al-Dawāwīn*. MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Ta'rīkh 4775.

Tawāli':

Abū al-Baqā' Muḥammad b. Yaḥyā b. Shākīr b. 'Abd al-Ghanī Ibn al-J'ān al-Badrī (d. 902/1496),

Tawāli' al-Buḍūr fī Tahwīl al-Sīnīn wal-Shuhūr. MS. Bibliothèque Nationale de France, Arabe 2557.

• 刊行史料

Akhbār Nīl Miṣr:

Shihāb al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. al-'Imād b. Yūsuf b. 'Abd al-Nabī al-Aqfahsī al-Qāhirī al-Shāfi'ī (d. 808/1406), *Kitāb Akhbār Nīl Miṣr*. Labiba Ibrāhīm Muṣṭafā and Nī'māt 'Abbās Muḥammad (eds.), Cairo, 2006.

A'lām:

Khayr al-Dīn al-Zirikī, *al-A'lām: Qāmūs Tarājīm li-Ashḥar al-Rijāl wal-Nisā' min al-'Arab wal-Musta'ribīn wal-Mustashriqīn*. 8 vols., Beirut, 1979.

Awzān:

Taqī al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *Kitāb al-Awzān wal-Akyāl al-Sharī*. Sultān b. Hilayl al-Mismār (ed.), Beirut, 2007.

A'yān:

Ṣalāḥ al-Dīn Khalīl b. Aybak al-Ṣafaḍī (d. 764/1363), *A'yān al-'Aṣr wa A'wān al-Naṣr*. 6 vols., 'Alī Abū Zayd *et al.* (ed.), Damascus, 1998.

Badā'i' al-Zuhūr:

Muḥammad b. Aḥmad Ibn Iyās (d. ca. 930/1524), *Badā'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr*. 5 vols., M. Muṣṭafā (ed.), Wiesbaden, 1975.

Bayān:

Taqī al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *al-Bayān wal-I'rāb 'ammā bi-Ard Miṣr min al-A'rāb*. 'Abd al-Na'im Dayfi 'Uthmān 'Abd al-Na'im (ed.), Cairo, 2006.

Bulbul al-Rawḍa:

Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān al-Suyūfī (d. 911/1505), *Bulbul al-Rawḍa*. Nabīl Muḥammad 'Abd al-'Azīz Aḥmad (ed.), Cairo, 1981.

Daḥīl:

Abū al-Maḥāsīn Yūsuf Ibn Taghrī Birdī (d. 874/1470), *al-Dalīl al-Shāfi‘ alā al-Manḥal al-Ṣāfi*. 2 vols., Fahīm M. Shaltūt (ed.), Cairo, 1998 (2nd ed.).

Daw’:

Shams al-Dīn Abū al-Khayr Muḥammad al-Sakhāwī (d. 902/1496), *al-Daw’ al-Lāmi‘ li-Ahl al-Qarn al-Tāsi‘*. 12 vols. (in 6 binds), Beirut, n.d.

al-Durar al-Kāmīna:

Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī (d. 852/1449), *al-Durar al-Kāmīna fi A’yān al-Mi‘a al-Thāmina*. 5 vols., M. Sayyid Jād al-Ḥaqq (ed.), Cairo, 1966.

Faḍā’il Miṣr:

Abū Muḥammad al-Ḥasan Ibn Zūlāq (d. 387/997), *Kitāb Faḍā’il Miṣr wa Akhbār-hā wa Khawwās-hā*. ‘Alī ‘Umar (ed.), Cairo, 1999.

Futūḥ Miṣr:

Abū al-Qāsim Ibn ‘Abd al-Ḥakam (d. 257/871), *Futūḥ Miṣr wa Akhbār-hā*. Muḥammad al-Ḥujayrī (ed.), Beirut, 1996.

Ḥawādīth al-Duhūr:

Abū al-Maḥāsīn Yūsuf Ibn Taghrī Birdī (d. 874/1470), *Ḥawādīth al-Duhūr fi Maḍā al-Ayyām wal-Shuhūr*. 2 vols., Muḥammad Kamāl al-Dīn ‘Izz al-Dīn (ed.), n.p., 1990.

Ḥusn:

Jalāl al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān al-Suyūfī (d. 911/1505), *Ḥusn al-Muḥāḍara fi Ta’rīkh Miṣr wal-Qāhira*. 2 vols., M. Abū al-Faḍl Ibrāhīm (ed.), Cairo, 1998.

Ibn Bassām:

Ibn Bassām, *al-Muḥtasib, Nihāyat al-Ruḥa fi Talb al-Ḥisba*. Ḥusām al-Dīn al-Sāmarrā’ī (ed.), Baghdad, 1968.

Ibn al-Furāt:

Nāṣir al-Dīn Muḥammad Ibn al-Furāt (d. 807/1405), *Ta’rīkh al-Duwal al-Mulūk*. vols. 4–5(i), H. M. al-Shammā‘ (ed.), Basra, 1967–70; vols. 7–9, Q. Zariq (ed.), Beirut, 1936–42.

Ibn al-Ṣayrafi:

Amīn al-Dīn Abū Qāsim ‘Alī Ibn al-Ṣayrafi al-Miṣrī (d. 542/1147), *al-Qāmūn fi Dīwān al-Rasā’il al-Ishāra ilā Man Nāla al-Wizāra*. Ayman Fu’ād Sayyid (ed.), Cairo, 1990.

Ibn al-Wardī:

Zayn al-Dīn ‘Umar Ibn al-Wardī (d. 749/1348), *Ta’rīkh Ibn al-Wardī*. 2 vols., Najaf, 1969.

Ibn Zahrā:

Abū al-Ṭayyib Aḥmad Ibn Zahrā (d. 885/1480), *Faḍā’il al-Bāhira fī Maḥāsin Miṣr wal-Qāhira*. Muṣṭafā al-Saqā and Kāmil al-Muhandis (eds.), Cairo, 1969.

Ighātha:

Taqī al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *Ighāthat al-Umma bi-Kashf al-Ghumma*. Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda and Jamāl al-Dīn Muḥammad al-Shayyāl (eds.), Cairo, 2002 (3rd ed.). English tr. by A. Allouche, *Mamluk Economics*. Salt Lake City, 1994.

Inbā’ al-Ghumr:

Ibn Hajar al-‘Asqalānī (d. 852/1449), *Inbā’ al-Ghumr bi-Abnā’ al-‘Aṣr*. 4 vols., Ḥasan Ḥabashī (ed.), Cairo, 1994–98.

Intiṣār:

Ibrāhīm Ibn Duqmāq al-‘Alā’ī (d. 806/1406), *al-Intiṣār li-Wāsiyat ‘Iqd al-Amṣār fī Ta’rīkh Miṣr wa Juḡhrāfiyat-hā*. 2 vols. (in 1 bind), Cairo, 1893.

‘Iqd al-Jumār:

Badr al-Dīn Maḥmūd al-‘Aynī (d. 855/1451), *‘Iqd al-Jumār fī Ta’rīkh Ahl al-Zamān*. 5 vols., M. M. Amīn (ed.), Cairo, 1987–2009.

Istakhrī:

Abū Ishāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fāris al-Karkhī al-Istakhrī (d. 346/957), *al-Masālik wal-Mamālik*. Muḥammad Jābir ‘Abd al-‘Āl al-Ḥimī (ed.), Cairo, 1961.

Itti’āz:

Taqī al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *Itti’āz al-Ḥunafā bi-Akhhār al-‘Imma al-Fāṭimīyīn al-Khulafā’*. 3 vols., Jamāl al-Dīn al-Shayyāl (ed.), Cairo, 1996 (2nd ed.).

Jawhar:

Ibrāhīm Ibn Duqmāq al-‘Alā’ī (d. 806/1406), *al-Jawhar al-Thamīn fī Siyar al-Khulafā’ wal-Mulūk wal-Salāṭīn*. Sa’īd ‘Abd al-Fattāh ‘Āshūr (ed.), Cairo, 1982.

Jawāhir al-Buḥūr:

Ibn Waṣīf Shāh (6–7/13–14 c.), *Jawāhir al-Buḥūr wa Waqā’i’ al-Umūr wa ‘Ajā’ib al-Duhūr*. Muḥammad Zaynuhum Muḥammad ‘Azab (ed.), Cairo, 2004.

Kashf al-Zumūr:

Hājj Khalifa Kātip Çelebi (d. 1068/1657), *Kashf al-Zumūn ‘an Asāmī al-Kutub wal-Funūn*. 2 vols., Istanbul, 1941; repr. Beirut, n.d.

Kanz al-Durar:

Abū Bakr b. ‘Abd Allāh Ibn Aybak al-Dawādārī (d. 8/14c.), *Kanz al-Durar wal-Jāmi‘ al-Ghurar*, vol. 9, *al-Durar al-Fākhir fi Sīrat al-Malik al-Nāsir*. H. R. Romer (ed.), Cairo, 1960.

Kawkab al-Rawḍa:

Jalāl al-Dīn ‘Abd al-Rahmān al-Suyūfī (d. 911/1505), *Kawkab al-Rawḍa fi Ta’rikh al-Nīl wa Jazīrat al-Rawḍa*. Muḥammad al-Shashṭāwī (ed.), Cairo, 2002.

Kindī:

Abū ‘Umar Muḥammad al-Kindī (d. 350/961), *Kitāb al-Wulāt wa-Kitāb al-Qudāt*. R. Guest (ed.), Leiden/London, 1912.

Kitāb al-Jughrāfiya:

Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Abī Bakr al-Zuhūrī (d. ca. 550/1163), *Kitāb al-Jughrāfiya*. Muḥammad Hājj Sādiq (ed.), Cairo, n.d.

Khīṭaṭ:

Taqī al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *al-Mawā‘iz wal-I‘tibār bi-Dhikr al-Khīṭaṭ wal-Āithār*. 2 vols., Bulāq, AH1270; repr., Baghdad, 1975 (new ed., 5 vols., Ayman Fu’ād Sayyid (ed.), London, 2002–6).

al-Khīṭaṭ al-Tawfiqīya:

‘Alī Mubārak, *Khīṭaṭ al-Tawfiqīya al-Jadīda li-Miṣr wal-Qāhira wa Muḥim-hā wa Bilād-hā al-Qadīma wal-Shahīra*. 20 vols., Cairo: 1980–93 (2nd ed.).

(1st ed., Būlāq, 1886–88.)

Lisān:

Jamāl al-Dīn Abū al-Faḍl Muḥammad Ibn al-Manzūr al-Ifriqī al-Miṣrī (d. 711/1312), *Lisān al-‘Arab*. 20 vols., Cairo, n.d. (repr. of Būlāq edition).

Luma‘:

‘Uthmān b. Ibrāhīm al-Nābulṣī (d. 660/1261), “Kitāb Luma‘ al-Qawānīn al-Muḍriya fi Dawāwīn al-Diyār al-Miṣrīya.” C. Becker and Cl. Cahen (eds.), *Bulletin d’etudes orientales*, 16 (1960), pp. 1–78 (Arabic text), 119–134.

Manhal:

Abū al-Mahāsīn Yūsuf Ibn Taghārī Birdī (d. 874/1470), *al-Manhal al-Sāfi wal-Mustawfi ba'da al-Wāfi*. 13 vols., M. M. Amīn (ed.), Cairo, 1984–2009.

Masālik al-Absār (1):

Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh al-'Umarī (d. 749/1349), *Masālik al-Absār fi Mamālik al-Amsār*. 27 vols., Kāmil Salmān al-Junūbī (ed.), Beirut, 2010.

Masālik al-Absār (2):

———, *Masālik al-Absār fi Mamālik al-Amsār*. Ayman Fu'ād Sayyid (ed.), Cairo, 1985.

Masālik al-Absār (3):

———, *Masālik al-Absār fi Mamālik al-Amsār*. 2 vols., D. Krawulsky (ed.), Beirut, 1985–86.

Mīnhāj:

Abū al-Ḥasan 'Alī b. Uthmān al-Makhzūmī al-Qurashī (d. 585/1189), *al-Muntaqā min Kitāb al-Mīnhāj fi 'Ilm Kharāj Miṣr*. Klūd Kāhin (ed.), Cairo, 1986.

Mulḥūṭ:

Majd al-Dīn Muḥammad b. Ya'qūb al-Fīrūzābādī (d. 818/1414), *al-Qārnūs al-Mulḥūṭ*. Ḥassān 'Abd al-Mannān (ed.), Beirut, 2004.

Mulḥūṭ al-Mulḥūṭ:

Butrus b. Al-Būlus al-Bustānī (d. 1883), *Mulḥūṭ al-Mulḥūṭ: Qāmūs Muṭawwal lil-Lughā al-'Arabīya*. Beirut, 1993.

Mu'īd:

Tāj al-Dīn Abd al-Wahāb al-Subkī (d. 771/1370), *Mu'īd Ni'am wa Mubīd al-Niqam*. M. A. al-Najjār and A. Shalabī (eds.), Cairo, 1996 (2nd. ed.).

Mu'jam al-Buldān:

Shihāb al-Dīn Abū 'Abd Allāh Yāqūt al-Ḥamawī (d. 626/1229), *Mu'jam al-Buldān*. 5 vols., Beirut, 1957–68.

Muqaddima:

Walī al-Dīn 'Abd al-Raḥmān Ibn Khaldūn (d. 808/1406), *Muqaddima*. 3 vols., M. Quatremere (ed.), Paris, 1858.

(邦訳：イブン・ハルドゥーン／森本公誠訳『歴史序説』全3巻、岩波書店、1979-87年)

Muqqafā:

Taqī al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *Kitāb al-Muqqafā al-Kabīr*. 8 vols., M.

al-Ya'lawī (ed.), Beirut, 1991.

Murūj al-Dhahab:

Abū al-Ḥasan 'Alī al-Mas'ūdī (d. 346/956), *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādīn al-Jawhar*. 9 vols., C. Barbier de Meynard (ed.), Paris, 1861–77.

Musabbihū:

'Izz al-Dīn al-Malik Muḥammad b. 'Ubayd Allāh b. Aḥmad al-Musabbihī (d. 420/1029), *Akhbār Miṣr*. 2 vols., Ayman Fu'ād Sayyid (ed.), Cairo, 1978–84.

Mushtarak:

Shihāb al-Dīn Abū 'Abd Allāh Yāqūt al-Ḥamawī (d.626/1229), *al-Mushtarak Waq'an wal-Muftariq Saq'an*. Baghdad, 19--.

Nayl al-Amal:

Zayn al-Dīn 'Abd al-Bāsiṭ b. Khalīl b. Shāhīn al-Zāhiri al-Ḥanafī (d. 920/1514), *Nayl al-Amal fi Dhayl al-Duwal*. 9 vols., 'Umar 'Abd al-Salām Tadmurī (ed.), Saydā'/Beirut, 2002.

Nihāyat al-Arab:

Shihāb al-Dīn Aḥmad al-Nuwayrī (d. 733/1333), *Nihāyat al-Arab fi Funūn al-Adab*. vols. 1–18, Cairo, 1954; vols. 19–33, M. A. Ibrāhīm *et al.* (eds.), Cairo, 1975–2002.

al-Nujūm al-Zāhira:

Abū al-Maḥāsin Yūsuf Ibn Taghrī Birdī (d. 874/1470), *al-Nujūm al-Zāhira fi Mulūk Miṣr wal-Qāhira*. 16 vols., Faḥīm M. Shaltūt *et al.* (eds.), Cairo, 1963–72.

Nuzhat al-Nāzir:

Mūsā b. M. b. Yahyā al-Yūsufī (d. 759/1358), *Nuzhat al-Nāzir fi Sīrat al-Malik al-Nāsir*. Aḥmad Ḥuṭayṭ (ed.), Beirut, 1986.

Nuzhat al-Nufūs:

Al-Khaṭīb al-Jawharī 'Alī b. Dāwūd al-Ṣayrafi (d. 900/1495), *Nuzhat al-Nufūs wal-Abdān fi Tawārīkh al-Zamān*. 4 vols., Ḥasan Ḥabashī (ed.), Cairo, 1970–94.

Nuzhat al-Umam:

Abū al-Maḥāsin Yūsuf Ibn Taghrī Birdī (d. 874/1470), *Nuzhat al-Umam fi al-'Ajā'ib wal-Ḥukam*. Muḥammad Zaynahum Muḥammad 'Azab (ed.), Cairo, 1995.

Qawānīn:

Ibn Mammāfi (d. 606/1209), *Qawānīn al-Dawāwīn*. 'Azīz Surayyāl 'Atīya (ed.), Cairo, 1943.

al-Rawḍa al-Bahīya:

Muḥī al-Dīn Abū al-Faḍl ‘Abd Allāh Ibn ‘Abd al-Zāhir (d. 692/1293), *al-Rawḍa al-Bahīya al-Zāhira fī Khīṭat al-Mu‘izzīya al-Qāhira*. Ayman Fu‘ād Sayyid (ed.), Cairo, 1996.

Shadharāt al-Dhahab:

Ibn ‘Imād al-Ḥanbalī, ‘Abd al-Ḥayy b. Aḥmad b. Muḥammad (d. 1089/1678), *Shadharāt al-Dhahab fī Akhbār Man Dhahaba*. Beirut, 1979.

Shujā‘ī:

Shams al-Dīn al-Shujā‘ī al-Miṣrī (8/14 c.), *Ta’rīkh al-Malik al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn al-Ṣālīhī wa Awlādī-hi*. vol. 1 (Arabic text), Barbara Schäfer (ed.), Wiesbaden, 1977.

Ṣubḥ:

Shihāb al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad al-Qalqashandī (d. 821/1418), *Ṣubḥ al-A‘shā fī Ṣinā‘at al-Inshā’*. 14 vols., Cairo, 1964; *Fahāris Kitāb Ṣubḥ al-A‘shā*, Cairo, 1972.

Sukardān:

Ibn Abī Ḥajala Aḥmad b. Yahyā al-Tilmisānī, Shihāb al-Dīn (d. 776/1374), *Kitāb Sukardān al-Sultān*. ‘Alī Muḥammad ‘Umar (ed.), Cairo, 2001.

Ṣūrat al-Arḍ:

Abū al-Qāsim Ibn Ḥawqal al-Naṣībī (4/10 c.), *Kitāb Ṣūrat al-Arḍ*. Beirut, 1992.

Sulūk:

Taqī al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī al-Maqrīzī (d. 845/1442), *Kitāb al-Sulūk li-Ma‘rifat Duwal al-Mulūk*. vols. 1–2, M. M. Ziyāda (ed.), 1939–58; vols. 3–4, Sa‘īd ‘Abd al-Fattāh (ed.), Cairo, 1970–73.

Tadhkira:

al-Ḥasan b. ‘Umar b. Ḥabīb (d. 779/1377), *Tadhkirat al-Nabih fī Ayyām al-Mansūr wa Banīh*. 3 vols., M. M. Amīn (ed.), Cairo, 1976–86.

Ta’rīkh al-Fayyūm:

‘Uthmān b. Ibrāhīm al-Nābulī (d. 660/1261), *Ta’rīkh al-Fayyūm wa Bilādī-hi*. B. Moritz (ed.), Bayrut, 1974. (1st ed., Cairo, 1898.)

Taysīr:

Muḥammad b. Muḥammad b. Khalīl al-Asadī (d. After 854/1450), *al-Taysīr wal-I’tibār wal-Tahrīr wal-Ikhtiyār fī-mā yajibū min Ḥusun al-Tadbīr wal-Taṣarruf wal-Ikhtiyār*. ‘Abd al-Qādir Aḥmad Ṭulaymāt (ed.), Cairo, 1968.

Tuhfa:

Sharaf al-Dīn Yahyā b. al-Maqqar b. al-Jī'ān, *al-Tuhfa al-Sanīya bi-Asmā' al-Bilād al-Miṣrīya*. B. Moritz (ed.), Cairo, 1974.

Wāfi:

Ṣalāḥ al-Dīn Khalīl b. Aybak al-Ṣafaḍī (d. 764/1363), *al-Wāfi bil-Wafayāt*. 30 vols., Wiesbaden, 1962–2008.

Zubda:

Khalīl b. Shāhīm al-Zāhirī (d. 873/1468), *Zubdat Kashf al-Mamālik: Tableau politique et administratif de l'Égypte, de la Syrie et du Hijāz, sous la domination des sultans mamloûks du XIIIe au XVe siècle* / par Khalīl eḍ-Ḍāhiry; texte Arabe publié par Paul Ravaisse Paris, 1894.

二次文献

〈外国語〉

Abu-Lughod, J. L., *Cairo: 1001 Years of the City Victorious*. New Jersey, 1971.

Allan, J. A. et al. (eds.), *Water in the Middle East: Legal, Political and Commercial Implications*. London, 1995.

'Alī Ibrāhīm Ḥasan, *Miṣr fi al-'Uṣūr al-Uṣṭā min al-Faṭḥ al-'Arabī ilā al-'Uṭmānī*. Cairo, 1947.

———, *Nukhbat al-Fikr fi Tadbūr Nil Miṣr*. Beirut, 1981.

Amīn Sāmī Bāshā, *Taqwīm al-Nīl: wa-Asmā' Man Tawallawu Amr Miṣr wa-Muddat Ḥukmi-him 'alay-hā wa-Mulāḥazāt Ta'rīkhīya 'an Aḥwāl al-Khilāfa al-'Āmma wa-Shu'ūn Miṣr al-Khāṣṣa 'an al-Mudda al-Munḥasira bayna al-Sana al-'Ulā wa-Sana 1333 al-Hijrīya (622–1915 Milādīya)*. 3 vols. (in 6 binds), Būlāq, 1915–36.

Amitai-Preiss, R., *Mongols and Mamluks: The Mamluk-Ilkhānid War, 1260–1281*. Cambridge, 1995.

Ashtor, E., *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*. Berkeley/Los Angeles/London, 1976.

Atiya, Aziz S. ed., *The Coptic Encyclopedia*. 8 vols., New York/Toronto/New York, 1991.

Ayalon, D., "The Wafidiya in the Mamluk Kingdom." *Islamic Culture*, 25-1 (1951), pp. 89–104.

———, "Studies on the Structure of the Mamluk Army I." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 15 (1954), pp. 203–228.

———, "Studies on the Structure of the Mamluk Army II." *Bulletin of the School of Oriental and African*

- Studies*, 15 (1954), pp. 449–476.
- , “Studies on the Structure of the Mamluk Army III.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 16 (1954), pp. 57–90.
- , “Baḥrī Mamlūks, Burjī Mamlūks: Inadequate Names for the Two Reigns of the Mamlūk Sultanate.” *Tārīkh*, 1 (1990), pp. 3–53.
- al-Bayūmī Ismā‘īl al-Shirbīnī, *Muṣāḍarat al-Amlāk fi al-Dawla al-Islāmīya: Aṣr al-Salāḥīn al-Mamālīk*. 2 vols. 1997.
- Borsh, Stuart J., “Nile Floods and the Irrigation System in Fifteenth-Century Egypt.” *Mamlūk Studies Review*, 4 (2000), pp. 131–141.
- , *The Black Death in Egypt and England: A Comparative Study*. Cairo, 2005.
- , “Thirty Years after Lopez, Miskimin, and Udovitch.” *Mamluk Studies Review*, 8-2 (2004), pp. 191–201.
- Brinner, W. M., “The Significance of the Ḥarāfīsh and Their “Sultan.”” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 6-2 (July 1963), pp. 190–215.
- Browman, Alan K. and Eugene Rogan (eds.), *Agriculture in Egypt: From Pharaonic to Modern Time*. Proceeding of the British Academy 96, Oxford/New York, 1999.
- Byrne, Joseph Patrick, *Daily Life during the Black Death*. Westport, Connecticut/ London, 2006.
- Conrad, Lawrence I., “Ṭā‘ūn and Wabā’: Conception of Plague and Pestilence in Early Islam.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 15-3 (1982), pp. 268–307.
- Cooper, Richard. S., “A Note on the Dīnār Jayshī.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 16-2/3 (1973), pp. 317–318.
- , “The Assessment and Collection of Kharāj Tax in Medieval Egypt.” *Journal of the American Oriental Society*, 96-3 (1976), pp. 365–382.
- Dols, Michel W., “The Comparative Communal Responses to the Black Death in Muslim and Christian Society.” *VIATOR: Medieval and Renaissance Studies*, 5 (1974), pp. 269–287.
- , *The Black Death in the Middle East*. Princeton, 1977.
- , “The Second Plague Pandemic and Its Recurrences in the Middle East: 1347–1894.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 22-2 (1979), pp. 162–189.
- Dozy, R., *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2 vols., Beirut, 1968 (repr. ed.).
- Ducène, Jean-Charles, “Le Delta du Nil dans les cartes d’Ibn Ḥawqal.” *Journal of Near Eastern Studies*, 63-4

- (2004), pp. 241–256.
- EI: The Encyclopedia of Islam*. 1st ed. M. Th. Houtsma *et al.* (eds.), 1913–36; 2nd ed., H. A. R. Gibb *et al.* (eds.), 1960–2009; 3rd ed., Gudrun Krämer *et al.* (eds.), 2007–.
- Evans, T., “History of Nile Flows.” In P. P. Howell and J. A. Allan (eds.), *The Nile, Sharing a Scarce Resource: A Historical and Technical Review of Water management and of Economic and Legal Issues*, Cambridge/New York, 1994, pp. 27–63.
- Fernades, L., *The Evolution of a Sufi Institution in Mamluk Egypt: The Khanqah*. Berlin, 1988.
- Fukuda, H., *Irrigation in the World: Comparative Development*. Tokyo, 1976.
- Fulton, A. S., “A Mamūk Arabic Manuscript.” *The British Museum Quarterly*, 16-4 (Jan. 1952), pp. 93–94+ii.
- Garcin, Jean-Claude, “The Regime of the Circassian Mamlūks.” In C. F. Petry (ed.), *The Cambridge History of Egypt*, vol. 1, *Islamic Egypt 640–1517*, Cambridge/New York, 1998, pp. 290–317.
- Halm, von H., “Ägypten nach den mamlukischen Lehenregistern I, II.” In *Beihefte zum Tübinger Atlas des Vorderen Orients*, Reich B (Geisteswissenschaften) Nr. 38/1, Wiesbaden, 1979.
- Hava, J. G., *al-Faraid: Arabic-English Dictionary*. Beirut, 1982 (5th ed.).
- Humphreys, R. S., “The Politics of the Mamluk Sultanate: A Review Essay.” *Mamlūk Studies Review*, 9-1 (2005), pp. 221–231.
- Hanna, N., *An Urban History of Būlūq in the Mamluk and Ottoman Periods*. Cairo, 1983.
- Ḥasan Bāshā, *al-Furūn al-Islāmīya wa Wazāʾif ‘alā al-Āthār al-‘Arabīya*. 3 vols., Cairo, 1966.
- Haswell, C. J. R., “Cairo, Origin and Development: Some Notes on the Influence of the River Nile and Its Changes.” *Bulletin de la Société Royal de Géographie d’Égypte*, 11 (1922), pp. 171–176.
- Hill, D. R., *Islamic Science and Engineering*. Edinburg, 1993.
- Holt, P. M., “The Sultanate of al-Manṣūr Lāchīn (696–8/1296–9).” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 36 (1973), pp. 521–532.
- , “The Mamluk Sultans: 1250–1517.” *History Today*, 27-11 (1977), pp. 719–725, 761.
- , “Notes and Documents: A Chancery Clerk in Medieval Egypt.” *The English Historical Review*, 101 (no. 400) (1986), pp. 671–679.
- , *The Age of the Crusades: The Near East from the Eleventh Century to 1517*. London/New York, 1987.
- Ibrāhīm Ḥasan Saʿīd, *al-Baḥrīya fī ‘Aṣr Salāḫīn al-Mamālīk*. Alexandria, 1983.
- Lane, E. W., *An Arabic-English Lexicon*. 8 vols., London/Edinburgh, 1963–93.

- , *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*. Cairo/New York, 2003 (repr. from 5th ed.).
- (邦訳：ウイリアム・レイン著、大場正志訳『エジプトの生活：古代と近代の奇妙な混交』桃源社、1964年)
- Lapidus, Ira M., *Muslim Cities in the Later Middle Ages*. Cambridge, 1984 (2nd ed.).
- , “The Grain Economy of Mamluk Egypt.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 12-1 (1969), pp. 1–15.
- Levanoni, A., “The Mamluks’ Ascent to Power in Egypt.” *Studia Islamica*, 72 (1990), pp. 121–144.
- , “The Mamluk Conception of the Sultanate.” *International Journal of Middle East Studies*, 26 (1994), pp. 373–392.
- , *A Turning Point in Mamluk History: The Third Region of al-Nāṣir Muḥammad Ibn Qalāwūn (1310–1341)*. Leiden, 1995.
- , “The Mafārida in the Mamluk Army: Reconsidered.” *Arabica*, 53-3 (2006), pp. 331–352.
- Lewicka, P., “What a King Should Care About: Two Memoranda of the Mamluk Sultan on Running the State’s Affairs.” *Studia arabistyczne i islamistyczne*, 6 (1998), pp. 5–45.
- , “Arabic Sources for the Life and Reign of Sultan al-Mansūr Qalāwūn.” *Rocznik Orientalistyczny*, 52 (2000), pp. 52–78.
- Little, D. P., “Communal Strife in the Late Mamlūk Jerusalem.” *Islamic Law and Society* 6-1 (1999), pp. 69–96.
- Martel-Thoumian, Bernadette, *Les civils et l’administration dans l’état militaire Mamlūk (IX^e/XV^e siècle)*. Damascus, 1991.
- Massoud, Sami G., *The Chronicles and Annalistic Sources of the Early Mamluk Circassian Period*. Leiden/Boston, 2007.
- Meinecke-Berg, von V., “Quellen zu topographie und baugeschichte in Kairo unter Sultan an-Nāṣir Muḥammad b. Qalā’ūn.” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft. Supplement*, 3 (1977), pp. 539–550.
- Meloy, J. L., “Copper Money in Late Mamluk Cairo: Chaos or Control?” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 44-3 (2001), pp. 293–321.
- , “The Privatization of Protection: Extortion and the State in the Circassian Mamluk Period.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 47-2 (2004), pp. 195–212.
- Meri, Josef W. ed., *Medieval Islamic Civilization: An Encyclopaedia*. 2 vols., New York, 2006.
- Miura, T., “Administrative Networks in the Mamlūk Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery.” In Sato T.

- (ed.), *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks*, London/New York, 1997, pp. 39–76.
- Muḥammad Ramzī, *al-Qāmūs al-Jughrāfī lil-Bilād al-Miṣrīya*. 2 vols. (in 6 binds), Cairo, 1994.
- Muḥammad al-Shaṣhtāwī, *Mutanazzihāt al-Qāhira fi al-‘Aṣrayn al-Mamlūk wal-‘Uṭhmārū*. Cairo, 1999.
- Muḥammad Ḥamdī al-Manāwī, *Nahr al-Nīl fi al-Maktaba al-‘Arabīya*. Cairo, 1966.
- Poliak, A. N., “Les révoltes populaires en Égypte à l’époque des Mamelouks.” *Revue des Études Islamiques*, 8 (1934), pp. 251–271.
- , “Some Notes on the Feudal System of the Mamlūks.” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1937, pp. 109–107.
- , “The Ayyūbid Feudalism.” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1939, pp. 428–432.
- Popper, William, *The Cairo Nilometer: Studies in Ibn Taghrī Birdī’s Chronicles of Egypt. I*. Berkley/Los Angeles, 1951.
- , *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382–1468 A.D.: Systematic Notes to Ibn Taghrī Birdī’s Chronicles of Egypt*. 2 vols., Berkley/Los Angeles, 1955–57.
- Qāsim ‘Abduh Qāsim, *al-Nīl wal-Mujtami‘ al-Miṣrī fi ‘Aṣr Salāṭīn al-Mamālīk*. Alexandria, 1978.
- Rabbat, Nasser O., *The Citadel of Cairo: A New Interpretation of Royal Mamluk Architecture*. Leiden, 1995.
- Rabie, Hassanein, “The Size and Value of the Iqṭā‘ in Egypt 564–741 A.H./1169–1341 A.D.” In M. A. Cook (ed.), *Studies in the Economic History of the Middle East from the Rise of Islam to the Present Day*, London, 1970, pp. 129–138.
- , *Financial System of Egypt A.H.564–741/A.D.1169–1341*. London, 1972.
- , “Some Technical Aspects of Agriculture in Medieval Egypt.” In A. L. Udovitch (ed.), *The Islamic Middle East, 700–1900: Studies in Economic and Social History*, Princeton, 1981, pp. 59–90.
- (Ḥasanayn Muḥammad Rabī‘), *al-Nuẓm al-Mālīya fi Miṣr Zaman al-Ayyūbiyīn*. Cairo, 1990.
- Rapoport, Yussef, “Invisible Peasants, Marauding Nomads: Taxation, Tribalism, and Rebellion Egypt.” *Mamlūk Studies Review*, 8-2 (2004), pp. 1–22.
- Raymond, André, *Le Caire*. [Paris], 1993; English tr. by Wilard Wood, *Cairo*. Cambridge, MA, 2000.
- Sabra, A., *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mamluk Egypt, 1250–1517*. Cambridge, 2000.
- Said, R., “Origin and Evolution of the River Nile.” In P. P. Howell and J. A. Allan (eds.), *The Nile, Sharing a Scarce Resource: A Historical and Technical Review of Water management and of Economic and Legal Issues*, Cambridge/New York, 1994.

Ṣalāh Elbeḥeirī, *Les Institutions de l'Égypte au temps des Ayyūbīdes* (Thesis Doctoral: Université de Paris, 1971).

Service de reproduction des thèses, Université de Lille, 1972.

Sato, T., *State and Rural Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta's and Fallahun*. Leiden, 1997.

Sayyid 'Abd al-Fattāḥ 'Āshūr, "al-Fallāḥ wal-Iqtā' fi 'Aṣr al-Ayyūbīyīn wal-Mamālik." In *al-Ard wal-Fallāḥ fi Miṣr 'alā Marr 'Uṣūr*, Cairo, 1974, pp. 211–257.

Shoshan, Boaz, "Fāṭimid Grain Policy and the Post of the Muḥtasib." *International Journal of Middle East Studies*, 13-2 (May 1981), pp. 181–189.

———, *Popular Culture in Medieval Cairo*. Cambridge, 1993.

Toussoun, Omar, *Mémoire sur les anciennes branches du Nil*. Cairo, 1922.

———, *Mémoire sur l'histoire du Nil*. 3 vols. (in 2 binds), Cairo, 1925.

———, *La géographie de l'Égypte à l'époque arabe*. 3 vols. (Mémoires de la Société royale de géographie d'Égypte, vol. 8), Cairo, 1926–36.

Udovitch, A. L., R. Lopez, and H. Miskimin, "England to Egypt, 1350–1500: Long-term Trends and Long-distance Trade." In M. A. Cook (ed.), *Studies in the Economic History of the Middle East from the Rise of Islam to the Present Day*, London, 1970, pp. 93–128.

Wichelns, D., "Economic Efficiency and Irrigation Water Policy with an Example from Egypt." *Water Resources Development*, 15-4 (1999), pp. 543–560.

Willcocks, W., *Egyptian Irrigation*. 2 vols., London, 1913 (3rd ed.).

William, J. A., "The Khānaq Siryāqūs: A Mamluk Royal Religious Foundation." In A. H. Green (ed.), *Quest of an Islamic Humanism*, Cairo, 1984, pp. 109–119.

———, "Urbanization and Monument Construction in Mamluk Cairo." *Muqarnas: An Annual on Islamic Art and Architecture*, 2 (1984), pp. 33–45.

Winter, M., "Re-emergence of the Mamluks." In Thomas Philipp and Ulrich Haarmann (eds.), *The Mamluks in Egyptian Politics and Society*, Cambridge, 1998, pp. 87–106.

<和文>

五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』刀水書房、2011年
石黒大岳「ブルジー・マムルーク朝時代におけるナイル満水儀礼の執行者たち：マカームの登場と
その背景に関して」『オリエント』45-1 (2002年)、120–141頁

石田進「エジプトを支えた「水」の知恵：ナイル流域の灌漑法（特集：ナイル川：古代エジプト文

- 明の母なる川)』『Front』16-4(184) (2004年)、リバーフロント整備センター、34-36頁
- 板垣雄三・後藤明編『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992年
- イブン・バットゥータ、家島彦一訳『大旅行記』全8巻、平凡社、1996-2002年
- 兎原卓「ファーティマ朝時代のディーワーン」『西南アジア研究』42 (1995年)、1-19頁
- 「ファーティマ朝のディーワーンⅡ」『東海大学紀要：文学部』64 (1995年)、91-110頁
- 「ファーティマ朝前半期の初期規範」『西南アジア研究』52 (2000年)、19-37頁
- 「ファーティマ朝時代の初期の分類と職掌」『東海大学紀要：文学部』78 (2002年)、240-250頁
- 大塚和夫「ナイル川灌漑農業における水・土地・労働力：北スーダンの事例より」大胡欽一ほか編『村武精一教授古希記念論文集 社会と象徴：人類学的アプローチ』岩田書院、1998年、409-421頁
- 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年
- 大稔哲也「参詣書と死者の街からみたコプトとムスリム」『史淵』138 (2001年)、1-32頁
- 加藤博『ナイル：地域を紡ぐ川』(世界史の鏡 地域7)、刀水書房、2008年
- 「ナイル川をめぐる神話と歴史」水島司編『環境と歴史学 歴史研究の新地平』勉誠出版、2010年、113-123頁
- 川床睦夫「エジプトとナイル (公開シンポジウム：2001年度後期公開講演会・シンポジウム「ナイル基層文化とイスラーム)」』『イスラム世界』60 (2003年)、47-50頁
- 菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ：出身階層と経歴を中心に」『東洋学報』64-1/2 (1983年)、131-176頁
- 「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について：ワクフ設定文書の再検討を通じて」『藤本勝次、加藤一郎両先生古希記念 中近東文化史論叢』同朋社、1992年、47-67頁
- 熊倉和歌子「後期マムルーク朝におけるエジプトの土地文書の諸相：オスマン朝期『軍務台帳』に見るマムルーク朝土地台帳とその利用」『お茶の水史学』53-9 (2010年)、41-83頁
- 「マムルーク朝後期エジプトの土地調査記録の継承と更新：イブン・アルジーアーン『エジプトの村々の名前についての輝かしき至宝 al-Tuhfa al-Saniya』の再検討を通じて」『東洋学報』92-1 (2010年)、95-120頁
- 「マムルーク朝後期エジプトにおけるイクター保有の実態：オスマン朝期『軍務台帳』にもとづいて」『史学雑誌』121-10 (2012年)、37(1721)-58(1742)頁
- 「16世紀のナイル灌漑と村落社会」長谷部史彦編『ナイル・デルタの環境と文明』共同利用・

- 共同研究拠点イスラーム地域研究／早稲田大学イスラーム地域研究機構、2013年、49-75頁
- 暦の会編『暦の百科事典』新人物往来社、1986年
- 佐藤次高「アリー・ムバーラクのエジプト農業社会論」『アラビア研究論叢：民族と文化』日本サウディアラビア協会・日本クウェイト協会、1976年、277-294頁
- 『中世イスラム国家とアラブ社会：イクター制の研究』山川出版社、1986年
- 『マムルーク：異教の世界から来たイスラムの支配者たち』東京大学出版会、1991年
- 『イスラーム世界の興隆』（世界の歴史8）、中央公論社、1997年
- 編『西アジア史①アラブ』（新版世界各国史8）、山川出版社、2002年
- 『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店、2008年
- 佐藤次高・福井憲彦編『ときの地域史』（地域の世界6）、山川出版社、1991年
- 佐藤政良「エジプト・ナイル川の水利用」『農業土木学会誌』59-11（1991年）、93-98頁
- A.シリル・ベクチャーリン（A. I. Silin-Bekchurin）著、福田仁志訳『灌漑地の水収支』東京大学出版会、1963年
- 清水宏祐「十字軍とモンゴル：イスラーム世界における世界史像の変化」歴史学研究会編『世界史とは何か：多元的世界の接触の転機』東京大学出版会、1995年
- 志村博康『現代農業と水資源』東京大学出版会、1977年
- 鮎川登「エジプトにおけるナイルの水資源開発」『河川伝統技術』5（2009年）、地域開発研究所、19-40頁
- 鈴木弘明『エジプト近代灌漑史研究：W・ウィルコックス論』（研究叢書343）、アジア経済研究所、1986年
- 長沢栄治「エジプト：灌漑制度の新段階」堀井健三・篠田隆・多田博一編『アジアの灌漑制度：水利用の効率化に向けて』新評論、1996年、419-456頁
- 『エジプトの自画像：ナイルの思想と地域研究』東京大学東洋文化研究所研究報告、東洋文化研究所叢刊27輯、2013年
- 日本イスラム協会ほか監修『新イスラム事典』平凡社、2002年
- ノーマン・F・カンター、久保義明・樽崎靖人訳『黒死病 疫病の社会史』青土社、2002年
- 長谷部史彦「一四世紀エジプト社会と異常気象・飢饉・疫病・人口激減」『歴史における自然』（シリーズ世界史への問い1）、岩波書店、1989年、57-82頁
- 「イスラーム都市の食糧暴動：マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』612（1990年）、22-30, 53頁

- 「カイロの穀物価格変動とマムルーク朝政府の対応」歴史学研究会編『ネットワークの中の地中海』青木書店、1999年、144-171頁
- 「王権とイスラム都市」『岩波講座世界史講座10 イスラーム世界の発展』岩波書店、1999年、247-267頁
- 「オスマン帝国治下のアラブ地域」『西アジア史①アラブ』(新版世界各国史8)、山川出版社、2002年、329-394頁
- 林武「都市化と人間類系：カイロの市井人の理想像」『思想』582(1973年)、岩波書店、77-96頁
- 松田俊道「マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱」『東洋学報』74-1/2(1993年)、061-088頁
- 森本公誠『初期イスラム時代のエジプト税制史の研究』岩波書店、1975年
- 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店、1991年
- 『海域から見た歴史：インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2006年
- 山田秀雄編『植民地社会の変容と国際関係』(アジア経済調査研究双書第170集)、アジア経済研究所、1969年
- 山野明男「ナイルに依存するエジプト農業の一考察」『愛知学院大学教養部紀要』58-1(2010年)、1-17頁
- 湯川武「マムルーク時代初期のワジール制」『イスラム世界』16(1979年)、17-32頁
- 「ヒスバとムフタシブ：中世イスラームにおける社会倫理と市場秩序の維持」『国際大学中東研究所紀要』3(1988年)、61-83頁
- 吉村武典「バフリー・マムルーク朝期における水利行政に関する一試論：ナースィル運河の掘削事業の経緯を中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』49-4(2003年)、19-32頁
- 「マムルーク朝時代のナイル地理書：エジプトに関するファダーイルの書の史料的分析」『史滴』30(2008年)、031-048頁
- 「「批評と紹介：S.J. ボーシュ著『エジプトとイギリスにおける「黒死病」：比較研究』」『東洋学報』90-1(2008年)、029-035頁
- 「バフリー・マムルーク朝後期のナイル治水事業：ジスル・マンジャク建設の経緯を中心に」『史滴』32(2010年)、01-016頁
- 国土交通省 HP：<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/hakusho/h20/data/html/js004090.html> (2014年1月3日最終アクセス)